

52.5
198

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{cm} 1 2 3 4 5

始



9.2.13



花の心葉

花の心葉

花の心葉

大正
13. 6. 28
内交

毛織の流行に就て..... 105
 寄席についでの話..... 111
 落語断片..... 115
 鸚鵡石..... 118
 老役の顔..... 120
 新富座によせて..... 122
 古劇「うららうに」就て..... 125
 新富座を見て..... 128
 神靈矢口渡..... 134
 夢物語..... 141

挿..... 繪.....

清談 (断片)

此の手紙體を以て原稿に代へます。その後引きつゞき風を引いてゐて思はしくありません、つひ締切の夜となりました。

主幹Mの様。過日は御逢ひしていろいろと支那朝鮮の美術のことを語り、あゝ云ふ清談は非常に氣持よいものだと思ひます。あゝ云ふ話をするにあとで心が浴みでもした様な清地さを感じます。字のまゝな清談で、俗臭や雑事の影を交へず、互ひに興味なり美の感情を以て語れるからです。私は支那の繪によくある高士が山間で盃を交へてゐるところだとか、竹林七賢などは云ふ迄もなく、全くあゝ云ふ境地の人は互ひにどう云ふ話をし會つてゐるのだらう、と想像すること

があります。曾てラスキンの本で或る一節を読みましたが、それに、空は萬人のもので何所からも誰にも見える昨日私の書齋から見ると夕方西の空でミルク色の雲の峯が美事に崩れたが、

あれを君は見たか、とあるのを讀んだことがあります。そして云ふに云へぬ美しい情懷を感じましたが「清談」には此の美しさがあつて、氣持がいい。

朝鮮金剛山の或る岩のところに古い碁盤目が刻んであつて、説明に、之れは昔仙人が此所へ出て來て碁を打つたあとだ、と云ふところがありました。その心意氣が大いに氣に入つたことがありましたが——さう云ふ清談氣分のことを思ふと時が輕快に過ぎ去る。今日はもう夜も更けましたが、過日の貴君との話しを想起して、その清談を記して見ませう。改めて讀者の前に。

で同時に之れは一綴ぢの原稿となつて明日貴君の手元へ郵送出來るでせう。何かまとまつた問題のことは又日を改めて記させてもらひます。

私は貴君が過日云はれた北京の文華殿は大ものと云つてはないが、明末以後のものに、あすこでなければ見られぬものがあると云ふこと、それから、所詮日本の京都あたりで支那のものを見た上でなければ、いきなり文華殿を見ては納得しがたい、と云ふこと——頗る同感に感じますし、一家の見と思ひます。私は貴君のあゝ云はれたところを思ひ返して見ると全くこの見解は妥當だと云ふことを、益々確かに感じます。

で、實は私は京都で支那のものを兎に角一通り見ました。その上で文華殿を見たのですが、

貴君の様に、あすこのものは特に清朝ものに他に見がたいものがある、と云ふゆとりある見解、それは、私は持たずにいきなりあすこを見ました。かく迄もなく御察しのことでせうが、如何なる名作があらうか！と云ふことを期待して。

結果は、存外つまらなかつた、と云ふところでしたが、然しさすがに畫かきが畫を見るのですから、つまらつまらないは第二問として何かしら心へ感じるところある、その點で——しかし私は之れに就ては曾てかなり詳しく記しましたが——仇英のもの、錢選のもの、それから元の或るもの、作者は忘れたが澤山にある南畫山水のもの、概して小幅に感じもしましたし、好意も持ちました。

思へばその「名を忘れた南畫小幅」の中に貴君の云はれる文華殿の特色の清朝ものはある筈なんです。私はそんなに注意しては一々見ませんでしたから記憶がおぼろですが、残念なことである。成程、あれ等は餘り他ではたしかに見られませぬ。過日の清談以來座ろにもう一度あれ等が見たくなつております。

仇英、錢選等の作はかなり注意して見ましたから、今もよく覺へてゐますが、それ等は私の京都仕込みの支那畫觀を以て、さそくに味へる味感のものでしたらう。私の餘り丁寧には見なかつ

たあすこの清朝ものは、さすがに北京の北京くさゝ、宮殿の宮殿くさゝもあつて、あすこでなしには味へぬ一味のものでしたらう。私もそこ迄舌端を細かにして向ふのものを味ふことはあの時しませんでした。惜しいことをしました。

とは云へ、汎藝術的に云つては、所詮それ等は私の當時感じた仇英、錢選に及ばぬ。云ふ迄もなく、日本の京都にある支那の大作に比しては末梢と根元の大差があつて及ばぬ。自分がそれを根元を落して末梢を容れた、とは思はずにすみませんが、而し末梢と云へども又そこには美感にいい味がある——私は過日あるしやれた小料理屋で床がけに清朝仕込みの南畫小幅を見たことがありましたが。中々いゝ味の一憶のものでした。たしかに、文華殿の清朝ものには之れよりいいものが數多く並んでゐたことゝ消へかゝつた記憶を今更回想します。

全く、繪は實際「繪」でさへあればしかしそこに程度は云ふまでもなくあれ——何かしら味感があつて、捨てがたいものです。私は益々繪が好きでたまりませぬ。鑑畫にも充分私の「時」は有要に經つてくれるでせう。尤も自分が作家でまだ未熟の爲めに、鑑畫も屢々ゆとりのないことがあつて相變らずため息をついて見たり、焦燥を感じて見たり、寂しかったりいろ／＼キズだらけですが、どうか年をとつたら安心立命して靜かに畫事を味ひ、山間の高士の様に木の葉を見

ても、土を見ても多分心が和らぎ、友達と竹林清談ぐらゐる淡々として見たい、と思ひます。呵々。生活、日常、仕事凡てやにつこくていけません。しかしさう早く年をとつても仕様がなないが、今日雨の日には、私はさつき窓外風景を描かうと思つて、しかし目の前の笹の葉が動くので少し邪魔で腹を立てゝみました。が、あの葉つばもさわ／＼動くのを虚心平氣で見られる生活は有るだらう。文をかくにしても心の底から「つれ／＼なるまゝに」とかける生活は、美しいと思ひます。いろ／＼の點に修業が足りなくていけません。

では、又改めて記します。午前二時に近くなりました。今月は之れにて失禮します。

(十一年八月號 支那美術)

浮繪を買ふ

(鑑畫日記の一)

四月十五日。午後二時頃から南明倶楽部の浮世繪展観へ行つた。会場へ上つてとつつき廊下に繪本や歌本の類が順序よく並べてある。先づそれから見て行くと、一わたり端まで見るうちにたしか北齋の「繪手本、武者繪盡し」と、筆者は忘れたが、彩色のある人物畫帖とが目についた、目に付いたと云ふのは「買はうかと思つた」その候補の意味である。

かう云ふ浮世繪の會へ來ると「何か買はう」と云ふ氣がいつか氣分の影にかくれて、芽ぐんでゐる。それでそこに出てゐるものを鑑賞すると同時に「どれを買はうか」と云ふ選擇の眼が又働らいてゐる。で、之れは又(私には展覽會と云へば浮世繪の場合にいつも獨特な)楽しみな氣分

だ。——引いて考へるが我々の作品展覧の場合に繪を買ふ愛好家の氣持は、又之れと同種類のものかと思ふ。尤も歴史の中のものゝと現存の人の繪とでは、選擇にいろ／＼目安は變らうと思ふが、もしそれ等の點を書き解いてくれる人があつたらそれは我々にとつて可なり趣きの深い讀みものであらうと考へる。私には想像でおよそはわかる。然し實感はないのである。(但此の實感がいつか自分に來ないとは限らないが。)

——その北齋の「武者繪盡し」と失名氏の人物畫帖とが目についたが、それは之等の適確な素描に學んで(私には)風景畫への點景人物に參考となるところがある、と思へるのだ。鎧武者が或ひは槍を突いて身がまへ、又は床几にかけ、刀を持つてゐるものもある。騎馬のものもある。形ちに筆者(北齋)の癖はある。然し小さなしつかりとした素描人物である。ゆつくりと見て一線一筆此の小さな人物の素描を味はつても中々得るところがあるし、殊に三四枚寫して見たら形ちの出し方に成程と思ふところがわかるだらうと思ふ。……然し實はそれには女やあきんだ達の普通風俗のものゝ方がいゝのだ。此の武者繪は見るとキビキビした素描に感心する。然し此の本でなければない受感の味と云つては、別にならないのである。より立ち入つて云ふと此の本は此の「繪手本」の形式で、然し「武者盡し」ではないと一番いゝ。尤もよくある「北齋略畫」より

は此の武者繪の方がよく描いてあるが、——何か同じ此の手で世態風俗のものを描いた本はないかしら? 中途から、「帯に短かしたすきに長し」の氣になつた。

で、筆者の名を忘れた人物畫帖に目が移つたのだが、之れはその枯淡な彩色が中々いゝ。人が澤山にかいてあつて(紙の地色は澁茶)墨線の早がきへ活達に藍と僂緒が塗抹してある。ところがその塗り方が早筆とは云へ、ものゝアクセントをよく心得てゐて、パツと開いたあんなの大きな口をはつきりと白ぬきにして利かせて見たり、或る侍の様なやつは、藍棒槌の袴で存在が、誠にはつきりとしてゐる。その他、巧みに少ない色が或ひは點、井けた、ベタ塗り、くまどり……などで繪の中のものに適應し、なまじの多筆より段ちがひに生きて、豊富なのである。これはこつちの仕事へ非常な參考になると思ふ。尤も之れも此の本には限らず、かう云ふ畫帖彩色のものには屢々ある事だが。

只此の本がどうも見る眼に氣になることは——或ひは作者は曉齋かもしれぬ——線が動きすぎて粗笨の感を免かれない。やつつけと云ふ感じや通俗な臭ひがする點である。それが又特別の畫品には成つてゐるのだが、私の好みには、どうも此の味がびつたりは來ない……

私はその二冊を本の陳列の中から選り出したが、又そこへおいて改めてもう一つ先きの陳列へ

移つて見た。そこに北齋の「小紋帖」があつた。あれか？と思つて頁を繰つて見るとあれである。思つた通りの感じが各頁から出て来る。で、これは見るのはあとに、買ふ方を先きにして、無くならかうちにと云ふ氣もある——手にとり上げたまゝそれをすぐと帳場へ持つて行き名を云つて、歸り迄預けることにした。

それらか氣を變へて繪の方を見たのであつた。

○

繪は例に依つて順に並べてあるとは云へ、變に雜然として、一所くたに眼にうつる、「全く眼移り」のする、且疲れる陳列である。丁度北京の文華殿と同じだ。

然しどうせいつもの事なので成る可く隣りへは視野をかくして、感じの素直に来るものを順に見た。それ〴〵十疊じき位の大きな間に低く一面の張り出しをこしらへて、その上にすき間なく錦繪がぎつしりと數室に涉つて展べてある。一枚置きの箇所もあり同種類の繪が重なつてうづ高くなつてゐる所もある。——で、ぐるりが通路になつて通路の背に當る壁や襖へは又、虫ぼしの様にかけてがかけてあるのだが、此の有様は今更かく迄もない。

此の通路の背のかけじに就ては、之等は肉筆だがさして目を牽く作もなかつたから、略記しや

う。只、榮之流派の女の立委が一枚目に付いた。或ひは値が安いので「何故かう安いのだらう」と目に付いたのかも知れぬ。だが、さう「安く」とも買つては來なかつた程度である。一寸いいのだが、それよりいゝものが他に幾らもある事は又直ぐに感じる。

——値段は誰が付けるのか。或る最々近の某氏の見るとたへぬ版畫が××圓で、それが榮之流派の今云つた肉筆と同値である。もしも自分に判斷させれば某氏の版畫が値の律ならばこつちの肉筆はその十倍でいゝ、然しそれでは高い。或ひは××圓位ひで此の（非常に保存の悪い）かけじは先づその邊かも知れぬ。すると某氏の版畫は先づ紙代位ひのものである。——これは然し何所にでもざらにある事で、珍らしくないことだ。

よく人は今どき錦繪を買ふと損をする。もう商人の方でよく知つてゐて中々相當な値段を云ふ、と云ふことを話すが、私はどうかと思つてゐる。動きの面倒な「金」がとてもおいそれともの「善さ」に追ひ付くものか。とは云へ、之れはこつちが錦繪の美點を非常に買つてゐるせゐかもしれないが、もし着物を買ふ位ゐの金で今錦繪を求めたらどんなにいゝ作が手に入るだらう。こんな僅少の金や何かで手に入るものではない。さらに賣り買ひして世間に流布してゐるが、その中にどうして中中世の珠玉に値ひするものがあるのである。思立立つて——まあ金さへふところ

にあれば——夜一二時間御成道を歩いて、根氣よくすればそれに大して珍らしぶつかる。まだ「安い」ものである。——無論こんな事はおまけに云ふので、私の意見でも何でもないが、たゞ高いとよく云ふ人に高くないと云ふ事を云ふ。世界の錦繪の本場の（その盛期からもまだ何世紀とは別段経つてゐないのである）東京の繪かきが云ふのだから先づ間違ひなからう、呵々。それでも或るものは又出鱈目に高いし、ものに依つては既でにどれだけ金を積んでも手に入らない稀品も（わりに近世のものにさへ）出来たが、まあ金のことは、之れ以上記すのはやめにしやう。

私は今日、此所（浮世繪展覧）で何か新規に心へ来るものを探さうと思つてゐる。それはいつも展覧の度びに期せずしてある事である。今日も亦あるだらう。それを豫め期待して、ゆつくり、電氣のつく迄、その各室を巡覽した。

その結果私は最後の室まで丁寧に見た上で、或る一箇所に今日の關心も——従つて繪を買ふ選擇も——集中する點を一つ見付けた。それははづれの室にある浮繪五六點の陳列箇所である。

尤もそこへ行き當てる迄には私は多くの閃視を種々の仕事へ投げた。又は種々の仕事からこつちへ撃つて来る閃視を感じた。相變らず廣重の仕事は立派である。たゞ私は近頃廣重には多少な

じみになつたので、見るもの悉くに驚くと云ふよりは、批判も好みも生じて、殊に此の前本郷赤門クラブの時につい買ひのこした「霞ヶ關」遠見の版のことがある。その獨得な素描と云ひ、しつとりとい面に浮んだ色、殊にその版のよさ、構圖の美しさ。釣りおとした魚は云々と云ふことを云ふが、私はその時それを求めやうと思つて、しかしついても一枚の別のところにある「霞ヶ關」横繪と味はひを見比べに行つた間に、或る他の人に、買はれて了つたのであつた。

そのことがある。つまりその味のことを「さがすならあれを」と心がける。意地のわるいものだ。逃すとめつたに再び出逢はない。で、その他の味の度重は、今日はどうも手が出ない氣になる。さすがに——よく見る——大川を背景にした女の三人立ちの三枚續きには今日も感心して、欲しい氣を起したが、之れは少し今日新規の關心と云ふよりはいつもの好みに片よるので、何れ改めてあの味の特に欲しい時に、と思つて見合はせる。

その他、或る團扇繪の女の顔。（後期の作と思はれる。その非常に濃い藍なり紅なり。丹念な鹿の子模様、みじん格子の豊満さ。衰退期ながら美しいものである。）又は紙の大體の白地に淡すみ素描でそれに色は朱と黄、紫、淡緑などを點々とかけた、よく見る——筆者をつい忘れて残念なことである——特別なコムボジションのもの。井けたに若衆と娘の圖だとか、寶引き、摘草

——之れは恐らく春信後期の誰かの創始と考へる。材料の似た春信より屢々甘くなく、仕事が後期味で軽くなるが、中中形致がやはらかで美しい。——之れ等は私を立ち止まらせた。

この後記のものに若しや菊慈童はないか？探して見たが見當らなかつた。又、その畫境から引いて何か此の淡彩——然しその彩、淡が此の上なく利いて、彩畫と云ふより豊富な一面の素畫の味感を溢へる作である——で顔を大きく主題に扱つた（そこには多分陶製の唐子やまごが持つ様なミステイックな深さを持つだらう？）作はないか？之れも探して見たが見付からなかつた。で、結局、こつちからさうして作味を注文してかゝる迄もなく、向ふの作味それ自身に充分一境の魅惑のある、前に云つた數枚の浮繪うきゑの個所に、心を集めたのであつた。寧ろ集めさせられたのであつた。

——私は之れは非常にいけないことだと思ふ。之れから注意したいと思ふが、かうかいて見ると思ひ當る。屢々畫品や味ばかり見てとんと作者の名を記憶しない場合が次ぎ次ぎに出て来る。

先きに此所に記すが、私はその浮繪の中から一枚殊に新鮮に私を撃つものを求めて來たのであつた。今それを見ると右肩に「江戸名所眞崎之圖」下に「永壽堂西村屋□□」とある。西村屋の下二字は消へてゐる。肝心の繪の作者の名はないのである。

で、氣が付くがその時私の見たもう一枚のものに、——それは近江八景を一圖に聚ため浮繪で、

左手に山がそびへ、右は湖水になり、湖心に浮御堂、落雁、長橋、歸帆。山には寺が建つてゐる。その寺の縁樹の間に忍ぶ朱塗り、殊に、山の思ひ切つた海老茶が極めて豊滿な、華麗のくせに濛い進んだ配色を織りなしてゐた。湖水は薄すみで點景は黄であつた。この一幅の温かな色階を想像せよ。（恐らく此の小ささで此の重厚さは世に此の版畫世界の他はに類例がないだらう。殊に錆びた滋味のある西歐のものには汲みにくい深さ）——それには、私のよく知つてゐる名があつた。（豊春ではなかつたが）私は私の「眞崎の圖」にもその名があることとつい感じて、そのまゝ買つて返つたのであつた。會場で見た時には多分二枚とも同一人の作と感じた。今はどうしてかその名を度忘れして思ひ出せない。

只この二枚のうちでは今云つた近江八景よりも、この「眞崎の圖」の方が味が深く、微妙で魅惑が盡きないのである。（近江八景の方は一見——就中その山の海老茶のマツスに依つて——刺戟が著しい。然し何所か配色に淺さの見える個所がある。色階は二圖共に同じだ。その配色に比べて見ると——第一印象のショックが落付いた上では——眞崎の圖の方が一段省察の深い感じから塗られて、色それ／＼の配合が汲めば汲む程生きて来る。私はそれでこつちを買つて來た。）

で、今は蟲の善い心付きを起すのだが或ひは此の繪は、強かつたとは云へ一寸淺い「近江八景」

圖の作者と同一人ではなく、もしや豊春の繪ではないか、と思ふことである。豊春の「雪中旗亭」圖を見ると同じハムブルな楷書味で「永壽堂西村屋」その下に印行が捺してある。——が、かう云ふことは、それは度々浮世繪を集める人の好んで引かゝる、面白いが屢々私感に走るよくない(?)趣味である。私は先づやめやう。然し批判だけ趣味でなしに、云つておかう。この眞崎の圖は、——その筆者は誰でも——畫境に於て中々(浮繪では先達の)豊春の「雪中旗亭」や「深川八幡之圖」に及ぶ。殊に畫技の金將とも云ふ可き朱の使ひ工合に冴えた非凡なところがある。……:…それから此のあとの句は、所詮「いゝものをさがして來たぞ」と云ふ、どうせそれなしにはすませない可愛いゝ子供つばい一ことだ。

私は此の繪から配色の秘鍵を少なからず教はる。遠見に川の八の字形が畫中へ走せ込んで、右岸は木立とS字の道、一帯にテレゼルトのマツスへ黄と紅を點綴し、道は白ぬきに巧みに利いてゐる。

左岸には家が並んで「大でん樂」なら茶」の店が次第に向ふへ小さくなる。人が右往左往通る。その配色の適確なことは！但朱とテレゼルト薄すみ三色のあやである。しかも點々それが川岸を遠くまで連なる形美は、百色眼鏡より美しい。——眞中の薄すみの川の中には黄色の屋根舟、

荷足、てんま、あみ舟がチクザツクに三を五に見せて巧みに浮べてある。朱の幕をたれ、緑の人。ところどころそれが(わざとの様に)白板とすみ板とすれ合つてゐて、その爲めに川の中へボツカリと人の頭の白ぬきが浮いてゐる個所などある。それが又無ければならぬ一つの味である。

川岸の家のうしろは天へ尖つた樹木で、中に二軒の社の破風を濃緑の中に抱いてゐる。川幅の極まつた遠見のつきあたりには、わざと浮かして、すつくと三つ遠山が空へ入れてある。空は畫面上から紅ぼかしておひかぶさる。中景に黒く、丹念に鳥が十數羽亂れ飛んでゐる。——私は思ふ。此の鳥は必らず繪が出来てから最後に入れた、と、その場合、如何に筆者が畫中に融けて此の丁寧な鳥(點程でしかしよく見ると一々に素描がきびしいのである)を描き込んだか。私はその畫境を懐ふと、そこに殉じた^{Other}他人事でない域に撃たれる。

○

もう電燈がついて、此の會は今日六時迄とか云ふ。私はそれ迄には先づ見るものは一通り見通した。それで出口の帳場へ寄つて、歸ることにした。——そこで買物の勘定をしながらフトわきを見ると、算木に笠竹、天眼鏡を配して下を藍に染めた非常にきつぱりとした表紙の、小本「心の幾ど一」が目に付いた。表紙の片わきに○ねかひこと△うせもの□まぢ人、と小がきが入れて

ある。それから表紙裏に鏡うらなひの仕方が記してある。

出鱈目にバツと頁をあけて見ると、天地否と云ふ卦で、「はじめよろし、のちすこしよろし、ねがひことさはりあり、待人つれありておそし」。本文のどゞ一には「まゝになるならあのてれがらふかりておもひをしらせたや」とある。——それが挿繪の水平線の上に淨瑠璃の字で記してあつて、繪には下から松ヶ枝が一寸顔を出し、遠見は岬と水平線上の帆かけ舟、手前に一本電柱が立つて、つうと斜めに電線が小氣味よく引いてある。

その他、面白い本である。繪も中々いゝ。「こはい夜みちもただ一すぢにぬしにあひたい戀のよく」の提灯を提けて一寸小腰をかゞめ、小褌をとつた女のうまさ。おこそ頭巾をかぶつて首をかしけ、うしろに一匹背中のすみのイヤに感じのある犬が吠えてゐる。立て繪の着ものに黒えり、すそをふくらませて、——何と風情のある姿であらう——木ぐりの高い下駄をはき、足を揃へてゐる。帯のかけが三角に腰から飛び出してゐる。そこだけの黒ぬりが頗るきいてゐる。

それも買ふことにした。すると係りの人が「どうぞ之れもお持ちなシテ」と云つて「開化新調端唄集」と云ふのを添へてくれた。それは繪は拙い。(然しそれでも中々感じはある。)大ていかへうたを繪ときした新ものだ。ザンギリの若だんな風なのが繪の着ものに櫻をかざして、向ふの遠

見の女と見返つてゐる圖などある。明治十五年六月出版としてある。

——この明治味のものとは又凡て版畫と云ひ、建ものと云ひ、風俗と云ひ、歌と云ひ、こつちが好意を持つと中々味はひの出て来る、過渡の面白いものである。中々あなどり難いものもある。

私は此の間寄席で久しぶりに橋之助を聞いた。いろ／＼昔からの遊い端ものをうたつたがあの人が三味線を持つて、恐らく此のどゞ一の本の挿繪にある人と同じ種類の好みの着ものを着て、心持ち背をかゞめ、きび／＼とした有名なばさばさで歌ふ、あの歌をきくと、全くその節や聲調の中にあの人の生活全體がある様に感じる。感心したことがある。で、その時橋之助は「之れは古い歌だ」とも何とも云はずに、平氣で、一つその明治味の「主と内通の電話をかける」とか「泥棒にはエレキをかけたが」と云ふ、大津繪をうたつた。節はよく、歌は生木のやうだ。しかもそれが今は枯れて。そこから一つの時代とも生活とも云ふ様なものが説明なしに髣髴とする。一種へんに味感に食ひ込まれたことがあつたが……………

此の二つの歌本はそのことなども思ひ起させた。

○

私はそれから電車で殆んど暗くなり切つた時分に、家へ歸つたのであつた。電車で「北齋小紋

帖」を一通り見た。之れはかねて之れのあることを知つてゐた、つまり今日うまくぶつかつた一つである。「山路のことは樹夫に問べし。海底のことは泉郎に問べし。餅は餅屋に……小紋帖のことをしも畫工に問ふ。條なきに似たれども、嗚呼此の翁の筆をとつては、妙を繪圖引ぶん廻し。天の圓なる、地の方なる、千里を翔る雲鶴より、泥水に踊る子子小紋まで寫し得ずといふ事なし」云々と云ふ種彦の序がある。

種々の模様を圖解したものだ。「八つ手麻の葉」とか「流萬字」、「つりわらび」、「つりいなづま」……など五十ばかりの紋様が丸の中に圖解してある。で、一々の圖にその模様組立ての部分、つまり要素のところかぬき出して別に示してある。「はやわりの法圖の」とし」と云ふ風に分解してある、或る感じでレオナルドの描いてゐる結び目模様に似た美しさも忍ばれる。非常に複雑である、數學で云ふ因數分解の様に因子で解き切れるクラシカルな正條さ。

今の作家はかう云ふ模様美に對して概して無關心の様に見えるが、尤も規範も乏しいし日常生活が包まれる年代の味感、風俗、建築美等にさつぱり啓發するものが少ないから、無理もない。例へば善い風俗とか善い建米は一般の美感教育に必須のものである。——北齋の年代などは、さすが畫かきは何れもかう云ふ方面へ又手がけたものと思ふ。

云ふ迄もなく作家が結束してさう云ふ細緻の點にも目を向けよ、と云ふより、それは却つて動もすると美の祭壇を引き下げることになる。一人でいゝ。この世相の契點のところは美の鳴り響く人が出れば足りるのである。——今の日本の年代は美の點で種々に面白い時勢だから、早晚先きに一寸云つた過渡のねむれる明治美感が意識の中へ醒める時節はたしかにあるだらう。

○ 家へ歸つてゆつくりと今日手に入れた畫を眺め、又は見たものゝことを思ひ、繪本など見ていると、非常に心靜かなすがくしいたのしい感になる。と同時に、古人の美術品に誘發されて、和やかに美が心から汲み出される喜びも感じた。 大正十一年四月三十日了。(六月號、中央美術)

ベートフエンの盤

一

私は此の頃ベートフエンの音楽に全く感嘆してゐます。前にも時折り聞いたことがありましたが、今程心から身にしみて聞くことはありません。尤も蓄音器を通じて不取敢云ふのですが、いつか交響樂が上野にでもあつたら是非聞きに行かうと心にかけてゐます。種々のレコードでベートフエンのものを聞いて全く感嘆してゐます。

感嘆するものはベートフエンのみとは限りません。然しベートフエンに就中親しみを持つて、一番ベートフエンに素直に感心すると云ふ意味です。それに西洋樂に就てはまだ私は少くもそれに著しく心を展いてから、猶日も淺いし、廣くはさう大して聞き馴れてゐるわけでもありません。不取敢ベートフエンに依つて非常に心を撃たれ、その心を撃たれる味感に親しみをおぼえたと云ふ意味です。

何から音楽が心を撃つて来るのか。元よりその美を以つてだが、しかし何かからかうも深くありありとその美が心へ映つて来たか。——この回想は、必らず長く幸福な感謝す可きメモリーとなるに違ひない。

或る日——レコードの印しにopusとある——クォルテットをきいたのです。偶々心に仕事に就ての考へなり何なりによどもりがあつて、汗ばんでゐたには相違なかつたが、私は曲が進むにつれて、段々にその美を感じる事が前よりは親近となりました。寧ろるても立つてもゐられぬと云ふ感にされたのが本當です。テーマが續々と變轉し生き變つてあとからあとからと出て来る。こんくとして泉の様です。フトその事を美しく心付くと、それから曲の美に於けるエネルギーの強さに全く敬服しました。非常な健康さを従へてあとからあとからと潑刺としたテーマが湧き起つて来る餘程の内部に充溢した美、つまり内術品なしには、出来ることではない。少しのすきもなく、微妙に變轉して、然も微妙さ、つまりデリカシーに陥ると云ふところはなく——盤は四面でしたから時にして三十分強の間でしたらう。私はその間美しさに全く酔ひました。それから此の作家の曲が身にしみて聞きたくなりしました。

三

私はドイツの盤でエロイカを聞きましたが、感心しました。あれは葬送の曲かと思ふが、盤のせひもあるか、寂しい、しかし沈んだ美しいものです。殊に二枚目かいつものテーマを縫つて實に可憐な美しい裝飾が複雑に複雑にとからんで來ます。しかし少しも矢張り主幹の大きさは損はない。寧ろ心へ美しさが益々食ひ入つて來て、到底曲譜から人を離さなくするのです。そのエネルギーの美しい緻密さは先づ無類でせう。

然し全曲を通じて少しも好んで複雑になつたと云ふところはない。否、比較的單純な、屢々素材なものです。——私はそれをきいてゐて、全音が純金で出來てゐる様な重い美感を感じました。然も澄んでゐて、決して鈍重ではない。ワグネルの様に乾いた大きさに來ない。しつとりとうるほひを持つて親はしく、威風に充ちてきこえる……………

それから種々のものをむさほりききました。クロイテエル・ソナタに初めて感心しました。これは前にエルマンが弾いた時親しくききました。しかしその時にはどうきいたものか、今思ふと回想に浮ばない。只此度英國製の重くるしい盤が廻轉盤の上でまはるのをきいて、初めて身に

しみて感心したのです。

曲の名を一々に擧げることには繁雑になるから之れで止めますが——

三

いつか私の所へ或る會社員の従兄がやつて来て、一所に蓄音器をききました。私はかねて西洋のものより日本のものゝ方を多く持つてゐるのですが、不取敢それをかけて見ました。しかし従兄は餘り好まないと見えて、主人側の私ばかりのり氣になつて彼は餘り進んだ氣色に見えない。——その中偶々朝鮮の「春兒托領」と云ふ曲をかけましたが、従兄は「之れは不思議だ。朝鮮のものは何所から来てゐるか知らないが陽のところがある」と云つて感心してゐました。

私はそれから「僧尼判」と云ふ支那のものを——壊れた盤ですが一寸——やつて見ましたが彼は益々助かつた様な顔付をして、「それは陽のものだ。」音楽はかう行かなければいけない、と云つて初めて喜んでゐました。

彼は「陽」のもの、陽のものと云つて、つまり味の澁く來ない、支那にせよハワイのものにせ

よ少くもテーマの朗らかな音の延びたものを求めてゐるのです。日本のもの——尤もその時かけたのは陰も陰の歌澤「宇治茶」芝金、神樂囃「鎌倉昇天」と云ふ種類のものでした——は陰で、心持が減して來る。「自分の様な強ちそれが氣に入つてゐると云ふわけではない、職務をしてゐる者には、音楽でまでも陰にされてはやり切れないから」と笑つてゐました。

「.....それを然じ味はつて見て楽しむ心持はないかね」

「味ははうとする餘裕よりはいつそ音楽の方から明るく浮き立てゝくれて者を忘れさせてくれるのがありがたいのだ」と彼は云つた。さう云ふものが澤山からある。と云ふ意味で云ふ。では之れなんか」と私は思つて、入れものをそつくり違へてターキッシュ・マーチを不取敢かけて見ました。私もさすがに突差従兄と殆んど同じ心理になつたに相違ないと云ふが、此のマーチの單純なテーマであるが然も簡單に墮さない如何にもマーチのマーチらしい壯快な美しさは特別です。従兄は大いに喜んで「かう行かなければ、かう行かなければ」と云つてゐました。私もどうもさう思ふ氣にされました。

裏にモスコウスキーの「Bolero in D Major」と云ふのがあります。カスターネットか又は何か木琴の様なものか、——さう云ふ小氣味よく鳴り響く西洋獨得の音が華々しく出て來て、何か管樂器

が奏するテーマのところはわざと音が——よく云へませんが——角を丸めてそれを流麗に短かく間を早くしてあるので、拍子はターキッシュ・マーチと同じです。

愉快なものです。スパニッシュ・ダンスの1節としてありますが、如何にも聞いてみるとそこへ、この曲の空気の中へ、カルメンの様な、眼ぶたの瘻い女が肩をそびやかして出て来さうな感じがする。牛車があつたり水を入れる瓶があつたり、細い半ズボンの服装、黒い扇子、遠くに日の當つた山の連なる感じがする。決闘などもあり想に思ふ。

郷土感が濃く、フツとこの曲をスペインあたりを旅行してゐながら一人で聞く場合のことなど考へられます。——その間に妙に心寂しくなり、餘り愉快ではなく却つて陰氣に感傷的になりました。私の連想がさうしたのではなくなたしかに音の中にある情操が私を連想的にもさせ、感傷的にもしたのです。

で、この感はいつも此の盤をやると面白く思ひながら然し一方に餘り好ましくはなく、しかし何となくそれも感じて見たく、一種誘惑的に思ふ感じなのですが従兄は喜んでゐました。非常にいゝものだ、いゝものだと言ふ。——私もいゝものだらうと思ふ、餘りに感じがあるから。然しどうも精神的には強ちよくばかりは響きません。

第一聞いてゐる情操を健康には保たせてくれませんか。少くも私には。

私はそれから、猶従兄を喜ばすつもりでハイフェッツの弾いてゐる *Guilarte* と云ふ曲をついてかけて見ました。

静かな奇麗なものです。弾いてゐる弾き方はたしかにまういに相違ない氣持もいゝものです。

——然しどうもよくわかると思へない、この曲の中へすつかり情操なり何なりを融かし込む氣には私には殆んど成れません、そこで必らずしもこつちがこの曲をわからないと云はうよりは、向ふからわからせてくれないのではないかといつも考へるところがある。

それはこつちから「わからう」とつとめれば何も解不解はない、一寸した可憐な小曲にすぎないと思ふのですが、別にそこ迄はくどくも立ち入つては關心を持たないし。——多分西洋人が日本のものを聞いたたらこんな感じでもしはしまいか。曲をきいてゐる中に何となくはぐれて了ふ縁のうすい感じ——

兎に角従兄につき合つてそんな風にして蓄音器をきいた日がありました。

私は前には長く蓄音器嫌ひだったので。日本の曲に就て云ふのではなく洋曲に就て云ふのですが。よく友人のところなどで洋曲の盤を聞かされるとどうも殆んど音になじまない。で、つい聞いてゐる中に何所となくイライラした不愉快な気分になつて了ひます。うるさい感じや氣に入らぬ感じがリズムの一節ごとに湧き起つて、氣分を惱ませますが。

此の節はそれ程でもありません。然しチャイコフスキーのものとかシヨパンのもの、従つてバデュススキーの弾いてゐるピアノのもの、多くの提琴家のもの獨唱等……早く云ふと矢張り西洋レコードの大半のものは、おとなしく聞いてゐると云ふよりは二三枚きくとあとは少し馴れない音に身をまかせて曲をきいてゐるのが少し面倒になつて了ひます、と云ふのはとてもこつちには満足にはわからない感じがあまりすぎる感がある。

で、どうでもよくなつて了ふ。——豫めそれ等のものは「どうでもいゝ」スケール以上のものも初めから思ひませんので。

で、従兄の所謂、「向ふからこつちを掴まへてくれて離さないものゝほか」西洋曲は餘り私の耳には——今も猶——合はぬ様です。

ここは少し私感を記しすぎて、主題外のところへ筆が涉りましたが、兎に角、日本の曲なら何

でも喜んで私はきゝます。ムード次第で飽きずにいつ迄も味つてきゝますし、よくわかる愉快がある。ものによつては進んで味感に嘆じてきゝふける。

恐らくはそれだけに、一層西洋曲の或るものに對しては、つい聴覚が異端になるのでせう。早く云ふと、大てい味はわかるが、然しその味に對して強ち親近を感じない、シヨパンのものなどはどうも外國人のもので、こつちにはどうでもいゝものゝ感がわさはいするのです。その意味はこつちにはこつちで日本のものでびつたりときくに適した百千の手近かものがあるから、と云ふことになるでせう。

どうもさう思はれる。

私は餘り「西洋」は好きではありません。「好き」「厭ひ」で計れる範疇の東洋(日本)西洋では大の東洋好きで先づ西洋ぎらひです。早い話が電車などでも外國人と隣り合せはどうもきらひです……只此所にその好き、厭ひ以上の、直接心を痛く撃つて來るものがあつて、その點にさう云ふ西洋のものに對しては全く心を展いて驚嘆を新たにします。そこに導かれないと思ふし、刺戟を得たいと思ひます。で、ベートフェンなどは近來その誠に優なる一つの目標となつてゐるわけです。

五

之れは繪に就ても何れは同じ様に云へませう。

今上野にフランス展覽會がありますが、あそこにある繪は大てい先づ「味」のある繪です。さすがあんなものゝ「本場」だけにネチネチしたものとかな自由な汚ないものなどは先づない様です。大ていどうにか感じが出てゐる。

——然し、それはわかる。然しわかつたとて何になるでせう。どうせ末梢神経の味はうあつてもなくともいゝ様な他愛のない味感のものです。で、そんな味感のところにあくせくする作家は、——その批評的にはさる事ながら今は題外におくとして——私は思ふのです。なにもあんな巴里か何かのよその味をあゝ云ふ有るかないかの藝才の仕事で味はせられるには、殆んど當らない、つまりぬ感がする。

シャルル・コツテ程度なら先づ受取りませう。他は論ずるに足らない。

○

で、先づ私の立場としてはもつとセザンヌを見せてもらひたい。今月の或る雑誌に出てゐる程度のものでいゝからゴオホを見せてもらひたい。シャヴンヌなどは大いに見せてもらひたい。さ

う云ふ「日本にならぬものを見せてもらひたい」。

變な外國の味を無細工にいゝかけんに味ほせられるよりは、およそ藝才を味ふ點にかけてなら、我々は他の國民ではない日本人である——シャルル・コツテ位ゐるの藝才なら國芳門下迄行かずともふんだんにあらうし、オットマン・ヴラマンクの輩に至つては清親の弟子の井上安次で足りる。あんなへつぽこなものは、否そのもつと味ふに足るものが、御成道へ行けば今も山程積んである。今更あんなものにはびこられるのは先祖に對して恥だ。呵々。

一體さう云ふ様な心理なり好みで、如何にも私などは中川紀元氏の云はれる鎖國攘夷に似てゐる様です。——いゝかけんな外國は厭ひだ。

然し立派な外國は好きだ。

ベートフエンの味感に誠立派です。

とても日本にはあの風格のものは求めても有りません。

長唄の小鍛冶などは矢張り誠に立派なものです。世界の何所を求めてもこれ等のものは日本の

他にはありません。——しかしそれ故に一方西洋曲の例へばベートフエンなどは又音の組成から、テーマから、表現から、すつかり違ひます。ここにこそ従兄の云つた「陰」「陽」を借りるのがよく當るでせうが、第一根本に於て、美の質が彼我異なります。

私は双方を嘆じます。その一方のつまり陽の方のものは日本には全くないので、即ちベートフエンなりベルリオなり……を禮讃すると云ふ意味です。

所で、之れは既にそれから受ける唯心的感銘に於て、先きに云つた「好き」「厭ひ」の範疇以上のものだ。——好き厭ひの範疇以内のつまり味のものに就ては、私はどうせ日本は好むが西洋はさう好みも、と云つてわるく厭ひも、どうもしない。大體どうでもよく思つてゐる。で大ていわからない様だと云ふことになります。

六

私はベートフエンの種々のものをききました。一番心を撃たれて——好みから云つても——好きでよくきくものは此の頃レオノーレ・オバーテュアです。壮美とも云ふ可きものをひしと感じ

ます。殊に私の持つてゐる盤(ヅクター)では三枚目つり *Plato* のところになると、針にかけてから少ししてテーマが或る刻み込む細かい——深い——伴奏(?)の間に次第に末廣がりに間を早く縫ひ出すところがありますが、私はあすこを聞くと、心へ何か美しさの×木でもかゝつて来る氣がして、初めてこれをきいた時には、全く珍らしい緊張に撃ち貫かれました、恐らくどのドラマのクライマックスも及ばぬ緻密さかを感じます。

その感以來レオノーレ・オバーテュアは殆んど生活日々の上での一つの秘寶に例へて誇張でない迄にいそしんでゐます。

第五シムフォニーは何しろ立派なものと思ひます。しかし只レコードにするには大きすぎるせひか、盤を幾度もかへたりしてゐる間に稍もするとスキが出来て、今日はあつちを感じし、昨日はこつちを感じした、と云ふ工合になりがちですが、いつか弟にやつて貰つて室の電氣を消して聞いた日の事をいつも忘れません。——又さうして見やうと思つてゐますが、ほんものゝ交響樂できゝたいものです。

それから先夜第七シムフォニーをききました。痛く亢奮しました。丸で樂器を叩きつけてもするかの様に曲の中で縦横にテーマのあばれ廻るところがありました。深さの底をさらつた美

しさです。その美の不文律に徹底した大乗的な「力」には嘆じます。——セザンヌのパンの静物などにこの種の美しさが色で出てゐるやうかと思ふ。

第八シムフォニーは全曲があつたらさぞ美しからうと思ふが、フィラデルフィア・シムフォニーの演奏で例の奇麗な一節をきゝます。きつと演奏が非常にうまいに相違ない。その味が又一つには氣に入つてゐます。

第四シムフォニーはエッセラのバンドですがどうもいつも思ふ、音が少し何所か足りないかに感じます。然し所詮素人考へですからわかりませんが——實は過日或る會社の月報でエッセラの演奏服を着た横向きの寫眞を見たのです。ハーディングと逢つてゐるところですが、大變感じのいゝ姿です、愉快想に挨拶して、氣がるらしく口を開いて何か云ひかけてゐる。——それを見て以來この盤をかけると何所かにそのエッセラが潜んでゐる氣がして、殊に、この曲中には流暢たる喇叭が度々響きます。その度びに、正にこの水々しい音はあのエッセラから出る感にして、一つにはそんなことで（初めには不満足の盤でしたが）此の頃では矢張り好きな一つになりました。あゝ、又明日にも仕事をする前にゆつくりとレオノーレ・オバーテュアを聞きたいと思ひます。この頃ベートフェンにしきりに「凝つて」ゐるのです。 四月七日記了。（十三年五月號詩と音楽）

のんきに博覽會のこと

博覽會へは開會前に社會館へ三四度行きました。それは、その館へ兄の關係してゐる日本人道會（動物愛護會）から出品があつて、その飾棚を作る様に所望されたからです。友人清宮彬と二圖案——と云ふ程のものでもありませんが——して、空を飛ぶ天使だとか遠景の山など人を描いて（切りぬき）、四尺に七尺、奥行二尺位の棚を一つ飾つて來ました。

あつさり——一寸空の部分などは美しく——行きました。しかしそれだけにあそこでは他の裝飾に壓されて了つて、他のは何れもゴタゴタしたり俗悪だつたり、何しろ眼に付きます。我々のはさうでない代り目に付きません。

その後誰に聞いても誰もその棚を見て來ない——おほへてゐない——ので、さすが滑稽を感じてゐます。切角の人道會も骨折損のくたびれまうけだつた様です。で、その後棚を飾つた日のゴ

ミが思ふだにイヤでつい開會後は見に行きませんでした。

今日はからす下の弟が来たので、上の弟と三人連れでプラプラ見物に行つて来ました。私の家からは近いので歩いて行つて、みちく彌生町あたりの桃や櫻のけしきを感じしながら、行ききました。第二會場の横からはいりました。

大變な人なので驚きました。池を走つてゐる飛行機が大きな音なのでこと有り氣でイヤでした。池のとつつきから見た臺灣館だとか外國館を背景の景しき、真中にくろい辨天の宮があつて、中景を觀月橋が仕切つてゐる、あすこは一吋變な近世錦繪式な面白い味だと思ひました。何しろざはめいてせかしくしていません。

初めの館で材木だの竹を見ましたが感心しました。天井へ非常に高い太い竹が二圓だの三圓だのと云ふので、安い欲しい様な感じがしました。あの竹は二三本買つて来てうまく割ると、それを使つて建仁寺垣の様なものが出来たらう、と思ふのです。その上へ棕櫚をかぶせると一寸面白い感じが出て手水鉢の所だの庭のつき當りだの、少くも汚くはならないだらうと思ふ。雪でもふると面白いかもしれません。——此の頃ボクボクの庭石などが好きになつてゐます。京都の何所かの寺にある石組ばかりの庭は立派です。もしいまに家をこしらへたら、庭もこしらへて、

池や築山を作つて、よく浮世繪風景にあるあの庭の感じなどを一寸家へおくのもいゝ考へだと思つてゐます。田端の或る圍子屋に中々いゝ庭があります。材木や竹などはそれで一寸目に付きます。尤も半分本氣で半分出來心です。

此の間或る家から手頃の池を貰ふ約束が出来て、その池は古いのでセメンが厚くコケが付いて、中々いゝのです。そつくり掘り起して待つて來やうかと思ひましたが、少し掘ると向ふの家におこられて駄目になりました。で、錦魚や鯉、なますなどだけ買ひました。これは餘計なことですが。

觀月橋のはづれの所を會場では山形に歩道をこしらへて、上つて、又下りる様にしてあります。あの山形を遠くから見ると人の頭がボコボコ澄き沈みして、それが水平繪を劃して、空へつづき中々珍な面白い景しきです。あれだけを小さな板に仕切つて描いたら又面白い作になるでせう。餘程しかし素描がきかないと感じはなくなるが。

あの邊一體の機械のある館は、一々見たら面白いのでせうが、おせくで難義で見られてもせん。飛行機の風道とかの試験は神経を千切る様な音を立てるので、イヤイヤして見るにたへませんでした。しかし飛行機にのる人はいつもあの音のすぐあとか前で、器を操縦するのでせう。

考へるだけで、既でに出来ない悪い仕事です。

何所かに飛行機の爲めに今迄に死んだ人の肖像塔が出来てゐますが、たまらないと思ひます。もつと大きな額にして一人々々天井の高いグルリへでもかければ又尊敬心も起つてよき相に、あの塔は極くやつつけなもので、そこに飾られた故人の似顔をフト見るだけでもう痛ましい氣の毒な様な、何しろ感じたくない感じがします。何だらう？と思つて見て、矢庭に氣が付いて弱つたので今思ひ出します。

外國館のチエツク。スロバークの寶石は大變奇麗だと思ひます。いろ／＼ほしいものがありましたが寧ろあの室をつくり、ほしい氣もしました。壁紙も趣味がいゝ。大變奇麗で面白く、氣に入りました。

機械のあるところにはそれに係りの人が陳列のところいきつとゐるので、しかし又或るところには人形のおいてあるところもある。で、之れは人形か？と思ふと本ものゝ人で動いてゐる。之れは又おとなしい人だ！と思ふとそれは人形のことがある。大變面白いと思ひました。

或る女の人は餘りすまして、奇麗でちつとしてゐるので全くそれこそ人形と思ひ、平氣な氣で見つて、いきなりそれにふり向かれたのでギョツとしました。一尺か二尺しか離れてゐなかつ

たのです。

あとでおかしくて困りました。

それからいろ／＼のを見ましたが忘れませんでした。第一会場へは非常におそく入りましたが入るとすぐに何所もかも閉めるので何にも見ませんでした。自治館だけ見まして。東京の大模型に小さな電燈が付き、電車が動いてゐるのを面白く思ひました。

又いつか小學上級の從弟が来る約束があるからその日に行くでせう、美術館や南洋のおどりなどはその時見るつもりです。それからもう一度、何れ、夜間開場の時行つて見るつもりです。今日は歸りに池のはたの賣店を歩いて、天賞堂の賣店で友人に逢ひました。

その窓から例のうるさい水上飛行機がよく見えました。友人の云ふには、あれは軍隊から拂ひ下けに三萬圓とかゝつて、たびの廣告で一萬圓とつたから元は二萬圓だ、と云ふことです。その二萬圓をとればいゝのであゝやつてブーブーやつてゐるのだ、と云ふことでしたが、さう聞くと、あの悠長な姿が然しさもカセいでる相な氣の毒な感に見えます。何人はいつたらいゝのだらう、と云ふ様な餘計な計算をしながら歩きました。

はづれの朝鮮の賣店に大變奇麗な朝鮮の娘さんがゐて、一人は立て膝をして何か食べてゐまし

た。さすがそれを見るとありありと京城や平壤あたりの風致を眼前に思ひ出します。あの服装なり姿のびつたりとした感じは有形無形とも非常なものだと思ひます。

支那の甘くり屋は一吋色が——ドス赤く——北京のドン張芝居の感がします。第一あのあまいネレネレとした臭氣が刺戟するのせう。また行つたらあとを書きまう。

三月二十七日夜

○

今日は既に此の原稿の締切約束にした四月十日です。しかし来る筈の従弟はまだ来ませんでした。私はその後博覽會へ行つて見ません。結局かんじんの美術館に就いてはかけませんが、しかし此の稿はもう送らないといけないだらうと思ひます。これで筆止めにしてお送りします。○最も始めからどうせ博覽會のことは、見に行けば頭から遊びに行くのだから、ろくな事は書けない、と大下さんと約束(?)しました。とうとう本當に爲りました。

然し一寸氣になつて昨夜友達や大ぜいで夜間開場を見に行きました。しかしおそく出かけたので中へはいれませんでした。不忍池畔からサーチライトを見ましたが中々奇觀で氣に入りました。殊に、噴水を照らす度びに不思議な夜景だと思ひました。——子供の時にサンフランシスコか何所かの博覽會夜景の寫眞を見て「かう云ふのが見たい」と思つたことがある。あの通りで

す。——二三度グルリ々々々と光りが廻轉して来てまともに眼を射られました。あゝ云ふことはそれが又楽しみで非常に面白いと思ひます。

實はあすこの美術館は餘り見たくないのです。何れ英國太子が來ると浮世繪の展覧がある相ですから、その時には行つて序で見に来やうかと思つてゐますが、——「博覽會」は全く他意なく「ハ克蘭カイ」にして、美術の様な高尚すぎるものはさう云ふ時には入れない方が素直に面白くていゝ様な氣がします。その代り非常に面白い出鱈目踊りとかウオーターシュートとか曲馬とか八幡の藪知らずなどがもつとあるといゝと思つてゐます。以上、約稿故。

四月十日朝了。(十一年五月號、みづゑ)

「夏の都會情調」私感

趣味なり美感なりはそれを一般に考へる場合と主観の場合と、必ずしも合致するとは云へないことがあると思ひます。——と云ふのは、此の文の課題は「夏の都會情調」と云ふことである。それを不取敢あり得る「一般」の立場で想つて見ますと、現時は、例へば夕ぐれのままぶしく電燈のつき並んだ銀座の散策の景しきとか、白服の人や輕装の婦人などが濛ばたの並木のところを行き交ふ景しき、日比谷公園の緑の中にバラソルの隠見する景しき……それ等は現代一般の趣味に適ひ、美感に適し、即ち「美しい」情調となりて多くの間に感じられてゐやうと判断します。

私の主観から云ひますと、それ等はどうも時に「涼しさ」や「夏」の實感ではあれ、只美しさではあるか否かは中々疑問だと思つてゐるのです。

近頃町を散歩しますと諸方にカフェーがあります。夜など白々と、明々と電燈を工夫して、そ

こには石製のテーブルなどが並んで人々がそれに倚り、或ひはソーダ水をのんだりアイスクリームを攝つてゐたりします。大てい天井で矢車の扇風器がまはつてゐるか、乃至は金色の卓上器がしきりに廻つてゐます。

——それも一般には、人々は涼しいと云ふでせう。たしかに現時の夏の都會情調の一つではある。

私も大いに此の「情調」は肯定しますが、只それを好ましいとは、乃至美しいとは、さう一般と一緒に今の汎都會情調を素直にうけ入れることは、——この肝心のところでは「私」は「一般」とはつい違ふ考へなり感しを持ちますので、實はお答へに窮するのが實情です。

より適切に例をとつて云ひますと、眞夏、鎌倉海岸などへ行つて見るに、薄い海水着の男女が或ひは波のりをしてゐたり、又は砂上に休んでゐたり、いろ／＼に嬉遊してゐます。正に嬉遊してゐる當人達は涼しいこととせう。或ひはさう云ふ景致にもう馴れて了つた人士には、この景は夏らしくて好ましく、即ちそこには一つの情調——氣に入つた情操が、あることとせう。

偶々私はそれを見るなり想ふなりにしますと、殊に婦人のさう云ふ状態はついみだらな厭はしい感には思へ決して美しく好ましい事には感得出来ません。乃至、海邊に澤山のさう云ふ人達の

る景は、熱くるしいとは思へ、どうしても涼しげには感じる氣になれません。

さう云ふわけで、此の課題については餘り一般と私感と異なりますので、早い話がかうかくについて困つてゐます。夏の現實については更に／＼困つてゐます。

○

以上を前おきとしまして、兎に角次に一通りさう云ふ「私」の思ふところを記してはおきます。——世間にはかう思ふ者もゐると云ふ、さう云ふ一隅の異例に讀みとつて貰へればそれで足ります。

即ち私は今の東京なり何なりに數多く建ち並ぶ洋風建築が先づ大厭ひであります。それから、石の敷いてある道なども厭ひですし、電車、自動車、自転車などの雑踏の景致も厭ひです。そこを大半洋装の人々が行き交ふ景しきも好みませんし、殊に、婦人の洋装に至つては、私は遠慮なく申しますが殆んど見るに禁物の一つです。

が、然し、今は夏の「都會情調」も何も多くはさう云ふ材料から出来る成行きになつてゐます。

——材料それ自身が好ましくありませんので、勢ひ効果もどうしても好ましく思へません。端的に云ひますと甚だ困つてゐるのが何よりの實情です。

さう云ふ私がそれではどう云ふところにあり得る「夏の都會情調」なりその美感なり趣味なりを感じてゐるか、と云ひますと、先づ「風」は山よりも海よりも何と云つても人家の満ちた町で吹かれるのが一番結構です。それで風鈴でも鳴つてくれるか、芭蕉の大きな葉に雨でも當つてくれるかする風情は、申分ありません。女はしやりくした浴衣でゐてくれると誠に美しく夏らしく感じます。町は殆んどまつくらだといふと思ひます。殊に屋並みはひくいだけ美しい。

川には木の橋が肝心です。弓なりにほの白く反つてゐるのを見るだけで涼しいと思ふ。往來は土で、下駄や何かの音が乾きすぎずに響いてくれるのが美しい。殊に縁日などは、銀座の様な明るい物々しい縁日は焦熱地獄だと思ひます。町巾が狭くて、がつしりとそこに人間や屋臺店がまつて、何だかわけがわからなくて然し一々に見て行くとこのゴタゴタの中に變に納得のある、まあ不便な景しき、——それなら夏の縁日などは立ちのぼる人いきれそれ自身、一種逆に「涼しく」美しいと思ひます。その他種々……。

いろ／＼今とあべこべの考へで弱つたことです。

凡て今の方が便利で、實感的だと思ひます。只美しさからは屢々遠いので、情緒もへちまも起らぬ氣がします。——例へば兩國の近頃の川開きなど、革命騒ぎの様なもの／＼しさしか感じませ

ん。情調は現實の中には（それを氣に入つては）極く／＼わづかしか感じられません。時に何か有つてもその有る中を更に選まないと美には變つてくれない。と云ふのは、例へば隅田川へうつる灯影のことなどで私の云ふのはわかつて貰へませう。

近頃では「涼しさ」への景致にはあれでは灯影が多すぎる。

それで、私は、——凡てかう云ふのも私が畫かきだからそれで猶々感じるのだと思つてゐますが——私は今の都會生活には生活それ自身の中には容易くは情調なり美感を感じることが出来ませんから、それを一たん私の美術の中へこして、その上で何れ繪に描いて、例へば涼しさでも、寒さでも、温かさでも、面白さでもやがてはこの課題の「都會情調」でも、せめて私一個に於てなりとたんのうしたいと考へてゐる者です。

私は現代を事々物々、思想、出來事、殆んど悉く、餘り好ましく思はぬ、その點我れながら困つてゐる一人です。以上、

——七月十日——（十二年八月號、婦人の友）

惜しき東京

編輯局から手紙があつて、「今度の災厄であなたの厭はれる東京も焼けた代りに惜しまれる東京も同時に焼けたと思ひます。惜しまれる側の東京の回想を……」と云ふことです。火事で焼けた人に、あなたの焼いたものゝ話を、と云はれる様な感じがします。——實際私は惜しくてたまりません。二度出来るものならいゝが、もう多分出来まいと思ふから、惜しくてたまりません。

——然し思へば「惜しい」とは此の間から折りにふれて思つてゐましたが、それを少しでもまゝとめて回想した事はなく、又書いたこともない。と云ふより「回想したり」「書いたり」するより直接一塊まりに「惜しい」と思ふ方が先きなので、僕は此の材料をとうに此の間中から思ひには持つてゐたでせう。しかし手をつけて見る氣にはなれずゐたわけです。

さう云ふところへ編輯局からのお手紙がやつて來た。つまり焼け出された人に「何を焼いたか」

話せと云ふのと同じ様な気がするわけです。——全く惜しい。二度とは出来まいと思ふから誠に惜しい。

では少し書きつけて見ませう。——凡て死兒の齡を數へる様で、書けば書かないよりは自分にも辛さが増すだらう。しかし一度は回想して見るのも、そろ／＼時も経つし、わるいことではないだらう。

私は先づ新富座が頗る惜しいと、今も目に残つてゐます。

あの建物を夜新富町六丁目の横町のところからまっすぐに見ると、眞暗な空のバックの中に一寸破風の尖つたあの屋根の一直線の素描が——大正年度には既に——不思議な城か何ぞの様に横町一杯に臨んで殊に小屋の閉つてゐる時見るとその美しさは一層微妙な、得がたい味でした。

出来は白と黒とです。壁が——あの事を何とか云つた——かうはすの十字つなぎになつてゐて、それも白と黒、下に木戸がある。凡てほつかりとして然も重く、簡單の様でどうして中々複雑に、何でも無い素描だが、その味が澁いから一角一線の締まり目がちんわりと心へ沁みて來ます。建築の持つてゐる美しさで沁みて來る。丸ビルや何かの線とは違ひますよ。あの四角さは冷情な針金の四角さで、新富座あたりの素描味は——つまりよく人が丸ビルを稱して豆腐のやうだ

と云ふ。大きに例が違つて豆腐が迷惑する。あの豆腐のふくよかであるながら然しどうしても内からこつちりとそこに湧き出して引かれてゐる四角四面の然も少しもカタくない、あの線。毛筆でぢんわりと畫せん紙か何かへ引いた線ではありませんか。
あれです。

丸ビルの四角は鏝かマチか、ビスケットの空いたのか、どうせそんなものです。よくつて煉瓦である。イヤに變にとりすまして四角く、つんとして、あのスカイラインから覗くと青空もベッキの様に、ベカ／＼ですげなく遠い。大方ニューヨークとか何とかそんな所へ行つたら定めしあれもよからうが、東京は日本だ。あれではお濠や柳が泣くだらう。

就ては、私は過日小田原へ行つて、その街のういらう屋の建物を電車から感心しながら横に見て走つて來ましたが、とんとその白装束の清楚な（然も豊かな）味感が、それよりは少し手をぬいてあつた、然し猶東京の新富座には見られると思つて、うれしく感じてゐました。
それがもう今は無い。（ういらう屋もなくなつたらしい。）

○ 昔安政の地震には、櫻田門の砦とかど大地へ倒れて「豆腐を打ち捨てし如く」とか、倒れたと

云ふことですが、——此の形容はそつくり生きてゐる——此度は宮城の幣は多分壊れなかつたでせう。大幸とも大幸です。

恐らくあの白壁を、上塗りする人はあるだらうが、生地の扉や壁面の土臺の所から、構造出来る職人は、今はるないに相違ありません。——あれ等は残つてよかつたが、段々と下町へはいると、蠣殻町、松島町、久松町、濱町、薬研堀、兩國……この邊の町家にはいゝのがありました。横山町通りの鬼瓦に劍の生へた黒い商家のすらりと並んだ美観、緊密でコクのある美観。世に東京を措いては月世界にもなかつたもの。あれ等も今頃はどんな葬ふものゝない寂しい冥土へ消滅して了つたことか、二度とは見られずまい。

木場。——あの邊には殊にどうかすると昔のばくちうちの住居が残つてゐて、荒い格子でそれを「今でも」洗ひぶきとか云ふ腦天気な仕方、毎朝拭くのです。格子に水をぶつけて洗ふ。ツヤはなく、然しそこにうるほひのある、つまり洗ひ髪の様な意気な美感が生じて、——この意気と云ふ事の美しさなど、此度の火事でなかり片なしでせう。イヤ味は生きのこるだらうが。——木口は何れも立派に、屋根は重くのめり、家の中はずつと見透しに出来て然し奥にはかつちりとした庭などがしつらへてありました。頗る別種の味のものがあの邊には「今でも」残つてゐた

様ですが、あれ等こそ、それこそ今後作つたら町内の自警團とかからカウボーイの如きものが、文句を云ふだらう、呵々。

上野のいとう松坂の横手に舊館でいゝ建物が——感心に——残してありました。が然しあれは多分近世のものです。しかし中々捨てがたい鷹揚のつまり大店らしい、美事なものでした。殊に隣りに舶来いもやうかんの様なとほけた本館があつたので、猶舊館が目立つたのかも知れませんが、——あれも焼いた。

再び建ちません。

○

あの舊館（松坂屋）の味感はそれを心持洋化すると、つまり私の好んで云ふ明治味感の美しさとなるわけです。消極的だが、醜くないものである。第一愛情があつて可憐だ。——例へば博物館本館、虎の門女學館の建物。帝大工科、築地の方へ行くと、中々その味の床しい作例がボツ／＼ありました。手近かなものでは、どうかすると上野の山中に置き忘れられて、立つてゐる瓦斯燈、最も卑近には十二階。

繪で云ふと丁度小林清親、上つて江漢や亞歐堂の味。それ等に當る、床しきものである。——

鹿鳴館と云ふものゝ、腰のところ段があり肩にとんがりのある羽帽子の「レディース」の舞踏がいつか過去になつたのに、猶その入れものは過去にならずに明治の夢を見てゐたと云つたかたち。——それ等も殆んど此度は消滅しました。

それは伯父さんか、極く人の善かつた父親か、とうとう亡くなつた様な、親愛な寂しさで懐ふ。

日本橋の一角には、長らくその魚河岸のところに屋根の勾配の急な、それが面白い段々に相並んでゐた、一連の後期の町家が残存してゐました。——それは私は見る度びに大變今時珍らしいと思つて、是非そのうち描いておかうと考へてゐたのですが、惜しいかな、その後寫眞で見やうと思つても中々見付かりません。

私は實はあれは何れ地下電車か何かでぶち壊すだらうと考へてゐたのです。

○

要之、私は思ふが日本は古來建築と云ひ、彫刻と云ひ、概して云ふと木と土の仕事に秀れて、石と金の業には適しません。木と土の仕事には凡て地球上にも稀れに進んだ仕事を示してゐますが——奈良の堂塔。彫刻。面。やがては近世の建築、小美術、手工品に見よ——然し、石と金との方には、少くも今迄には、それをこなした優作を餘り持たないのである。尤も少しはある。然

し推古の佛が日本に入つて木となり、然し六朝に於ては石であつた。この所の材料差は、どうもその後全般を通じて、又何を通じても、今後もある様に考へられる。つまり、得意と不得意、手に入ると手に入らぬの差である。

この場合日本の才能によしや石なり金を持たせて、効を納めた場合があつたとしても、それは然し概して「石」それ自身、「金」それ自身の持味を寧ろ殺して、そこから改めて生かした。——例へば奈良の頭塔の如き彫刻。刀劔の如き純鍛工の味感。刀の鐔の如き味感。

この鐔の様なつまり「鐵を殺して、生かした」味感が、それが何れは日本の木と土の仕事には美の出し方に共通を有し、畫因の相似た、早く云ふと、さう扱はなければ金石は扱へない。一家の特質を示すところとなると思ふ。

即ち、私の前に「東京」に就て惜しむと云つた味感は、凡て徳川期の建築物から卑きは明治の十二階、博物館等に至る迄、何れも今云つた推古以來殆んど美藝の中樞にかけて共通の、一貫した、その味にのつ取る作だからであります。大なり小なり、通じる。例へば博物館の煉瓦の側面のところへ行つて、そのくり型の柔かさを上へと見て御らんない。その人は改めて三越とか丸ビルとか帝劇とか、そんな所へ行つて同じ「建築の横顔」を見たら、前者は幼時の小學校の様に

懐しいだらうが、後者は裁判所か監獄の様にむごく冷たいだらう。

偶々之れは明治味感の例になりましたが、では改めて更に少しでも新富座の正面圖を知つてゐた人は、それを思ひ見よ。少くも美しい姉か間違ひのない兄かの様な感が起るだらう。——その懐ひがもしあなたに起らないと云ふなら、多分あなたは知らずくアメリカ人が何になつてゐるのですよ。魂を食ひとられてゐるのですよ。尤も「日本」それ自身が段々と食ひ取られてはゐるが。

で、さう云ふ人が、耳かくしに結つて頬べたへ變なものを塗り、ふりそでに靴を履き、蚊とんほの様な萬年筆の様な男と手をとつて、大阪だと洋食屋の三階で踊る。

東京だと鶴見あたりで踊る。夏になると御尻をまる出しにして泳ぐ。

あゝいやなことである。

日本はさう云ふ國ではない筈だが近頃困つたことだ。

○

附記。

之れでは結局、惜しむよりは嘆く記事になりましたが、その方が言ひ得る「積極的」である。之

れを一變すると憤るのですが、幸私は畫工ですから、他へ憤るよりは内へ懐かしまうと考へる立場です。で、初めて作の中へ息をついて助かる。

讀者諸君も男よりは美術家ですから身を以つて「作」をされたら如何ですか。——尤もそれも日本髪に結へと云ふ様な狭い意味ばかりではありませんが、つい此の間迄の夜會卷など、云ふ結髪はいゝではありませんか、あれ等がつまり博物館味で、七分三分とか耳かくしとか、つまり丸ビル、新富座は島田でせう。松阪屋は上品な丸鬘、横山町邊はおばこなど、云ふところか、本場はどうせ源之助です。——女優は、丁度帝劇で高いくせに極く安い。

髪結ひでも所以は同じ事です。誰か夜會卷以後の同じく美しい大正年度の美しさゝへ案出してくれゝば世の中は助かる。何でも凡て同じ。

十月十九日記(大正十二年十一月號、婦人之友)

現代の風俗

現代の風俗に対する批判と云ふ題で文章をかく筈になつてゐますが、この現代、up to dateのものと云ふものは、何でもしきりと動いてゐるもので、止まればそれは所謂現代とは縁因の遠い過去のものとなる。現代のものはしきりと動いて定着しないもので、風俗も何れが現代の風俗かと見て見やうとすると矢張りいろ／＼に動いてゐて、之れと云ふまとまつた姿はありません。動いて混沌としてゐます。——その動きが止まれば、それは既に現代とは云へず、或る次ぎの時代から見る大正と云ふ様なものになる、と云ふ意味で云ひます。四方八方へ動いてゐて定着のないものが凡て現代の諸相であります。

63.....
現代の風俗は混沌としてゐて、よく云へば謎が一杯で、わるく云へば支離滅裂で、定まりがない、然し之れは強ち今——大正十×年度——の現代がさうだと云ふばかりではなく、いつでも凡そ

現代から見ると、現代の風俗は定着がありません。つい我々の近くの明治時代と雖も混乱してゐた。然しその混乱がいつか時を経て大正となつてみると、前の明治は混乱ながらそこに如何にも明治らしい風俗なり、例へば美術なり、文章なり、政治なり……種々を持つてゐる、つまり過去となつたやがては大正現在の混乱も混乱ながら一つのスタイルとなるわけだが、――

それには今のところ之れと云つて定まりは観取しにくい。餘りに現在から現在ののこを見るのはつまり立場が近すぎて、早く云ふと、ピントのぼけて了ふところがあります。――或ひは明治以來、時には徳川以來の風俗があるかと思ふと、その一方にはつい半歳前でも日本にはなかつた様な新規な風がどしどし行はれてゐる。それ等が交ざつて、果してどこどころが現在の風かは一寸判断しにくい位、混沌として、その上にも猶動き、變つてゐる。大正×年度の現代の風俗はかうだと云ひ切れることは、殆んど後にも出来ることではありません。

が然し、そこで只一つ出来ることは、風俗の諸體は混沌としてゐる。しかしその混沌にも一つの方向はあると云ふこと、それを見ることです。――明治や徳川や西洋や或る未知のものや……それ等に織りなされて異様の萬花鏡を成してゐる現代の風俗は今云つた様なところから試みに判じて見ますと、そこに一番に目立つて感じられることは、最も手近の例が電車へ乗つてその乗

容を見わたすと假定して考へて見るのがわかりが早い。或る人は昔ながらの風をしてゐるが又或る人は全く昔を捨てた新規の風をしてゐる。車席の右の端から左の端まで、殆んど例外なく何の電車にも千姿萬様の風俗の乗つてゐるのが現代の事實ですが、そこを一貫して共通に認め得られることは、今の人は先づAもBもCも……何れも美さを基本とはせず、型を據りどころとして、各々の風俗をしてゐると云ふことです。

明治の風俗をしてゐる人も決して明治の風俗を美しいと判じてしてゐるわけではない様である。と云ふのが、明治の風の着衣なり結髪なりへ持つて来て途方もない新式の手袋とか履物とかをしてゐる者が多い。つまりそれは偶々明治の風と云ふものがあり、又新式の手袋なり履物なりと云ふものがあるので、――その雑居が現代の事實なので――彼はそれを只有るがまゝに選んで、必ずしも美しさを據りどころとしてはあの風をしてゐるものではなからうと思はず形ちが出来上る。乃至は、外國人の様に髪を結び、外國人の様に服を着てゐる人がある。之れも字のまゝに外國人の様に風俗をしてゐるので、それが美しいか美しくないかはつまり効果は今のさう云ふ大ていの人に格別考へられてゐると思へない。

否、了解されてゐると思へない。

それも然し今によらずいつの「現代」に於ても、美しさのさう容易くは了解されぬと云ふことは、それは止むを得ぬことです。たゞその程度に甚だしい場合と、さうでない場合とはある。大正十年度の現代は、その點、どつちかと云ふと甚だしい方に近くはなからうか。

就ては現代の風俗を大變混亂させてゐる、その大原因の一つは、前年の明治此の方日本に行はれてゐる歐化の風潮が何よりも大なるところとなります。日増しに歐化には走らうとも、その反對には軌道がつかない。そこで、前の明治の年代には、この明治も大變歐化の年代でした。然し歐風を學ぶと云ふ程度、参考にすると云ふ程度で、従つてかなり小心に、過ぎぬやうくと歐風を學び、その所に節度があつた様ですが、近來大正に入つてはそれが學ぶと云ふ種の消極的歐化には止まらず、寧ろ身を以て歐化する。學ぶのではなく歐の中に飛び入る。さう云ふ大膽の積極的な傾向が事毎に現はれて、日本人は大變強くなつたのです。

歐と同化し、歐の中に己れを浸らせて了はうと云ふやり方を事毎にとり收めた。

云ふ迄もなく此の歐とかいた意味の中には米國をも含み、殊に追々と米國が專一ともなる様になつて來てゐるが——この事はどうしても斷はつておかなければなりません——米國とは世界

の最も浅い歴史から成り立つ風雲の國で、例へて云ふと明治維新以來の土地「東京」と云つた場合、根よりは花の方が大きなけぼくしい草です。實はいつになつたらどう結ぶのか今のところまだわからない。只花はバカに大きな目に付くものが年々と咲く。

さう云ふ米國の米國それ自身根なし草の、今日はスカートがひろがり、明日はつほまる。どうそこを變へやうともどうせ風俗にせよ五百年とはない浅い歴史の國の事だから、どうでもなる。大きな帽子を被つたり小さな帽子にしたり、ニホンキモノを着たり、又はアラビア風に見たり、——まあ活動寫眞と云ふあの目まぐるしい通俗な淺はかなものが頗るよくアメリカニズムを代表してをります。

——そのアメリカニズムに大いに追隨する。

で、前に云つた様に、近來は稍もするとそこへ追隨するとのみには止まらず、身を以て没しやうとする。身自らアメリカにならうとする。——その傾向が甚だ現時の日本には事毎に多く、何れ風俗もそれで渦の中に卷かれる小船の様に變轉して、定着がありません。

定着のないのはそれが凡て現代と云ふものゝ事相の性質だから差支ないが、惜しむ可きことは、そこに同時に美しさが甚だ足りません。お手本のアメリカに一體美しさと云ふ種の問題は

甚だ少ない、そのお弟子に益々少ないのもこれは止むを得ないところである。

で、現代の風俗は、多分後の世には心ある者に嘆かれる支離滅裂の姿として一つの過去となるか、又は大正×年度にかうであつたが故に今はかうなつたと云つて、未來の日本人に懐しく(?)回顧される一つの特別の料となるか。——この場合の未來の日本人と云ふのは、日本人だが然し實は歴史は我々とはもう違ふ、アメリカに魂を食はれた劣等人種を指すのです。

現時の風俗を見てみると、私には、實は或ひはもう一世紀もすると此の日本は米國の屬國になるのではないかと、さう、悲しい感がする。——さう云ふ傾向が何所かに有る様だ……。

要するにそこには日本を愛させるより日本を悲しませるところの多いことを歎く、——之れがどつちみち實感となります。

(大正十三年四月號、婦人之友)

現代の流行に就て

一方に十の者があつても他方に一又は二位の者があつると、總合の平均數は之が四位にならされて了ひます。流行と云ふものもそれと同じで、假令世間には十の趣好を持つ者があつても、然し結局の平均數では他方一乃至二の趣好の——その方が多い——勢力は、十の趣好を侵害して了つて、世間の表面へは期せずしていつも二かその程度の含蓄の浅い「流行」美感が現はれることになります。心あるものはいつでもその時勢の流行を稱してあきたらないと云つてゐる形ちです。然しその人のあきたらなさは又いつも一端の主觀に止どまつて、廣く客觀にはなりにくい有様です。殊に或る時代、現代の如きその優なるものにとつては。

それ故時勢の流行をつまらないと思ひ、それにあきたらなく思ふのは、所詮少しでも心ある者にとつてはそれが却つて當り前の感情であつて、今更事々しくそれを語つても仕様のない駄言と

なります。寧ろせめてその「あきたらなさ」に對して「何故あきたらないか」と、噛み占めて思ひ、「つまらなさ」をその依つて来る基を判断して感じる。つまり、批判をして、感情の波をもつと底の方へ引込んでおく。——さうするのが先づ心ある者の心を亂さずにする、いつも時勢に對する生活の一つの仕方の様です。

——私はさう思つてゐますので、従つてさうしやうと心がけてゐる一人です。早く云ふと、時勢の流行なりテーストが悪いのは之れは止むを得ない。では「何故それが悪いか」と一思考へを沈めて見る。さうすると批判が感情よりはつきりと生活へ根を張つて自分の日常へ刻まれて來ます。刻んだらそれは既にひとのものではなく、我が心のものになつて、一つの足が、りを生じ、イヤなものを見ても、卑い趣好に出逢つても、別段驚かすにすみます。乃至顔をしかめずにすみます。仕様がなと思へます。之れはいけないとはつきり思へますし、少くも自分には之れは適さないとつきり思へます。即ち自分の世界は——假令日常趣好の小範圍にせよ——自づと他に生じますから、改めてそこへ己れはいつてゐれば、先づ汎世間の大勢はどつぐらつかうともそれに神経を悩ますうるささはなくなりません。

とは云へうるさいことはうるさい。所詮時勢の趣好なり流行の有形無形は何かしら我等の生活へ觸らすには止みませんから、うるささは無くなりませんが、然しさうでもしなければ神経病みにならずにはすませないのが、「流行」と云ふ怪物のあくどい仕ぐさです。我々「心あるもの」は何しろそれに對して批判を持たなければならぬ。

私はペン軸が好きでよくそれを求めます。一つ心に思つてゐるペン軸があります。それは私の小學の頃よく上等の文房具店にあつたもので、獨逸製の握り軸の太い、私はそれを「イモペン」と云つてゐた赤又は茶塗りのものです。その茶なり眞紅なりがしつとりと深く塗られてゐて、私はいつともそれを再び欲しいと思ふ。軸を求める度びにそれを探します。——然しありません。既に絶對にありません。恐らく今は獨逸の何處か古道具屋へでも探しに行く他には、手に入らぬでせう。

何故ないのか？

と云ふと、こんな些細のことにも何れ「原因」はちやんとあるからおかしなものです。——(1)當世は凡て萬年筆ばかりで、一々ペンをインクへひたして字をかくと云ふ程のマヌケは世に少ない。即ちペン軸はどうでもよくなつたのと、(2)その點に猶、品なりその出來なりに幾分中世氣質のある獨逸の細工は近世にはすつかりすたれて、即ち「古風」となり、その代りにアメリカ出來の高

事「役に立つ」「安い」氣の利いた、その代りニベもない事務用のペン軸——のみならず家具、器物、衣類、云々、云々——が流行します。

昔のドイツ製の丸軸を探すなど、痴人夢を追ふと同じ時代おくれです。——つまりかう思へば、がっかりするのが落ちで、然しそれ以上文房具屋にないのを怒つて見たり、字がかきにくいのでイライラしたりするには、何となく、その情操の點は卒業をする。で、高が起りはペン軸のことだが、それから引いての一つの新たな情操に於ては汎現代のアメリカーニズムを嘆じて、その正體を認める。

それを偶々認めると、この流行批判は自づと變通を起していろんなところへ枝葉をのばします。最も手近の目前の例があります。——京橋へ電車で行つて見るとわかります。その改築のなさけなさは全く言語同断です。大砲のたまの様なものが四隅にとんがらかつて、役所の鐵さくの様なものでも手すりが出来てゐます。京橋とは日本橋の次ぎで東京の目ぬきの橋だが、若しさう古版の旅行案内か何かで或る人が讀んで、偶々あすこへ今行つて見たとしたなら、その人は先づ「京橋」をがっかりするよりも「東京」をがっかりするでせう。——然しながらその判断は猶少しも違つてはるずに、極めて妥當のものとなるでせう。

嘆かほしいことだが

此度の京橋はひどいものだが、然しその新京橋が寧ろあゝなつて見ると猶あの邊一體の建ものに合致してゐる淺ましさは！ 更に々々嘆ず可きことです。そばの——先からある——よみうりの建物なり星の建物なりと何とよく合つて「美觀」を倍加してゐることです。その度は、日本橋があつたの橋の手にある江戸風の問屋仕立ての家と少しも今は合致してゐない、それと同じです。寧ろ日本橋の近所もそろ／＼古風の家——その美——はどしく／＼打ちこはして、地下電車でもこしらへるか、平和塔でも建てると「よく」なるだらう。正に東京は東京らしくなつて、その中には天から火の雨が降ることだらう、呵々。

それが時勢なのだからどうも仕方ありません。日本がさうで、引いて世界がさうなのだから仕方ありません。その橋なり建物なりのそばを歩く人間が、一體、今は既に桃われや島田の美しさは多分横山町邊にもないことです。寧ろ頭髪を切つて、既製品と稱する怪しげな洋服を着て、金龍館の歌劇歌でも唱つて、花月園のダンスの步調で歩かうと云ふのだ。それが東京のみならず巴里にもニューヨークにもあらうと云ふのだ。四海平等となり、平等とは即ち馬鹿を利巧で埋めると云ふことである。思想は共産となり、人間は文明の坩堝の中で共通となつて、味ひはなくな

る。役には立つだらう。それから便利で、安くはなるだらうが、おもしろくはなくなるだらう。十年程前にイタリアから未來派と云ふ一派の人が現はれて、凡て昔のものは打破して丁ふこと、博物館や記念碑には火をつけて過去へ焼き去つて了ふ。我等は世紀の頂上に立ち、今や改めて星に向つて戦ひを挑むものである。と主張したことがあります。モークレーと云ふ様な批評家はそれをあつさり笑つて、たゞ彼等の眞剣さには愛す可きところがある」と云つたのでしたが、一九二〇の年代には最早や笑へなくなつた様です。とう／＼として東京を初め世界至るところで彼等の火に過去が焼かれる。

此所に過去と云ふのは「美あるもの」のことである。強も「現在でない」と云ふ意味ではない。フランスには長く日本のお宮詣りの様な、それを何とか云つた——Representationでわかると思ふ——子供の儀式があつたさうです。然し十九世紀此の方段々にすたれて、そんな「役立たず」のことはしなくなると云ふ。日本にも同じことは幾つも慨嘆を以て云へるでせう。此の頃の女の子達はマリについて、活潑に「さいじやふ山は霧深し」と云ふ唱歌をうたつてゐます。然し可愛く「山王の御猿さんは……」とは云ひません。否、知りますまい。即ちこの子が母になると、何れ又その人の子にはマリ歌に一體何を教へるつもりか。

○

日本は——世界と共に——何れおしなべて、更改されて、その改革の度は、便利、實用、安直、簡單、容易……と云ふ様な點では「利益」はそれは有ることとせう。それは認めていゝが、致命なることには、肝心の「美」なり「美の情操」からは何れも時と俱に、生活、風俗、建築、器物、悉く、遠ざかるだらうと思ふ。繪畫も無論美から遠ざかる。(現フランスを見よ。)言語さへ遠ざかる。(活動の字幕に出る英語を見よ。)

○

さう云ふ現代の中で我々はどうすればいゝか。せめて物ごとに美しさを識つてゐればいゝのです。

先きに「批判」と云つたのも何れはこの「美しさを識別すること」から生ずることではある。——差し當り過去のものゝ方が當座現在のものより美しいので、過去を讀して現在を貶しました。が、それも過去を迫慕する意味ばかりで云つたととられては違ふのです。長くなりましたがこの邊で擱筆しますが、近頃帝國ホテルの建物などは、あの建物それ自身の出來なり効果はまだまだ仕様の無い變なものではある。然し設計者の志向のあり場はせめて贊するに足ります。

それを贅する程度に他に贅す可き何等の美への志向のものも現在には認めがたい、と云ふのがなほ當ります。要するに嘆ず可き時勢です。いゝ時勢には、審美の意識は個體にはなくとも一般にあるのが、美の流れの面白さです。(ロココ時代、乃至徳川時代の如き)それに反して現代の様な亂脈の時代には、せめて個體は心して美を嗜み占めなければ危ふい。一般は洪水の様に審美を押し流して、顧みないのですから。

十二月一日記。(十一年新年號、婦人の友)

源之助のお富

女の顔の線をほごして文章にかく——といふやうな題でこの稿を記しますが、女の持つてゐる線の中では何と云つても顔面の線が一番微妙で、雄辯です。一體美しい顔と云ふことにはその美しいと云ふ、それを認知する人それによつて好みもあり、了解も異なり、理窟もつかうから、一概にどれが美しいとは決められません。たゞ決める決めないに依らず誰にとつても不明のないところは、美しい顔といふものはそれが瓜實にせよ、丸顔にせよ、必ず善い線から凡ての道具が出来てゐる。——これは何れにも間違ひのないところです。

醜い顔といふのは線がぐぢやぐ／＼してゐるか、曖昧か、兎に角はつきりとした素描を示さない顔立ちのことです。よく切れの漠然とした眼だとかモデリングの不確かな顔、群まりの味はひの鮮明でない鼻などがあります。それらはそれが一箇所あると、例へば頭のわるい一筆が畫中にあ

るやうに、そのところがどうしても色なり線なり不雄辯で、つまり人に美感を素直には與へません。之れに反して、切れのはつきりとした眼、和やかな、又はすつきりとした素描の鼻、得も云へぬ線をもつてゐる唇など、云ふものは——さういふ眼や鼻は静止それ自身美しく、動けば動くで又美しさを開展する。人に一撃に美を傳へます。

○

よく女はその襟足が美しいと云ふ事を云ひますが、これは云ふ迄もなくその通りで、殊に善い生へぎはなり巧みな髪形の形ちで補はれると、此の一箇所（襟足）の清楚な素描要素は筆舌につくせぬ魅惑を持つて、彼女に美を添へます。後ろから見ると大變美人と思つたのに前にまはつて見ると……と云ふやうなこともよく云ふが、これらも概して姿全體からの受感だけではなく、不言不語の間に後ろから見えず襟足の素描味が見る人を大いに魅了してゐる。

——近頃の結髪に耳かくしと云ふのがあつたが、あれを近頃フト電車の相容についてよく見て見ると、——一體今云つた襟足の美しさが冴えるのは白の首筋の線に對して黒の毛並みが並行して走るから、殊に昔の髪ではたばと云ふ特殊な形ちがそこへ來るので、それで首筋の丸味の外線が厚ほつたなく、心持長く、水々として見える。

殊に昔はよくその手前に黒襟の線がかつきりと襟足の切れ目を劃したものだ。それで冴えたなよくとした線の美しさは一層艶美を強めたわけだが——

耳かくしでは髪の毛がいきなり首のつけ根のところまで首筋と平行ではなく、直角に、そこに夜具の袖のやうな、まあ早く云ふと無意氣な群まりを劃して丁ふ。それで、切角の襟足も、よしや如何に皮膚が美しく線がなだらかであらうとも、今の耳かくしの女の人の首と云ふものは——常人には見えないからいゝやうなものだが、——首つ玉へすぐとも、現はれたやうな、ボク／＼と太つこい、もう一つの言葉で云ふと、近頃の人の之れを妙に好きな、たゞ肉感的な、——美しさから云つてはにべのない味感があります。

殊に近頃の人はそこへ持つて來て猶ほ首へボヤ／＼の毛糸の襟巻などを巻く。——先づ女の襟足の美しさなどと云ふ特殊の美感も、追々と日本からは消滅する時節が來た譯でせう。

○

實は此の稿には何を書かうかと思つて、こゝ迄は何となく以上のやうにかいて來たわけですが、三日ばかり前のことです。私は偶々友人と連れ立つて神田劇場へ源之助のお富を見に行つたのでした。——源之助には今更にその鮮やかな然かも味の深い本式の美感に感心しました。近頃

荒んだとか云ふやうの人もあるが、まだくと思つた。實は此の稿には一通りそれに就いて書かうと思つてゐたわけでした。

とは云へ、いゝくと思ふ以外には別段何と云ふ特殊の事もないのですが、源之助は男だ。云ふ迄もなく。然し舞臺でお富に扮して演技をしてゐるところでは、どうしても女です。然かもそれが一つの風格の極く特別な美しい女です。

——だから此稿にはそれに就いてをかいでもいゝでせう。

○

原稿に添へて何か素畫をと云ふ事でしたから、それには差し當り「女」としての印象の濃い、まだその面影を忘れぬ、源之助のお富の見取圖を添へますが、源之助といふ俳優の線が極み出す一つの風格——女としての——は到底現代のものではありません。現代にはこれだけ着物の素畫を生かして着こなす人もなければ、第一、此の顔がない。趣味がなく、空氣がなく、背景もありません。偶々源之助一人が身を以て此の風格を持つてゐる何の苦もなげに舞臺で我々に示してくれるが、思ふに、既に此の何氣ない源之助の風格ももう此の人がなくなつては再び世になく、此の人を通じて初めて當世には形に見るを得るものです。

もしも源之助がなくなつたとしたら、我々は此の稀れなる風格を操すに、差し當り徳川末の國貞あたりへ行かないと見られないでせう。

不思議な人がゐてくれて結構の事だが、又これが正にこの人一人の稀品と思ふと、珍重したいことは元よりである。何所か惜しいやうな、寂しいやうな氣もします。

○

此の人は極く樂に着物を着てゐます。今の娘さんや何かのやうに襟のあきを氣にしたり裾を氣にしたりしてかたくなるやうな着物のこなしはしてゐないが、たゞ今の人のしない事——寧ろ出來ない事——でこの人の殆んど意おのづから其處にあつて爲てゐることは着衣のアクセントをきちつと擱んでゐることだ。

まづ襟先きのところで着物が肉體へ止どめを差したやうにびたつと着いて、と云ふのはそこに姿の契點が一つ起つて、あとの素畫はこの點からどつちへでも自在に流れ出る。その流れ出る衣紋の基の味はひを、此の人はもう契點がちゃんとしてゐればあとは自づと従ふと云ふ事を知つてゐてさらりと着流してゐます。——然し、云ふ迄もないが、第二の重要な關所として、腰が又小氣味よく決まつてゐます。

お富は花道をゆすり場から歸るとき羽織を着てゐるが、その羽織の背中の線はからだと不即不離の、簡単なやうで複雑な、一つの得がたい日本味です。それが、内部の腰がきまつて極く適當のあんばいに着衣で形造られてゐるため、その素描は何れ蔽ひものゝ羽織の線へも響いて、前に立つた襟先き（肩）の契點のところから裾へと走り落ちる羽織の流暢な一線は誠に美しい。丁度非常によく引いた素描へざつと冴えた色合ひを浴せたやうな工合だ……。

但し、こんなかき方をしてゐた日にはきりがありませんが、——かういふ、ちつとも注意しな

利かして着物を着てゐる、此の他の例をとれば羽左衛門の與三の衣裳とか、殊に松助のぞろ／＼女物を引する安の着つけ。かういふ味感は、戦國時代の羽織袴が徳川の太平へ入つてやはらかなるに變り、それから末期の爛熟へ来て練られに練られた、そこで出来たつまり云ふイキと云ふ極く濫い、江戸市民の發見だが、私の今迄に云つたのは、もうそろ／＼それが此の世から消滅すると云ふことです。偶々源之助の演技などには、あの人には身を以てその眞髓があると云ふ。その風格は何でもない、どうかすると下卑たなりふりのやうに見えるが、然し屢々端正なる能

衣裳の美しさなどよりも一段と進んだ、若い、美しいものである。

——源之助には殊にその着つけに加へて顔の美感が又一層趣を深めてゐますが、それはかう云ふだけに止どめて敢てくどくはかゝない。

——が一體どこの所が事もなげに着流した風でゐながら然かも肝心の諸の線の源泉のコツのところは締まつて着られてゐると云ふのか、と云ふと、それには反對の例を持つて来て云ふのが一番わかりが早いから云ふが、源之助ではない誰か他の役者のやるあり得る切られお富を想像して見たまへ。乃至今時のイキと稱する藝妓でも何でもいゝ。——それ等のからだ（つまり素描）は着物にひつくるまつて少しも延びてゐず、窮屈である。第一にイヤ味だ。もつと早い例がある。

よく白く塗つて出て来る若い役者の與三郎などを思ひたまへ。へどが出ようと思ふ。

と、ひよんなことになつて来たが、何れは女の人の美しさと雖もこれと同じことで、要は重要の契點を掴んで白粉を塗り、着物を着、その他適應にしたまへ、肝心の一點さへしやんと締まつてゐればあとはやりつばなしの着つけでも結髪でもものごしでも、ちゃんと生きて来る。八百屋お七が勤くとたのますとも長い振袖やふり分けの帯が美しさを編むのと同じ理窟である。胸へきち

つと一點がついてゐるさへすればあとはもう大丈夫だ。——髪、顔、シヨール、羽織、着物、裾、下駄……などゝ注意が分散して、十を一に均らしては駄目である。或る所へ十、乃至五と五位、あとはゼロでもいい。さういふ美しさの出し方がいろ／＼にあるやうだ。(大正十三年五月、藝女性)

浴衣

源之助の演る芝居に女團七と云ふのがあります。大きな茶のべんけいの浴衣を着て、黒縹子の帯を平つたく四角に締め、すそを片方だけ高くからげるから白の蹴出しが出て、それが素足にかかります。頭は崩れたつぶしかおばこ何かで、顔は白く塗り、眉は無いにちがひない。——手にたしか出刃を持つて黒べいの前で義理あるおとら婆アを殺す狂言です。

——序でに之れも書いておきますが、あとで、その黒べいの向ふの青空を遠見で五彩の花車が通ります。黒べいの一端にはくつきりと白い井げたがあつて、つるべの青竹が出てゐる。そばに柳もあるでせう。舞臺のこつちには泥だめがあつて、果し合ひが段々と苦しく、泥だらけになる仕組みだ。——何しろその黒べいの前に團七縹のお握のき浮上る姿は、一種末期の味ながら、誠に効果のさえた影像の強いやり方です。

そのお梶の姿をここに想像しますが、——

私はかねて思つてゐるが、日本人はよく無作法な、つまり肌を現はす様な姿を（殊に夏は）爲ると云ふ。何でも耳食の話に、桑港か何かでは日本の女が浴衣がけでゐると罰金をとられるとか云ふことです。

さう云ふところはあつたらう。と云ふより、さう成りやすいところはあつても知れません。但本来の日本の——女に就て云ふ——浴衣がけの姿は、決してさう云ふ無作法がつきものゝ性質のものではなく、桑港あたりで偶々罰金をとられるのは、只その邊の連中が浴衣を浴衣らしく着こなさないからのことである。もし浴衣をうまく着る、つまり本来の此の服装の美感到添ふて正當に——とは實は平凡に——着る場合には、日本の夏装束は危なけでゐながら、然も決して危なくありません。

例へば更に今云つた源之助のお梶をもう一度よく見ると、この役はかなりはけしく立ちまはりをしますが、殆んど胸はおろか、肘も、はぎも、三寸とは不作法に着衣の外へ出しません。只いつも涼しい襟足と、それから身體全體へかけての線を、流暢にのばして見せるだけです。——と云ふのは、さうすると初めて美しいから。と云ふのは更に、浴衣はさう着られると云ふことを語

る。さう着れば美しくなり、それが又本當だと云ふことを理窟以上に語る。

それ故この美藝に化された巧みな扮装の場合を不取敢例にとつたわけですが、この點は、外國の夏の風俗の場合は、初めから何も彼も露出してしまひます。結局出る程のものはすつかり出してしまふから、つまり夏を直接「夏」らしく豫め平面描寫にしてしまつて、出したくもあとには何にも出すものがない。即ち出るものがないから先づ不作法にはならない。多分實感（卑俗）には大して陥ちずすむでせう。——但それ故に美か否かと云ふことは、それは全く別の第二問になるが、——これを、日本の場合には、豫め装束の條件は極めて危いものである。

稍もすると際立つて實感に陥ちたがる。が、然し實は陥ちないものである。陥ちずに、一轉、そこを不思議な美におきかへる餘地がある——

と云ふ、この（かね合ひの）ところに、日本の夏のしどけなさ想に見える姿のうちには、却つてそれ故に進んだ。つまり特別に「美しくなれる」要素が充分にあると思ひます。

○

で、源之助のことから浴衣のことに移して來ましたが——

ここに、「曲線美」と云ふ言葉があります。之れは特に夏、外國婦人の身なりに就て思ふ場合、

誠にそこにあるものはこの「曲線美」だと思ふ。——或ひは言葉を變へて、形似（寫實）的な味感と云つてもよい。

それに反して日本の美しさは、——強ち「夏」乃至「服装のこと」には限らなくても云へるが、——直線的美感と云ふのがいふ。より字の意味を大きくすると、所詮、象徴的味感と云ふことになりません。

就てはその服装の直線的美感と云ふについて、思つて見ると、それには第一材料の浴衣それ自身を衣紋竹へかけた、その場合から判じてかゝるのが早いと思ひます。それは誠に角ばつたEgg-likeなものです。——然しその服装の内部には元來丸味から出来てゐるからだ包まれる。

そこで、殊に夏、着もの、單衣となる場合には、上蔽の直線と内部の曲線との融合は美しさに於て——と云ふのは肉感的にと云ふのとは一應はつきりと違ふ意味で——一層端的に結びます。「浴衣」の美感はそこで材料それ自身、肉ときもの——の仕組みに因縁が濃いことゝなつて、やがては美しさへの筋道を素直に定跡で行つてもたどられる。

○

で、一體日本の着ものは角ばつたものである。たゞそれを身にまとい、角味はつや消しとな

り、殊に單衣の場合には、中の丸身（肉）は一應外へ極く魅惑的に偲ばれて、所謂「かくすより顯はれる」工合の、一種刺戟を宿した一つのかたちとなります。

之等のかたちをぢかに機縁として、徳川期の美術の仕事には一つ特殊な「笑ひ繪」と云ふ、イヤに進んだ境地のものがありますが、例へば線のなだらかな羽二重の胴衣に細帯と云ふ種の女装は、あまつさへその（素描味）へ自里に色味が加はる。説明以上に或る畫境への畫材です。

それはその「かたち」を描き生かして直ちにそれが「題材」への肖像となるから、美術として充分味はうに足るものとなる。それ等が此の際日本獨得なのは、それは元より贅するまでもないでせう。

就ては浴衣（うすき單衣）の場合にも、その「美」と共通のところは多分にあります。——然し此の服装の場合、つまり生活の日光には、云ふ迄もなくあり得る美しさの偏奇はぐつと避けられて、と云ふのは、衣裳の線美を格段に至るところで強調してあります。

先づ身なりの中心に當る胸部へがっちり（それは端嚴にと云へる）帯板をしめつけます。次いで背後へは、極めて進歩した濫い表現の工合に、帯の結び目やカケや舌がロココとは正反對の意味での、強い裝飾となり、殊にその色は屢々末梢をとり除くべた塗りです。それで、成る可く

丸味（質感）を形美の方へかくし、生かして了ふ。

殊にここに浴衣については一つの面白いやり方があるのは、意識か無意識か——恐らく前者でせう——浴衣には一體のりの強さを愛惜して、それは氣持もよく、實利にもいゝ、更により善いことには、つまり單衣が丸味を包むその「危なさ」をこののりは獨得の手續で無垢により健康な形ちの美感へ救ふ、さう云ふ仕方をとるところもあります。

で、さうした上で、前に云つた様に、日本の夏の女は決してさう手足、肌、胸などを實は着衣の外へは好んで現はすものではない。——何れはこの服裝に認める傳統は、凡て、美しい、進んだものと考へる。

○

私はかう云ふ浴衣を甚だ好ましく思ふのです。恐らく政信あたりの描いてゐる寛濶な風俗から、それが更に微妙に、つまりイキに、推移したものはあるまいか。兎に角、そこに認める夏の「女性美」は、一品と思ふに躊躇しません。

附記

——私は不取敢この文をかくに就て、差し當り源之助のお梶を念頭に浮べたわけですが、又、夏の鎌倉海岸なども念頭に浮べたのでした。乃至、偶々電車につて丁度向ひ合せたネルの着ものゝ人のことなども考へたのでした。——然し鎌倉（と云ふのははだかの海水浴や、大きな麥わらを被つて、袖の長く、帯の小さい令嬢）その他、一種ふくよかなネルの着もの（之れは夏とは云へないが、然し近頃の女は一體うすものでもネルに似通ふなだらかな切れ地を好む）——それ等の場合は、そのあり得る「美」から享ける感じがどうも云はゞ「淫美」で、とは云へその「淫」が「形ち」の風情に融けてゐると云ふわけのものではなく、つまりなまじついでいけません。それと甘くていけません。

尤もかう云ふには、凡て私が繪かきだと云ふところは、ぬきさしならぬ形ちの判断の立場です。——が、何としても、頃來一般のあり合ふ風俗は、概しておもしろくない。外國、即曲線美ならば、曲線の味感で何とか徹底してくれたら、又面白からうとは思ひます。近頃の大勢では、稍もするとそこが極めて中途半端で、それ故うす着の女装はどうかすると美よりは形ちなき質感の方へ思ひを誘ひやすく、即ち卑俗で氣に入りません。

きつと今時はそれを見るなら、その點は商賣人の藝妓が、乃至、町のおかみさんや姫達なら、相變らず仕來り通りに浴衣は「美しく」着こなされてゐるでせう。——それは直ちにその装をこつて繪になる、

と云ふ意味で、美術の「美」にかけて、あの平凡なものを矢張り一番それが美しいと云ふ。

六月八日記す。(十二年七月號、改造)

浴衣小感

一

浴衣がけは便利だと云ひます。無論便利です。久しく外國へ行つてゐると夏は故郷の浴衣がけが戀しくなつて敵はないと云ふが、さもあらうと思ふ。便利で涼しい點では外國のどの夏衣裳にも勝るものでせう。

然し只便利で涼しいが故に起つたものかと云ふと、それは一つにはさうに相違ない。夏不便で涼しくないものは行はれるわけがない。しかしより以上に、それが衣裳としての一つの風格を保つて、美しいがゆゑに、それで猶發達したものと云ふ。

——一體この浴衣乃至浴衣がけと云ふ字は何時頃使ひ初めたものでせうか。そこをつい知ら

ず、もし知つてゐる方があつたら是非示教を願ひたいと思ふ。何しろこの特殊な夏衣裳の沿革を一通り調べて見たらかなり面白からうといつも思つてゐる者ですが、(さう思ひながらついまだ調べられずにゐるわけですが)、どつちみち、文化文政の頃にその風情が江戸の町家の粹人——と云ふか、又は特殊なる識者と云ふか——の味覺に依つて賞鑑され、そこで、一つの「ゆかたがけ」と云ふ美術的に云つて立派な、まあ他の字で云へばあだな、いきな、それ迄の日本にはそこ迄はまだ無かつた極く微妙な味はひの風俗が、世の中に生じたものと思ふ。

その意味で、ゆかたがけは便利の涼しいものである、然しながら只それ故にのみ發祥した姿ではないと考へる。寧ろそれよりもこの姿から編み出せる「美しさ」——その味はひ——が時勢の人を刺戟して、そこで立派に生育した一つの風俗と考へるわけです。

他ならぬ不思議な時代、文化文政の産を思ふ上から、

「ここで一寸考へて見るのは、いつも衣裳に添ふ髪（かみ）の結びぶりのことで、我々は今日簡單に水髪とか洗髪、横櫛など、云ふことを云ひます。——丁度ゆかたがけと簡單に云ふ様なものです、——しかし之れは明らかに猶天明寛政の頃にはなく、天明寛政と云へば漸く女髪結（にょかみむす）の職がほつく一般になるかならないかの頃と云はれて、「女の風俗は天地開けて今ほど美麗なることなし。あた

まのさし物は辨慶を欺き、丈長、水引は地藏祭りの盛りものよりすさまじ」云々。明らかに水髪の清楚は文化文政に待たないと起らない。所謂その辰巳風俗のわけで、「地藏祭りの盛りもの」を通り越さないと、それをさつぱりと洗ひ落して束ねる味覺へは届かない。尤もそれと同時に一方には又金銀珊瑚の高島田もあつたわけだが、——横櫛と云ふのは、當時三代目菊五郎の女房お豊と云ふ人の頭にはけがあつた。それを隠さうと、横櫛にしたのを、町方の者が一齊に粹として眞似、引いては大阪へ迄も行き響いた風俗と云ふことです。

水髪も亦便利です、浴衣の夏など殊によからうと思ふ、(今は猶便利實用のものに断髪と云ふのがある。何れは坊主か。呵々)横櫛も隠すには便利此の上ない趣好です。——然しこれに就ては贅する迄もなく、決して、便利一つで起つたことではありません。その「美しさ」、所謂彼等の發見した、いき故に發祥したことで、之れに就て又思ひ合はすのは伊達の素足と云ふことです。さぞ寒さなどはさむかつたらうが、と云ふのは不便であらうがなからうが、その頃のそれ者は、そこに風情が忍ぶとなれば素足を法として断じて足袋は履かなかつたと云ふ。

洗ひ髪に横櫛をして、浴衣がけに装ひ、當時の句に「明石からほのく」とすく緋縮緬（ひぢくめん）と云ふのがあります。之等が若い人達の夏の正装を讀み込んだところでせうが、何にしてもすそさばきの

荒い、一寸肩へ米しほりの手拭か何か引かけた女姿を想像して見て下さい。——否、實は丁度さう云ふ風俗の浴衣姿が廣重筆のものでありますから参考に大體の線描きを寫し出しておきませう。これが何れはそもくの浴衣がけのいさみの姿です。繪そら事ではなく、かう云ふ人が文化文政から天保弘化、嘉永、安政……我々の前時代には、就中江戸の下町一帯には澤山ゐた筈です。當時兩國は夏の夜の花火の別世界としてある。かう云ふ人が三々五々立ち並んで、川風が吹き、水には木の梢がかゝつて提灯の舟が浮び、花火があがる。——世の中の現實にはあつたと思へない程の三拍子も四拍子も揃つた、何しろ日本の徳川と云ふ時代は不思議の世界です。ゆかたはその空氣の中で出來た、特殊な一産物である。

二

私は去年矢張り丁度今頃この「浴衣の美しさ」と云ふことに就ては比較的詳しい文章をかきました。今も略それと同志見に思つてゐる。それで、ここに再び同じことをくり返すのは難儀に思ふのですが、大體を云ふと、先づ此の浴衣と云ふ衣裳を衣紋竹へかけたところを想像して貰ふの



衣紋竹

が早いと思ひます。極く四角な、linealなものです。

それから婦人の裸體を想像して貰ふことにします。それは大體丸味から成立つてゐるものです。

——此の丸味の上へ四角な單への衣を蔽ふと、内部の曲線へ外部の直線がからむから種々のところに面白い交錯を編み出します。丸味（體軀）の實感を傳ばすところも多いが、又、外衣の直線を引き廻すところも少なくない。——然し胸から腰、尻にかけての部分は、どうしても單衣をからだの上へまとふたゞけでは見た眼が實感に墮ちて面白くありません。この書き方は讀者に失禮だが一行許して下さい。どうもそこは面白くありません。それで、形ちの美しさに對して敏感な文化文政時代の日本人は、胸のところへ持つて來て就中眞四角な帯の厚板を當てがふ。それをうしろへ持つて行き、大きくがつしりと結び目をこしらへて背負ひます。

腰全體はそこできりつとして、加ふるに、いつも浴衣がけには之れも四角な短かい着物のたもとが何彼と兩翼になり、之れも丁度帯がすると同じ役目を中味の丸さに對して行ひ、見た眼を調節するところとなる筈です。

で、之れも去年書いたが、西洋人はよく日本人の浴衣を稱して不しだらと云ひますが、どつち

みち殖民地あたりの浴衣がけで判断されてはやりきれない。が、私は思ふ。不しだらは西洋人の夏衣裳の方が極くく簡単明瞭だと思ひ、をかしく感じてゐます。——それに就ては源之助と云ふ役者のする女團七など云ふ浴衣がけの狂言を見よと、これも去年かいたが、源之助と云ふのは、偶々昔のゆかたを昔ながらに今着る人は、この源之助などが稀れに演劇で見せてくれるほか、他には絶えて例があるまいから便宜に云ふわけです。廣く云へば文化文政頃の人と云つてよろし。その頃のまゝ深川あたりにゐた人などは、よし暑いとは云へ決して肘三寸、はぎ三寸とは、着衣の外へからだを出す不しだらなど、あるまいと思ふ。そんな事をしなくとも浴衣は夙くに涼しく、源之助の芝居で云ふと、女團七はかなり烈しく此のなりで立ちまはりをするが、若し見物は彼のはぎを見ようと思ひ、肘を見ようと思つたら、偶然以外には、失敗するでせう。

浴衣は危ふいと見えて決して危ふくない。つま先一寸のかね合ひで形ちの美しさが中々實感へは墮ちず、きちつと、進んだ装束の美になる。

この實感へ墮ち想で然しとても墮ちないところ、これが引いては種々の場合、日本の美の秘訣となる様です。外國人は夏など腕から、すねから、胸から、初めつから開けつばなしに風に吹かせてゐます。種のない手品を見る様な *Handstand* だ。——然し意見は人に依つていろいろでせうけ

れど、日本人の微妙なやり方は装束の上で中々立ち入つて進んでゐると思ひます。之れを江戸獨得の粹とも、澁さとも、いきとも云ふわけだが、この點徳川時代の日本人は誠に二歩三歩と深く美藝の謎の中へ仕事を立ち入つて解きほごしてゐると思ふ理由です。

それから之れも去年云つたが浴衣には新しければ新しいで切地のツンとした張りがある。洗へばのりを付けると云ふ、思へば不思議な實益と美感を兼ね備へた伏勢がある。——のりが利けば又何とその丸味を蔽ふ *lineal* の味感は確固とすることだらう。これも徳川後期の人達はどうせ實利ばかりで考へたやり方ではありません。

三

で、今一寸今時ではもうゆかたを昔ながらに着て見せてくれる人は芝居の源之助などの他には見られぬ、と、前節に云ひましたが、之れは實際さう思ふところで、寧ろ、私がかう云はうと思ふ。ゆかたがけの風俗は恐らく文化文政時代の江戸町方の者の進んだ発見である。昔のものである。それが墮性なり習はしなりで段々と明治へもつゞきはした、が、みんな便利で涼しいから着

た。然し「美しいから」とこの意に味かけては着ず、その後今となつては、もうそろ／＼此のゆかたと云ふその本来の姿は、日本になくなつた。大正年度には此の風俗は既に昔のものとなつた。わづかに劇の一隅で源之助等の老優に初めて見るほか、一般の時勢風俗の中にはとうに見られぬ過去のものとなつた、と。

私は既にさう断言する方が、なまじ断言しないより本當に近いと思つてゐる者です。

それは今もゆかたと云ひます。——しかしゆかたとは假りの名で、實は内質の變つた、より正確に云へば中形單衣とも云ふべし。輕便文化夏衣とも云ふべしと思ふ。今町で賣りさばいてゐるもの、人々の着てゐるものは、あれ等は中形と云ふ一種の模様の近頃の單へものです。昔ゆかたと稱した、あの風俗とは殆んど全く違ふ。

多分此の中形と云ふ言葉なども極く近頃のものだらうと思ふ。——第一地質が昔と今では大變に違つて、少くも私の判する限りでは、今の例へばガーゼとか明石まがひのなにがしと云ふ切地、モスリンなど、あゝ云ふしなくしたものでは恐らくゆかた發祥の頃の人ならばこの切地は避けても、假りにもゆかたにはしなかつたらうと思ふ。——丸味を *Ball* に蔽ふと云ふよりは寧ろ丸味を丸味ながらに傳ばうと云ふ程のもので、その點西洋の服裝のやり方に近く、日本、少くとも

徳川期迄の日本のやり方とは異なるものである。

それ故耳かくしに結つたお嬢さんなどがモスリンのなよなよとした單衣を着て、フェルトの草履をはいた姿などは、たしかに當世風で、可愛らしく、大變甘やかのもので、それも一つにはよからうが、又眞岡の中形浴衣地をまとふた長袖の女學生なんぞも大正味感は充分です。簡單で、明瞭だ。

しかしゆかたとは云へるか云へないか、私には全く違ふ新規のものとしか思へぬ。

就てはそれに就ての考察は私にはさし當り餘り甘すぎで、それよりからいものを味ひ馴れてゐますので、舌が云ふことをきかず、つひ味覺する氣になれないわけなのですが——今時ではゆかたは偶々俳優に見るか——それもほんの一人か二人の昔ながらの人に——乃至は、ぐつと下がつて牛屋の女中さんとか、下町のおかみさん（多分ブラックでなしにはゐないことせう）、たまに子守とか、女あんまとか、そんな風の人達が何と云ふことなしに着てゐる。少し感じはあるが、とは云へ何ほ何でもこれ等の末期の泡沫では見るに見ごたへません。

又、所謂江戸趣味と稱する、藝妓とか、變なおかみさんとか、さう云ふ人がわざと着てゐるのがあります。わざ／＼探しに探して如源の抜けのいゝ帯などを買つて來て、横梅にして見たり、眉

毛を剃つて見たり——それは實に又私は断はりたく思ふ。それ等の幽靈に惱まされるよりはいつそ無くなつて了つたとさつぱり見極めをつける方が、氣持もよし、本當でもあると思ふからです。

で、——ゆかたは美しいものでした。然し今はもう無くなりました。

せめて我々は少しは絢爛の前時代に近かつた爲め、前時代のさう云ふ特殊の風俗なども垣間見ることが出来て、——これはたしかに知らぬよりは知つたゞけ何彼に、殊に美術の上には、利するところがあつたと思ひます。

(五月初旬)

附

私は中形と云ふものを餘り賛成しません。殊に中形のがらには曲線的のものが多く、大きな丸などは元祿時代など、おほどかな風俗なら知らず、今の細つこいなりでは、どうもがらだけ浮き易く、不釣合と思ふ。——此の點にも浴衣の發祥の頃の人のがら合ひには、大てい直條の例へば辨慶とか、格子とか、種々の縞、それ等が用ゐられてゐて、中の丸味を蔽ふて味感のきりつと締まる、そこから粹も澁さも出て来るそれにも合ひ、私は矢張り浴衣には直條模様のもに賛成

です。

乃至はいつそみぢんにして了ふか、小紋の様なものにするか、絞るか、——實は先達て友人佐竹弘行の草葉染の爲めに少し浴衣地をかいて見ました。然し机上案と仕立てた實地とは、どうせ經驗もなし、うまく行くかどうかは我れながらけんのものですが、私は大體以上に云つた様なところからちつとも珍らしくも事新しくもない様のがらばかり描き、只少し當世風にしたつもりのは、千筋なり何なりに在來のものより線にやはらか味を持たせて見ました。——これはどんなものになるだらう？ 少し楽しみでもあり、然し餘り好んでは御吹聴しない、何れ見て貰つて、着る氣があつたら着てもらつて、實は小生自身、その着た姿を見て見たいと私かに思つてゐるのです。乞賢察。

毛織の流行に就て

昔の落語にそばが羽織を着て座つてゐたと云ふのがあります。又お家騒動などの草さう紙を見ると、ないがしろにされた奥方の衣桁にかけた着物が、風もないのに下ちて、ゆらくとくづ折れて殿様のうしろに座る圖などがあります。——私の本號に寄せた繪は、上圖はセルの男羽織をその襟をつまんでゆらくと疊の上へ落して見た圖です。下圖は同じことをお召の女羽織でやつて見ました。

此のおめしの方は——おめしに依らず日本在來の糸織物は——例へばその襟をつまんでゆらくとくづ折れさせると、襟のところなどは自然なよくと重なる。中へ空氣のはいつたところは一時ふくらみます。然し直きにしんなりとつぶれて、あとには例へば背すじなり、袖のところなり、縫合せ目がくつきりと持ち上つてそこに全體の形ちに、——心なき形ちである——しかし何故

かしら素描の自然と生きた、随つて形ちの締まつた正に、そばが羽織を着て座るも故あるところである。殊に奥方の着ものがゆらくと衣桁から歩き出して、恨めし想に男の背後へ座る、凄艶無類の形ちを生む筈だ。――

ところがネル、セル、モスリンと云ふ種類のもの、おしなべて外來の毛織ものは、こここのころがとても今云つた様には行きません。ひとりでにそれをくづ折れさせるは愚か、かなり丁寧に人が手をかけてやつても、例へば私の寫したセルの羽織の場合など、ガバガバと座り込め。しんなりとは行かず、一體火のし目の利かぬ念所々々のたるんだ細工ですから、襟などはトヨの様な工合にたはむ。廣幅の袖から背などへかけては、そのモデリングが一體にぶわくして、線にはロココ式のうるさいカーブが多い。皺はく乃至久字形には行かず、S乃至698、さう云ふ風に行きます。

つまり外國的である。

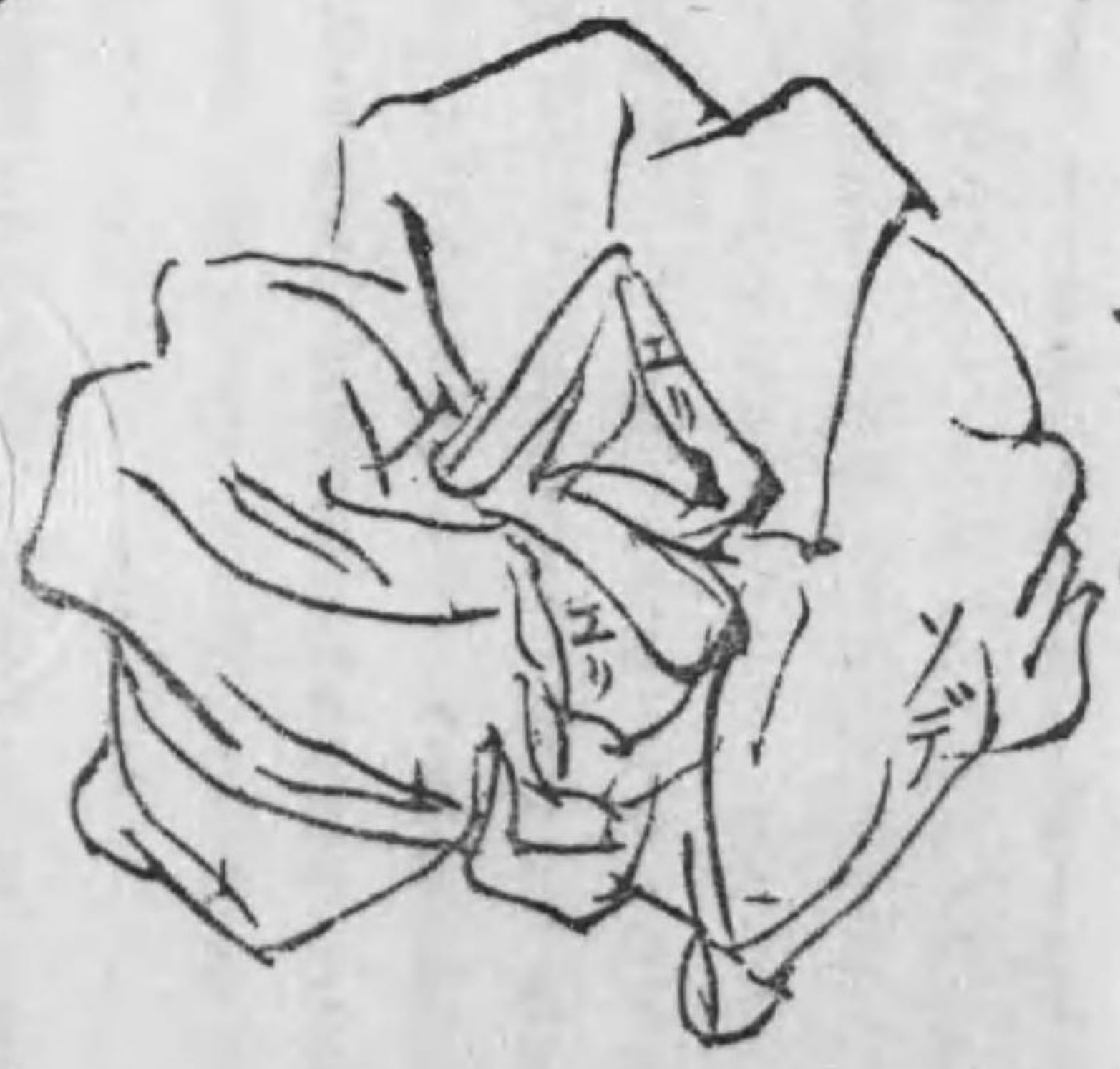
日本的に行かない。

○

着ても所詮は之れと同じ味感なり効果が形ちの上に現はれる。



セル



おのこ

七月
子月
年

ネルの着ものは就中地厚で素描が曖昧だから、それを着れば、丸味は丸味なりにもつこりと外線へ現はれて、つまり、女は肉感的に見える。——多分小十年前からしきりとネルがはやつたのは、それを男も着たからではなく、女が着たせいでせう。と云ふのはそれを男が見て、體感的にイヤに氣に入つたからである。——どうも美感からとは考へられない。

セルはその後段々と製法がうまくなつて、値も手頃なり、合の時候には肉もよし、それともう一つの蔽ふ可からざる理由には、近頃日本は擧げて「日本」よりは「外國」の方が好きになつてゐます。殊に若い娘さん達は。一寸ひじのところへSの字形の皺が出来たり、地合がほつそりしたり、何となく氣に入る。且、之れにも所詮はネルの様な中味の丸さを丸さなりに陶然と現はす魔術のところはあつて、縮緬の様に同じく中の丸味は包め然し例へば腰のところなどでいきなりドスンと重い線を下すとか、結城の様に中の丸味へ外から苦くからむ。乃至銘仙の様に小皺がきやくする。——さう云ふところがない。

それ故に在來の日本衣裳は衣裳としての獨得な藝術的美感を生じたものを、——さう云ふところは毛織りにはない。

もう一つ無いところがある。——着る人達の眼にそれが更にならない。で、却つて近來は日本を離

れる日本衣裳が離れれば離れる程、彌々好いたらしい様の傾向があつて、何れは「日本」がそつくり萬事にさう云ふことになるのか、まあ手近かな話、ネル、セル、モスリンの類、スカート、レース編、種々、おしなべての女風俗を變へつゝあると思ふ。

○

「この風俗も中々いゝぢやないか」と云ふ人があれば「さう、安直で簡單でよからう」私はさう答へる一人です。だがせめて唐ちりめんまでとあれかしと思ふ。

それからネル、セル類に就てはその肌ざはりの善さも行なはれる主要の理由となることとせうが——肌ざはりがいゝ？ 大きに日本人も段々とからだ中毛むくぢやらの人種になるものかしらん、無氣味だ。

(断つておくが私もセルを着ますが便利だからです。洋服萬年筆と同じ。末は圓太郎とも同じだ。今はさうだ。)

寄席についての話

—

「寄席について」と云ふ題が來てゐますが、私は此の頃その寄席へつい久しく行きません。K氏が今度の雑誌へその題でかかないかと云ふので、それでは兎に角二三日中に寄席へ行つて見やうと云ふことを約束をしました。實は今夜行つて見やうかと思つてゐました。兩國の立花家へ行つて見やうと思つてゐました。——何がかゝつてゐるかは知りませんが、あすこは感じがよからうと思ひます。殆んど(私の住んでゐる)本郷邊の寄席へはどうも近頃行く氣になれません。一つ二ついゝものを聞く爲めに八つも十もいやなものを聞くのは疲れていけません。尤も、立花家と雖も大體同じこととせう。然しあすこならまだ何とか我慢出來やうと思ふ、と云ふのは、私

は子供の頃すつとあのそばに住んでゐましたから、度々あすこへ行ききました。母や家の者とも行きましたし又、その頃家に政吉と云ふ御飯たきがゐりました。その政吉と度々行ききました。此の男は又非常に藝人で殊に大津繪が得意でしたが、私はそれで「赤牛の云ふ事聞けば……」と云ふ立花家で聞いた大津繪を政吉にいく度も教はつて、おほえたことがあります。——こんなことで、あすこ（立花家）は懐しいところです。殊にあすこの二階の右のはじの手すりが懐しいと思ひます。多分今でもその斜め上に忘れ物御注意のビラがあるかも知れぬ。定員百何人とかの木札もあるだらう……私のよく行つた頃には手すりにはすつとまとひづくしの幕が張りまはしてありましたが、さう云ふものは然しその後どうなつたか、天井のシャンデリアも變に立派で氣に入つたものだったが——今見たら如何に懐しい明治味感のものだらう——然し今は或ひはスリ硝子の大幅の様な燈りに變つてゐるかもしれぬ。

兎に角寄席は變つたと思ひます。——その後久しく行かないのです。で、今夜は一つその立花家へ久しぶりで家中で行つて見やうかと思つてゐたのですが、昨日大雪がふりました。今日はやんでゐますが却つて道はドロ／＼です。この中を、足駄をはいて、はねだらけになつて兩國くんだり迄行くのはかなり難儀です……つひ「寄席へ行つて見る」約束は編輯のK氏としながら、

然し行かずに了りました。

で、明日は更に「約束」の原稿締切日です。つまり私は今夜立花家へ行つて、その感じか何か家へ歸つてから書いて、明日不取敢お渡ししやうと考へてゐたのです。——然し肝腎の寄席へは今夜（にも近頃にも）行かないのだから、結局書くことは何にもなく、即ち明日はK氏にあやまらなければならぬのが順かも知れません。

が、私はさうして近頃どうも寄席がおつくうになつて、今夜も實は雪よりも何よりも同じくそれでつひ行くのが面倒になつたのが本當ですが、私は實は寄席が誠に好きです。近頃さらひなのは「寄席の空氣」がきらひなのですが、或る寄席の藝なり藝人は、今も誠に好きです。見たいと思ひますし聞きたいと思ふのが本當です。たゞそれが稍もするといふ工合にきけないので、つひいやになつて了ひます。なまじ行つて又も羨へ切らない氣持にされるよりは、まだ自分で勝手に追想なり想像なりしてゐる方がましの感じがします。——殊に今「寄席について」何かかく氣になつた上は、なまじ正體を見るよりは霞を透して聞いた方が近頃では利巧の感がします。

さう云ふわけで、一番本當をかくと、私は今夜何か寄席について文章をかゝうと思つてゐました。それにはもし立花家なら立花家へ行く方がよければ行つてからと思つてゐたが、夕方になる

と、どうせ行つたつて又つままるまいとつひ氣が變りました。それよりなまじ此の頃の變テヨな感じは見えずに、少くも自分には「之れがい」と思へるその「寄席のこと」を机の上でそらでかく方が此の文は面白く行くと考へたのです。——私はどうも此の頃その「寄席」がきらひです。で、今夜は結句寒い思ひもせず、はねも上げず、例へばぎん蝶の様な——それがうよくと出る——末世の聲もきかずに、之れから一通り私の懐ふ「寄席」のことを一つの手びかへにかいて見るのです。時にかう云ふかきものは、冬の夜などには、なまじの物思ひなどより面白い、氣持のいゝものかも知れません。

——斷つておきますが、此の私の云ふ「一種の氣持よさ」、それを以つて私が之れを記す。それが讀者にあり得る閉口な感じを與へるとしたなら、然し筆者に於てはさう云ふ感じとは成る可く親近になりたくない爲めに、自分のいやなものは先づいやとしてお返し、即ちいゝものはいゝとしておくつもりなのです。それをかき記すのを氣持よく思ふと云ふ意味ですが、もし何だかイヤに變通がつて古へを賞へ、今を貶す、「イヤな奴だ」と思へたら、然し私は實は我れながらそれで困つてゐるのです。つひ通人になつて、シヤボンを食べはされ想な氣に入らぬ感がします。つまり私の様な若い者までをも——唯その人に「藝」の或る感じがわかると——通人にさせずにはおかぬ。

ぬ。それ程、今の諸藝は藝として成つてゐないと云ふのが當るでせう。

私は云ふが、私は藝を味はうと思ひ、又、少しは味へると思つてゐる者です。——それは通人もへちまもない、私の正直な本音だ。——で、成る可く寄席などへも行つて見たいと思ふのですが、つひ行くとはい非藝を藝として賣られ、切角のいゝ藝人は投げ、愉快より不快をより多く感じ易い。寧ろ行かぬに如きません。

私は此の頃寄席より蓄音器の方に好意を持てゐるのです。——差し當りその事からさつとかく事にしませう。

二

然し目やすを定めて「寄席」の藝としませう、——先づ第一に私の擧げたいのは橋之助のレコードです。

此の人は最近ではたしか去年秋の終りに聞いたと思ひましたが今更に感心しました、聲が唄の中に全く込み込んでてシーンなり情景なり、そつくり浮んで來ます。それと、もう一つ此の人

にいつも興深く味感を享けて盡きない感じは、例へば建築で云ふと博物館本館の建もの……と云つた風の、懐しい明治味感です。それが今は「藝」となつて津々と盡きずに汲めることです。それから、云ふ迄もないが、パチさばきが甚だ立派だと思ふ。座敷の藝、乃至芝居の舞臺の藝——とするには或ひはあの強すぎるアクセントでは向かないかも知れぬ。然し、高座から歌ふ寄席の藝とすると、あのきび／＼と急所の締まる音の出し方は、物を小氣味よく噛み切つた様な、特別なものです。——

私は「ほこりたゞき」のレコードを持つてゐてよく聞きますが聞く度びに氣に入ります。聲に年期のこもつた錆びがあつてどうして中々重い。よくレコードに入つてゐる春風亭柳の歌などと云ふ安つばい味とは格段の差です。——もし柳の歌を所謂「寄席藝」の寄席くさゝとすれば、橘之助は正にそれが優に藝境へ敷へられた場合の、今は既でに珍らしい一種の小唄と云ふことが出来るだらう。あの人の濛いなりをして、心持前かゞみにこゝんだ、そして三味を持つた高座の姿もいゝ。顔もいゝ。指環が光るのもいい。如何にも東京にはかう云ふ一境の藝があると云ふいゝ感がします。あの人だけ聞きに行くなら寄席は大賛成です。(何故なら座敷やレコード、有樂座などでは、その味は汲めないのだから)。しかしそれには唯おまけの有象無象を澤山聞さなければな

らないので、先づ近頃では蓄音器で聞きます。

同じ小唄の人に萬橋があるがこの人も今は珍品と思ふ。例へば「是非とも」の如きもたしかに寄席を生かしてゐる。スケールは他の藝から見では下るが、然しそこに又特別な味のあるのを誰に否定出来やう。不思議な文化の一断片の氣がします。「逸品の三好。下つて今の助平。それと一寸今思ひ浮ぶがよく「日清談判破裂して」の様な「詩」をうたつて踊る何とか云ふ色の黒い男も中々いゝ、三好と同轍に踊りが高座を生かしてゐる。が少し之れはイカものにはなるが……

(そのイカものゝ然し面白さよ、私は郊外にゐた頃、よくその邊にかゝる新派、喜劇、色もの……等へ行つて大いに喜んだことがあります。今日は段々之等も少なくなるかもしれないが、壯烈な乃木大將の芝居を品川の祭りで午前四時迄見たことがある。五寸釘寅吉も見ました。子分が火のついた棒をふるつて立ちまはりをしました！それから稻の家豊樂は見付け次第に見ましたが全く「面白い」それ以外にはない珍品です。變な萬歳も見ました。その他猫化け。酒香童子。手をまはす藝當、河童。——あれ等は末梢神経の清涼劑です。せめてあれ等を市内の寄席へ出すといゝ)……その點でイカ物にならぬ立派な高座の踊りは、先づ助六のそれだと思つてゐます。

唄は忘れましたが、何か有名な小曲につれて大名行列を助六が踊るのをわりに近く見たことがある。一寸小腰をかどめ、縮緬(?)の腰まきを月形に見せて毛やりを立てながらやつて來るところ、甚だよく高座を生かした一杯の藝だと思ひました。ハハ一つ半、と云ふあの人の持ち味も得がたいものです……

萬橋のことから脱線しましたが、再び蓄音器に返つて、私はたしか富士山のレコードに一枚萬橋のものがあるのを見付けました。で、買ひに行つたところ、あの盤は賣れないので今は田舎にしかないと断られました。田舎にしかないは變に皮肉です。

何と云つても東京の者は所詮東京の者です。こんな事を云はれると一寸腹が立つから滑稽です。萬橋氏の健康を祈る。呵々。

もう一枚寄席のものでは長壽の聲色を持つてゐますが、何れ、圓鏡のも買つて來たいと思つてゐます。共に聲色では上々の部だと考へる。殊に二人ともその人(にん)とでも云ふか、つまり高座つよりがいゝ。殊に圓鏡のギス／＼した味は又逸品だらうと思つてゐます。それに、此の二人とも所詮昔の風ではない「新味」があるが、その新味が決して臭くなくひねられてゐて、近頃では見ものゝ一つでせう。

殊に私は長壽のダークの繰りを殆んど他の何よりもと云つていい、愛好します。ダークそれ自身はもうなくなつて了つたが、正に長壽に残つてゐて、此の明治味感も興するに足ると考へられます。——一時私は一寸小文治の踊りが好きで(然し彼に就ては猶踊りよりはけいこ屋などの話が好きで)度々見に行つたことがありましたが、或る人が云ひました。あの人の踊りは舞臺に向く、と。あとで、私は思ひましたが、そのせゐかも知れないがあの人の踊りは高座の域には煮え切らぬところがある。何と云つてもあの小さな「高座」が寄席の藝には必須の「材料」となるものである。それを生かさなければならぬ。舞臺や劇場などには勿論向かなくつていゝ。近頃小文治は殆んど好みません。或ひは向ふから來た當時よりは、近頃東京に馴れ(?)て藝が下つたのではないか。

東京の人間は淡白でイヤに媚びられるのは好かないから、小文治の様にあゝ藝境以外へ走つてまでネチ／＼するのは損だらう。寧ろ右女助の様に持ち味一點で行くのがいゝのだ。しかし近頃の客にはあの方がいゝのかも知れないと思ふが、藝を見に來たのか、人間の下等さを見せられに來たのか、その點のはつきりせぬ場合が近頃の寄席には盛んにある。かけ聲に「商賣々々」と云ふシャツを着た男だの、すべたの女道楽、ぐす／＼云ふ劍舞、猫八——彼は昔こんびら様の縁

日などにゐた頃にはいゝ男だった。——先代を恥しめるぎん蝶。或る場合小勝。その他藝の全く獨立してゐない。唯かせぎに現はれるものゝ哀れな琵琶、長唄、手品師、外国人、唯珍しいもの、等。尤も之れはいつの寄席にもあることですが、唯餘りにそれが多いと、あそこへ行つて却つてミゼリーを見せつけられる様な、情けない、つまらない感じがします。

要するに今輔、左樂、やまと、扇橋、金馬、圓馬、小圓朝、燕枝、……さう云ふ様な、何所かうまくはないが然したしかに藝人ではある（やまとはこゝから除いてもつと高く買つてもいゝ）、かう云ふ人達が出てゐれば、安心は安心だ。——唯私は近頃これをさう思ふので、然し好んではどうも今更燕枝……を聞かうとも思はない。つひ何となく縁が遠くなる。

三

蓄音機へ紫朝の偶々はひつてゐなかつたことは、今から思ふとたしかに時々惜しく思ふことです。ところが之れは私の寡聞で、後にエクターの盤に入つてゐる事を知りました。——後記——然し私は當時まだ子供で、よくは分らなかつたが、今加賀太夫など聞くにつけ、ありし味を

思ひ返して、想像もする。あの人はきつと珍らしい悲歌の名手だつたでせう。——私は去年本郷の鈴木で二度ばかり圓子の曲を聞きました。ところが曲よりは計らず彼のはなしと、踊りとに、感心しました。非常に久しぶりで見た古風な「圓遊」でしたが、あれも多分今では此の純明治の大才を偲ぶ、珍らしい藝人の一人となることだらう。此の頃は若い藝人が變にエラクなつて有り得る圓遊圓などは馬鹿にしてゐる様だが、間違つてゐるだらう。少くも寄席の藝にとつては。三語樓などは、あの人にはその圓遊味のいゝ所が中々あると思ふ。餘り感心しない新語などはやめにして例へば「ガマの油」にもつと徹するといゝと思ふ。

「圓遊味」とはすつかり板についた、そして屢々藝の中で悠々遊んでさへゐる、圓味のあるところのことです。多分少し下司つぽくなるがそれは寧ろ避けない方がいゝ。——文治、正藏、柳枝……等には、中々藝才は鋭いが、然し少し繪で云ふ二科會味感が多すぎて、つまり藝道のクラシシズムが——その暗示にせよ——抜けてゐるかに感じられます。（馬生、馬樂などはそこをねらつてゐる様だが、器が小さい様だ。寧ろ市馬の方が素直ではないかしらん。）

私は昨年人形町で伯龍と正藏の二人會を聞きましたが、正藏の出来はその晩矢張りいつもの正藏味に、いゝ出来でした。あの人の「扮する」子供の生々しい味とか、川の中で河童に欲しがら

れる話などは、獨得のものだ。たしかにいゝ出来でした。——然し一方の伯龍の味にはとても正面からは取組めない気がした。藝が違ふと云ふよりは「寧ろ、藝のスケールが違ふ気がしたのです。一方は正道なのに他方（新派の落語家）はどうしても奇道の感がします。——此の點、何と云つても、私は今は圓右にみつしりと、かじ、か澤とか芝濱、火事息子の様な話し、それ等を聞きたい気がするのです。たゞ圓右は變にそれを投げる様なので、たんのう出来ません。で、東京と京都の祭りの話しをし合ふ圓喬を思ひ出します。太鼓腹の圓左、彌次郎や首提灯の圓藏を思ひ出します。今の圓藏もかなりいゝところがあると思ふが、最近二三度聞いたところではいつもぞんざいすぎるので、聞きたくなくなつてゐます。小さんはどうも餘り好まないし……

先年たしか紅梅亭で柳好(?)と云つたと思つた。さう云ふわりに若い人が眞打となり、いつも一番おしまひに中々本筋の話をしてくれました。子はかすがひと芝濱とを聞きましたが、好意を持ちました。あの人などはどうなるものかしらん。然し近くその人で聞いた喧嘩にヨシヨシのはひる話は、又餘りに機才が古手で感心しませんでした。

○ 大體そんなわけで、私は大いに寄席好きです。しかしつひ稍もすると切角の御愉快が「不愉快」

にされてしまひがちなので、なまじそこへは餘り好んでは行きません。家で蓄音器をきいたり古い速記をよんだりします。先づ今のところではそれよりも活動です。——あれはどうせあんな器械仕かけのへつぽこものですから、初めから如何にへつぽこが現はれても驚かず却つて面白い。偶々ナヂモヴなどに出逢ふと中々氣に入ります。その他ドイツの文藝ものなどは、表現は下手だが、しかし時々テーマに眞面目に感心させられるので、その方（活動）を好みます。それと時々講釋へ行きますが感心します。唯講釋は何だか辛氣くさくなるのでその感じは好きません。誰か大才の話し家が出てくれるといゝと思ふ。之れにて筆を擱く。

二月九日。(十二年三月號、新演藝)

落語の面白味を感じたのは——そのそもく最初の記憶は、今からは大分以前のことです。當時私の祖母が落語好きで、よく私をつれて色もの席へ行きましたが、殊に朝枝と云ふはなし家が出る席へは——それを祖母が好きで——かなり逃さずに行きました。

落語断片

私が落語の面白味を感じたのは——そのそもく最初の記憶は、今からは大分以前のことです。當時私の祖母が落語好きで、よく私をつれて色もの席へ行きましたが、殊に朝枝と云ふはなし家が出る席へは——それを祖母が好きで——かなり逃さずに行きました。

その朝枝は、裏は何だ、ぬけ裏だ、カア……と云ふやうなそのカア……と云ふのを、聲をのどへ引つけて下司つぼくやる、思へばガラつ八の變な男でしたが、祖母は屢々人にも云ひ、私にも云つて、朝枝が出るともう出たのを見るだけで、をかしくて涙が出る、と云ひました。——ついその祖母の感じなり鑑賞なりに感化？ されたと見えまして、私も長らく朝枝が好きであり、ああ云ふのが落語だと思つてもゐました、をかした話だが、話し家をやらうか、裏は何だ、ぬけ裏だ、カア……と朝枝の眞似を度々しました。

—あの朝枝と云ふ話し家はその後如何したかと思ふ。

○
それから、頭のはけ上つた、度々高座一面に道具幕を張つて芝居ばなしをする、その男はいつも黒の紋つきを着てゐたやうにおほえます——。その人の高座が好きになりました。今でもおぼえてゐるが、お岩様の話か何かで手を角帯の兩腰へ當て、一寸上體をひねつて中腰になり、何でも川の中か何かを見込むフリをする、と、鐘が鳴つて、高座がくらくなる。何だかそこへ蚊帳があつたりフラフラお化けが出たり、記憶ははつきりしないが何となくそんな感じを思ひ出します。が、兎に角、その時のその人の話は大變こはくて、つまり感じがにじみ、未だにその感を記憶してゐる思ひ出があります。

それがどうもその後思ふに今の圓右らしく思はれる。

就ては近く新朝と云ふ人で同じく怪談の仕方話しをきゝましたが、こつちが子供でこはさの感じが昔きびしかつた、とそのせいだけではなかつたでせう。——私はその時もしきりに十數年以前に聞いた圓右を思ひ出して、もう一度聞きたい思ひがしました、席事はたしかに兩國立花屋でやつた話です。

○
小遊三が大いに好きでした。「汁粉屋」と聲をかけたこともありましたが、例の士族の商法の話をするのですが、汁粉を食ふフリの時にはこつちも汁粉が食ひたくなつて、然し拙いのに、食ひすぎて、しまひに頬をふくらし、口をつほめ、兩手にはしと腕を持ち、のび上つて、眼を白黒させてキューと云ひます。——いつでもそこへ來ると、全くうれしくて字の通り抱腹絶倒しました。それで小遊三も必らず聞きに行きました。あの人の「おかめ」も好きでした。

○
それから一頃三福が好きでした。あの人が變にギスギスと高座にかまへ、着物の下に前を引張つて少し横つ坐りにモチモチしてゐる。干し大根……キューツ、キューツ、と云ふさのさをよく無氣味な調子で唄つたと思ひますが、あとで氣が狂つた？とか聞いた時には、大いに同情しました。又、さもあらうとも思つたのでした。

それはかなり年をとつてからの——とは云へ中學位のだが——記憶です。

○
で、その他いろいろの記憶がありますが——

近頃では誰が話したのか忘れましたが、多分すつこけの酔つばらひか何かが道で郵便配達に逢ひ、「おい郵便屋」と靴をのぞき込んで、「澤山あるなあ。一つくれ。君、一つくれ州へ」とねだる。郵便屋は大いに弱つてしきりに辭退する。「けちな野郎だなあ」と怒る一節がありました。

甚だ實感的でおもしろいと思ひました。

或る時當時の小柳枝の何だか泥棒のはいる眞似か何かの話をききました。壁に繪をかゝせてたんすや火鉢のある様に見せるところがある。その火鉢をかく時に、火の上に鐵びんをかき、フーと唇をとがらせて吹いて鐵びんの口から湯氣の出たところをかけと繪かきに云ふ。——小柳枝は眼がさかさまで、それに口をとがらせるので、そのまゝ鐵瓶の怪物の如くに見えました。何でもその話のまくらか何かです。與太が腕組みをして、えゝと格子を明けしないで中へへえるのは、けぶかあ、オナラかあ、幽霊か、と考へる。——私は此のけぶかオナラか幽霊かをよく思ひ出して、人の所へ行つて門口で御免なさいなどと云つてゐる時、フトをかしくなつて困ることがある。と云ふのは、甚だ氣に入つた述懐の一つです。

○

市馬は甚だ好きです。あの人は本郷にゐると見えてよく往來で逢つたり、又は洗湯で逢つたり

しますが、勿論先方は知りません。いつもしきりと何だかゴトゴト云つてゐます。練習してゐるのか、藝が身にしみてくせになつて了つたか、それこそ少しけぶか幽霊かだが、あの人は中々藝境に身を入れてゐて、高座が話中に引立ちます。

近來好きになつてゐる少數の一人ですが、あの人の話ではいろ／＼聞きました。殊に夢金と、侍に路次からうどんか何かを賣る話とが今思ひに浮びます。「夢金」の舟をこぐところは扇子をギリギリ、ギリギリと云はせてゆく一風です。それに乗合に話しをしかけられてこぎながら、へえ？と返事をするところが、一體あの人の顔は長く、どつちかへ少し曲つてゐる感じがして、——それはわる口ではない、だから猶いゝと賞めるのです——それで鼻がツンと高く、眼をわざとそつぽへ向け、意氣な鼻聲でへえ？ と云ふので、大變その船頭が氣に入ります。

従つてまぬけな路次のうどん屋も氣に入ります。上からひもを下けられて、それへうどんか何かを結び、窓へ品物を段段と上げてやるところ、その所謂イキも眞情があつて中々いゝ。

殊にこの人の——うどんの話であとで出て来る——しつかりした叔父さんが又いゝ味ですが、私は文治や馬生のさう云ふ「叔父さん」(少ししかつめらしい)より市馬の意氣な叔父さんの方が好きです。何だか情合の温かい氣がするからです。

何だか大變市馬を賞めましたが、賞めついでに此の人の鼻唄も賞めませう。扇子で半面をかくして死なんばかりに張り上げるところ、大いにいゝと思ふ。遠慮なしに唄ふといゝと思つてゐる一人です。

○

猶いろ／＼とかく事はあらうが、紙數が來ました、此の邊で擱筆します。

(女性、大正十二年九月號)

鷓鴣石

昔の女形は小屋へ入つても舞臺へ立つ迄は相手の立役と顔を合せない様にしたと云ふことです。つまり色氣が醒めては舞臺で情がうつらないから、「樂屋」は見せない様にしたと云ふ。それ迄に心を配つたらさぞいゝ芝居が出來やうと思ふ。「面影のかはら撫子秋更けて我起ふしを人に知らすな」この瀬川路考の歌について、明治二十三年に出た温古堂主人編述「演劇通史」と云ふ本に、さう書いてありました。

その路考——但二代目となる——の云つたと云ふことに、女に惚れられるよりは男に最負にされた、持ものなども女に眞似をされれば本望だ、と云ふのがありました。女の腹の立つ時にはせりふの前に泣き、口舌はさら／＼と云ふのがいゝとも云つた想です。

山下京左衛門の云つたことと云ふのが誠に珠玉のもので感心しました。惚れた男には仕草を控

へ目に、惚れられた男にはすかくとする。貞女を亂す様な註文は、作者が、何がどうあらうとも、斷ると云ふ。

栢筵はさすがにいろんなことを云つてゐます。役者は人間の見せものなれば成るだけ身綺籠にするがよし、夏は絹の頭巾を放さないのがいゝ、と云つてゐます。——私にはこの絹の頭巾を云ふところは、感じはわかるが、有體にはわからないのですが、たゞ何だか心意氣がほの見えて美しい。地顔は悪ければ見せず、舞臺にて日本全國人に見す可し。

日本全國人に見す可し。さすがは成田屋の貫祿の氣がします。韋駄天の革羽織で何とかして來てもビクともしなからう。荒事に就ては、荒事は七八つの子供の眞似をする心で行く、俠者の眞似は下司ばる、と。

眞直ぐ舞臺の正面を向くと荒事は弱く見える。筋違に三角にかまへれば大丈夫になる。足は兎角投げ出すがいゝ。

角前髪の荒事は娘の酒に酔ひたる氣持にて演るのがいゝ。——この句は市川海老藏とありますが、あの大きな荒事をしなやかに扱ふ自家藥籠中のところが見える。夢でもいゝ、よく繪にある太いきつそぎの竹を持つて、舞臺八方に荒れに荒れ、怨靈、妄念、邪鬼の類ひを拂ふと云ふおし

戻しなどが見たい。丹繪漆繪の様なあの有様が見たい。

それ等があゝ現實に此の世にあつたかと思ふと——時々不思議に感じて、想像して酔つて了ふ。大谷廣次は、藝は日向で仕習ふがいゝ、日蔭でする様な藝はない、と云つてゐますが、全く餘りに左様だ。腹が立つ様な同感を感じて變です。

これも市川海老藏（七代目歟）の云つたところと思つたが、般若は泣心、幽霊は氣合のわるい心で演と云ひます。亡魂はきつぱりと潔くする。

唇に白粉をつけると顔色青さめて凄くなる。——然し之等は無論今でもさうしてゐやうと思はれますが、——藍は立派で凄味がうすい。この色に對する感じは、正に「藍」が見える。末期の浮世繪など此の一言でかなり名評でせう。

同じ人が云ふに、にらむ時には一たん目をつぶつてそれからにらむと利く、と云ふ。名代の眼玉の大親方が云ふ。

侍は腹が立つたら坐る。町人は立つ。武士は口論に刀に手をかけぬが強い。——生酔は疊を見て物を云ふのがいゝのださうです。吃はさしすせそとかきくけこを吃つて、あいうえお、はひふへほ、らりるれろ、まみむめも、たちつてと、此の假名は決して吃らない。之を吃ると云ふことが

わからなくなる。

これは宗十郎の云ふところですが、なるる程の感がする。猶云ふ。——畜生の變化は足をつま立て、歩くのがいゝ。しかし脊の高い人はつま立つと鈍に見えるから踵で歩くのがいゝ。——「つま立つと鈍に見えるから」のところ、その様を思つて吹出してしまふ。

道化師松島茂平次は云ふ。脊高はたてしま。脊低は横しま。

凡てレオナルド・ダ・ビンチに聞かせてやりたい。さぞ喜んで目を細くするだらう。「婦人はつゝしみ深い様子でなければならぬ。兩足は閉ぢ、兩腕は組み、頭はうつむく。老婦は大膽で生き生きとしてゐる。身ぶりは烈しく、幽鬼の様に、殊に、頭と手の運動の方が足の運動より烈しい。」
(レオナルド手記)

老人は動作がおそく無氣力である。立つてゐる時には膝が心持かがむ。兩足先きは平行してゐて、踵は一線の上にある。間は少し離れてゐなければならぬ。からだは前方に傾いて、頭は垂れ、腕は双方とも體のわきから餘り離れてはいけない。(同)

又「老人は長衣がいゝ。若者はびつたりと身につく衣裳がいゝ」(同)
宗十郎や茂平次に聞かせてやりたい。

訥子曰く、名人の眞似より下の者のうまいの、眞似の方よろし。その者より少しよければ眞似とは見えず。之れ祕事なり。

實際「之れ祕事なり」の少しおかつたる感じがしました。加へて云ふ。的をねらふにも下をねらへば當る。——とくどいが、少し怪しい。然し、傾城買の狂言には提灯持より先きに行く。

(同人)

之れは實感らしい。「可愛い者を見るには目を見る。にくいのを見るには鼻を見る」このねらひなら確かにはづれない。

敵役は随分叮嚀にする。可笑味はなきがよろしい。(市川宋三郎)——之等は藝術は長く人生は短かし底の名句と感じます。ぬきさしならない。

柏筵は自らかう云ひました。茶器と醫者は古きがいゝ。作者と役者は若きがいゝ、と。さう云はれる「作者」竹田出雲(初代)は云ふことに、——作者は九年。よからうと云はれる間が三年。佳作三年。燒直しが三年。跡先九年の餘光にて最早よいと云はれゝば直ぐ老い込むものなり。

○

以上、いろいろ面白く讀みましたので、老婆心にてぬき書く。——實は九月の劇壇に就て何か

希望を？　との事でしたが、何も別に之れを劇壇へと云ふわけでも何でも無い。肝心の締切前をつい風引きでねて了つた爲め、もう日がありません。横になりながら読み得たところを、場ふさけなり、責を果しに、草々お送りするのです。

——ただ一寸かう云つた心意氣の役者で芝居が見られたら、と、さうは思ふ。

(八月二日。十二年九月號、新演藝)

老役の顔

老役の顔、——殊にお示しの松助、仁左衛門に就ては、私は今さら云はれて見ておくれ走せにあの人達の顔を臚ろな記憶の中へ覗き込んで見る……程度の遠い親近さしか持つてゐません。尤もそれが吉右衛門と云はれ、菊五郎と云はれても、親近の遠さでは矢張り松助、仁左衛門と私には所詮同じことゝは思ひますが、——私は餘り繁くは芝居を見ません——然し、總體に、私は芝居が好きで且役者それ自身にも中々好きや厭ひを持つてゐます。持つことを好みます。つまり親近を「持つてゐない」とは少くも反對なのです。それ故、餘り(殊に近頃)見ませんが、しかし松助と云ひ仁左衛門と云ふとその顔は——聲や動作も一所に——かなり紛れずに私に浮むことは浮みます。で、此の或ひは近頃ではないかも知れぬ、例へば仁左衛門はたしか何だか忘れたが、何しろ柱によつかゝつてゐる侍姿です。又は櫻時雨の三郎兵衛とその時二役の水滸をすゝるちい

さんなどです。松助の方は安と、それから何所か寮の黒べいのところまでうどん屋か、あんまかに扮した姿が私には見えるが、之れは或ひは典山の或るシーンをつひ松助へくつつけて私がこしらへた姿かも知れません。兎に角、さう云ふ様な古物、いゝかけんが材料です。しかし強ち出鱈目のことにはならないでせうから、お手紙に對して、不取敢それを書く氣になりました。

で、要は老役の芝居の顔と云ふことが、何よりも主眼だ。

私は先に團藏の馬だらひを見たことがあります。「時は今」と云ふあの短冊か何かを書く(?)しぐさあたりで、或ひはその前かもしれぬ。懐ろから懐紙を出して肩間の血を拭き、それを見て寂びた思入れのところがある。團藏はその時白い、非常に長い眼を顔から走らせて自分のうしろか右手かを見た事を思出しますが、たしか白つゝぬい角ばつた着つけに黒の烏帽子を被り、不思議なおきものゝ様に坐つて、澁色の顔が白魚の様な眼の切れと共に畫面にゆらいだ様な感じがしました。さすが事あり氣な、云はば表現の強い顔である。デテールは忘れたが、あの感じを與へた團藏の顔にはたしかにかけ出しの若い役者には至れない、歌舞伎獨特の老役の藝境があつたと思ひます。

それから、歌六の義平次を思ひ出します。例のかにびらに愈々四角なおやじ、となつて、團扇

を持つてしやつちこぼり、ぎくしやくして、顔には小鼻のわきから大きく曲がつたかき皺があらました。否、本當の皺かもしれません。それと、眼が上眼使ひに据つて、如何にも役の性根に凡てびつちりしてゐたことをあり／＼思ひ出します。あの顔も、その姿と共に(無論顔のことを云ふには姿から離しては感じられぬ筈です)老役の一品と思ひます。

私がこゝに云ふのは、それ等の役者か扮装なり仕科に融けて所謂「畫面」に適合してゐることを云ふのであります。舊劇の長所なる象徴によく合つてゐる、それ故に印象が鮮かで、表現が強く、之れは老役と二枚目、女形に限らない役者には何れにもあることですが、一朝一夕ではない藝境で役者の仕事の強味を感じます。

吉右衛門の熊谷が敦盛のおつかさんを制して、先づ兩刀を投げ、兩手をひろげ、それから相手を見上げて全く二重一杯に平伏するところがある。あの表現なども立派なものだし、私は過日源之助の白井權八を見ました。權八が淡い若衆の着つけで腰を引き、刀を斜めに持つて、ぢつときつ先きに見入るきまり目があります。非常に綺麗な、又感情のその形ちの中に凝つた、何でもない様だが然しそこにとても簡單では出せない形美のある美しく見得だと思ひました。——それには、源之助のその時のすつきりとした顔、漆黒の前髪、殊に細いたえ入る様な眼のくばりが感

じを添へたのだと思つてゐます。その江戸前と云ふ様な字で云へる顔、形、しぐさもかなり舊劇には、付けたりでない内容になることが多いでせう。

いろ／＼筆が飛びますが、私は松助の藝なり顔、姿、こはいろを全くイヤに感じのある、磨き込んだものだと思つてゐます。何か濛い細工の煙草入れの様な屢々「勿體なさ」があります。くぼんだ眼もよく使つてゐるし殊に顔に例へば安ならば蝙蝠とか、その他皺をかく。それが浮がずにちんと顔の生地へしみ込んだ様なそぐはしさを與へます。

私は此の間博覽會で浮世繪を見ましたが中に寫樂の描いた團十郎の暫とか、それから春章の團十郎十扮圖がありました。何代目かは知りませんが鼻の高い、眼の小さい、古い伎樂面にもあり相な顔です。時にグロテスクになり、屢々ミステイックになる。——又、その顔の特技をあの人ほどんなによく知つて、生かしてゐたかと思ひます。暫には云ふ迄もなく大きな隈がありますが、それも、亦春章の方にある種々のくま取りも顔の仕立てにがつちりとはまつて、外から塗り立てた様な氣がしない。それはたしかに團十郎がさうだつたので、寫樂や春章の繪がさう描いてあるばかりではないと思ふが、こゝ迄くまどりを顔へ生かし込むにはさすが苦心が要るだらうと感じます。

——あの紅ぐまの顔で柿色の素描の強い大きな着付けの中から、然も不思議なビンの毛を持つて生きた「暫」が舞臺にゆらいだらどんなに此の世では全くそこ一つしか見られない、進んだ美境があることだらう。……又、筆が外れましたが、今では松助などの顔や藝にはくまも皺も目ばかりも、かつらも、凡て人工の強い大きな象徴の道具が、よく合ふ下地が珍らしく有ると思ひます。

私は仁左衛門は——こんな事は云つても仕方ないが——好かないのです。色男もたまらないし何だか「寫實」の老役も餘り感心しない。あゝ云ふダンディーの變にアカの無くなつた、そのくせ慾のありさうな、氣取つたぢいさんが時々世間にある、はなしかや金持に。その世間にあるぢいさんのことを浮ばせられて、それが私は餘り好きではないので、あの人の役も見たくなくなりません。或ひは仁左衛門その人がさう云ふぢいさんかしらん。そんなことを見せられるのは芝居にはかなはない。——然し、うまいところはあつてせう。只どうもむねくそ悪く「キライ」なので、之れは多分批評の以外です。第一大隈の様な意志より意地の張つたへの字の口などからが氣に食はない。呵々。役者は時々こんな風に無闇に厭はれたりもして中々難かしい仕事だ。

四月二十五日記す。(大正十一年六月號、新演藝)

新富座によせて

明日が此の原稿の締切日となりましたが、——私は偶々昨日慶應で影繪の會を見て來ました。便宜上そのことからかゝせて貰はうと思ひます。

その影繪の會は結城孫三郎一座が實演して見せるので、慶應の大ホールを會場に宛て、演じました。豫め云つておきますが——但「私は思ふ」です——その番組の中では「金太郎豆まき」と「曾我の返り討」とが一番面白かつたと感じます。

「金太郎豆まき」は足柄山から金太郎が町家へ豆まきに出て來たわけで、場面左右に家の遠見が現はれる。方々で「福は内々々々」と呼ぶ爲め、呼ばれる七福神が當惑して、布袋などは結句歩くよりは轉がつて「内」へ行くのが早いとコロ／＼轉がる——ところなどがある。

云はゞモチイーフと云ひ仕草と云ひ、變につき「意氣」で（それがそつくり形ちの中にあり）

氣に入りました。——それと「曾我」の方では妙に大出鱈目な仕組みが古風なものでした。之れは一寸演り方が亂暴の様でしたが、例へば何の用事もなさうな所へわざ／＼現はれて来る例の「朝比奈」などは、然しもつと丁寧にあの裏表を返してア、リヤ、ア、リヤと云ふ風にやつて来る。そここのところのかたちを大きくちつくりと見せたら、それがつまり「影繪」では面白いのだからすつと生きたらうと、私はその邊のぞんざいなのが一寸遺憾でした……

然し餘事はさておき、此の會で、昨夜七時頃、畑耕一氏の講演がすんで之れから番組の「實演」へ移らうとする時、畑氏が降壇しようとする俄かに樂屋——と云ふのは大ホールの演壇に設けた影繪幕の影——で、丁度寄席で演者の引込む時はやす、あの太鼓を——くさり入れました。

その太鼓が又、あの大ホールは天井が高く、響きがいゝ爲め、筒抜けに朗々と響いて来て、先づ「何事があるのか」と思ふ。——と、(然し私は段々とあとでは此の下座の如何にも下座らしい、云はゞ「へつぽこくさい」味と、その達者なことには、感心したが) 次ぎに今云つた「金太郎豆まき」が初まることとなつて、つまり幕開きの鳴ものが始まりました。無論三味線がそれには主でした。

ところが之れも三味線は大ホール全體に響いて朗々と鳴りわたり、すると、見物の方には、一

齊に笑聲がどよめきました。——と云ふのは全くそれがあの場所(講堂)には不調和そのもの、露骨な味なので、誰しもつひをかしくなる。變妙で、突嗟吹き出さずにはゐられない。飛んだ餘興の氣がした、と云ふのが本當だ。

が、そのうちに段々と金太郎豆まきの場面が涉取つて来るにつれ、前に云つた様に、その狂言(と云ふか)は頗るイキな、仕組みをひねつた。殊にかたちで見せて行く影繪には好個の古風なものである。——足柄山から金時が出て来て、その時は席が少し遠かつた爲めよく見えなかつたが然し素襖烏帽子と云つた風の、立派ないで立ちをしてゐたと思ふ。

それが下世話な町家の年こしに豆をまくと云ふ、つまりそれが此の狂言の山になつてゐる、——その邊へ次第に運びが進んで来ると、私は見てゐて凡てその「味はひ」に感心せざるを得ないので。形ちにも仕組みにも。

——「べらほうめ。(何とか山)から金時と云ふ甘い野郎が出て来て年男だとよ。へん、笑かしやあがると云ふ様な(孫三郎氏の)せりふでぐす／＼云ひ合ひながら、鬼の素性のわるいのが一匹づゝ畫面を逃げて行きます。それを追つてやがて金時が、——みぢんも甘くない形ち——うつしゑの正座に現はれる。と、ツケがはひつて、かつきりと大見得に決まります。

大きな玉子が金時の目の前へその時忽然と現はれます。そこで、あゝら怪しやと云ふことになつて、玉子を眞向から打ちわる。と、その中からは小さな鬼の子が二列に重なつてうよく出て来る――

何れも餘程味はひを凝つておもしろく出来てゐる。筋は底抜けです。然しかたちで行くものだからどうせその「底」は何所迄行つても割れません。

○

演技も下座も却々いゝものである。たゞその音、聲、凡て感じが響きすぎ、放散しすぎる。一體が殊にあゝ云ふへつぽこを持味の三味などは、上から低い天井でぐつとおさへつけて了つて、そこで初めて例へばしめつた煎餅の様な「いゝ味」にならうものを、ホールでは音締めが何所迄も延びるから、つまり左程堂々としてはいけないものがつひ堂々とするので、すつかり味はひが散つて了ふ。正にのびたそばの味。まぬけなのつべらばうのしまりのない味です。

音締めはあれでいゝのだ。唯場所がわるい。それで、つひ氣にすまいとは思つても、演るものが面白ければ面白いだけ、益々壞れたその味は遺憾のこととなつて、私は時々バカにがらん堂に開け展いたあすこの丸天井を眺めては、そこから藝壇へ水をさす、つまりあゝ云ふものにあゝ

云ふ建ものとの不調和をつくぐイヤな、不愉快なものに感じました。

○

とは云へ、それは云ふ迄もなく假りに慶應のホールで影繪をやるのだから、その不調和は無理もないことです。論らうだけ愚の話です。

とは云へ、更に、その慶應に於ける假りの影繪の場合は論らうだけ愚の話とは云へ、それでは、帝劇でやる例へば頓兵衛の場合、乃至うらうの場合、矢張り論らうだけ愚の話か。――と云ふのは、前者と後者と、果して「同じこと」とは云へないか如何か。

違へば何所が違ふか。唯一方が假りなのに、一方は假りでないと云ふ、その却つて致命のところだけがあり得る相違ではないか。――假りは恕す可きだ。然し、假りでないのは恕す可き限りではない。

○

然しかう云つたところで、實は今更どうにも仕様はないのが、帝劇などと云ふものゝ舊劇世界へ現はれてゐる。乃至、舊劇をのめくとあゝ云ふ類ぶちの中で演じて怪しまなくなつてゐる。今の有様の成行ではあります。結句云ふだけ野暮のことです。そろそろ之れももう「論うだけ愚」

になりました——

それで、私は前に夢ものがたりと言ふのをかきましたが、今も舊劇に就ては思ひは同じことで、益々さう思はうとも、その反対には思はぬ。と云ふのはこの美しいものもどうせ次第に衰らうとは思へ、ちやんと榮えやうとはつひ思へません。——それ故、今も考へはどうしても消極的にしか向きません。

一體この文は實は「新富座」と云ふものについての感想、希望、要求……と云ふ様なことで、執筆を托されたものですが、少くも新富座と云ふ劇場が現在にあれだけ存立してゐることは、大幸とも大幸のことに思つてゐます。

いつ暴漢が現はれてあれを鐵筋コンクリートにしようとも、それが寧ろ時勢ではあれ、却つてさうでない——つまり今の様にある——のが思へば「非時勢」なのが現實のさまだから、私は實を云ふと、未だに新富座一つがあゝ「あつた」と云ふことを驚いてゐる。

それが虚心の實情です。

従つて、希望は、積極的には全く何にもありません。唯せめて消極的に、どうか若し誰かに心があるなら、今のあのまゝでいゝからせめてあの「新富座」だけはあのまゝ手をつけずにおくと

いゝと願つてゐる。少し積極的に云ふと、電氣一つ引くのも、一寸修繕をするのでも、出来るなら「今」のまゝを差し當り手本としてその際、更改は絶対にと云つていゝ、しないで貰ひたいものと、願つてゐます。

○

一番目につくことは稍もするとは外から何でも「上品」にしたがる一切の傾向です。上品に、立派に、高尚にと變へて、それ故に味はひの方では——全く慶應のうつしゑの場合と同じく——切角の苦味や、澁さや、強み、凡て特質を元なしにしてしまふ。建もの、演技、衣裳、幕、出方や何かのこと、凡てに涉つて。

新富と雖もする分種々のところに今はつまらなく「お上品」です。——が、然しそれは今更咎めても、初まらぬから、咎めないと云ふ唯極めて消極的ながら、せめて現在のその缺點のまゝで然しそれ以上にはどうか變にならずにくれと願ふ。

さう弱氣ながらも「願へる」新富のあることをせめても大幸に思ふ、と云ふ意味です。

○

何と云つてもどうせ成る様にしか成らない。

一番利巧なことは、その「成らない」うちに先づ新富の如きは精々愛惜すること、それ一つだ

六月上旬記す。(十二年七月號)新演藝

古劇「うゐらう」に就て

私は歌舞伎狂言が好きですが、殊にその大時代な十八番ものなど、例へば「暫」とか、「矢の根」……などが好きです。たゞ「好き」と云ふよりも、それ等にはさすがに古い傳統のしのお舊劇と言ふものゝ立派な味が籠つてゐて、殊にその根のところを大きく掴んだ、効果の健全なところがわかり、それは、自分の仕事「美術」にかけて屢々直接に感動を與へられます。で、私はあゝ云ふものは是非出演の度びに見ておきたいと思つてゐますが、その後久しく出ません。――

此度帝劇に「うゐらう」が出ると云ふことは、それで豫めその報道が前月の演劇雑誌に出てゐた時から、之れはいづれ見ておきたいと考へてゐました。偶々、そこへ、中央美術社から「何か

芝居を見て、そのことを書いて「くれと云ふ話がありましたので、兎に角書く書かぬは第二に、自ら進んで、「うるらう」の狂言は見に行く氣になつたのでした。——その結果、かう云ふ「書くこと」が強ち外からではなく出て来たわけではあるが。

しかし、所詮、私は舊劇について感心こそすれ、何も別段に「知つてゐる」とか「見巧者にわかる」とか云ふ種の、文人ではない。主観には多少ものも云へるが、客観には強ち押しひろめて、何とも云へない、……で、此の稿も、私は思ふ。多分、私自身の舊劇に對する鑑賞なり研究？のほんの手控へにすぎぬものです。發表するよりは、手元に藏つておく方がいゝ程度のもので、それに、烏澁がましい氣も少しするし、その道の爲めに専心骨折つてゐる人々の前には、どうせ氣恥かしい半端のものでせう。

が、たゞ、私はかう云ふ風に舊劇を見てゐる。乃至、見やうとしてゐる。すると、私の本來の美術心に親近なる機縁がつかがる。と云ふ、そこだけは、一通り示せると思ひます。先づその位の主観的な理由をしぼに、控へ目に活字に載せておきます。——私は昨日差し當り見たいと思つた「うるらう」を見て、かう思つたのです。

二

「うるらう」と云ふ狂言は、それが市川家の十八番ものの中に入れてゐることは、恐らく他のどの十八番ものよりも當然なことで、その點は、「勸進帳」などは假令十八番のうちに入れられてゐなくとも、立派に永く存立しやうと思ふ。しかし、或ひは「うるらう」は、「歌舞伎十八番」と云ふ背景から抜かしたならば、それも所詮演者の技倆なり人氣に依ることではある。然し、狂言としては、かなり一半の獨立性を失ひはしなからうかと思ひます。——よし獨立性は第二としても、兎に角、香りの失せることは、それはたしかだ、舊劇には、此の傳統から來る香りなりゆかりが、それがかなり重大な味の起因となつてゐるものを。

さう思へるだけに、で、一方もしも之れが「歌舞伎十八番」の名のもとに、藝のうまい「團十郎」に依つて、彼の人気の場合に演ぜられたなら、どんなに「鬼に金棒」の十八番の中でも殊に十八番味の獨參湯になるだらう。と思ふ。

更に又、さう思へる程度に、この狂言の劇的な構造なり、資質と云ふか、——には、演者の腕

次第、演出次第に依つて、充分に、云ひ得る舊劇本來の立派な味を出すことが出来る。味は行きすまらずに先づ演出の力備次第、變通の自在に、出来てゐる。

さう云ふ、誠に歌舞伎十八番ものらしい十八番の一つで、且、仕組みそれ自身としても、舊劇の本道に充分立つことの出来る、一つの珍らしい、おもしろい芝居と思ひました。

が、——豫めこれは斷つておかないといけない様です。私は今云つたことも直ちにそれを此度の帝劇の場合の演出に就て云つたのではなく、それから、此のあとに書くことも、同じく、此度の帝劇の場合を念頭においてではありません。古劇「うららう」を念頭におき、又は想像して、書くつもりなのですが——此度の帝劇の場合、つまりその「想像」を私に刺戟してくれました。その點、この云ひ方は主觀的ですが何しろ「おもしろく」見たのです。たゞ殊に、それに就ては、少しはあとで書くでせう。然し別段とりたてゝは此所に云ひません……………

三

で、この芝居には、恐らく他の何れよりも目立つて、演者對觀客の親近なる關係。それを「時

勢」とも云ふか、又は舊劇獨得の、「小屋」それ自身の成り立ち、いづれはそれが舊劇には一つの大きな内容となるもの、それを、直ちに効果への重要な過程にとり入れてあります。全く、此の芝居では、芝居小屋全體が劇を仕組む手だてになつてゐる。有形と無形、双方に。と云ふのは、俳優が看客の間に有する「人氣」が、いきなり、此の劇では一つの表現手段に數へ込まれて、豫め芝居の中へ融かし込んであります。

そこに「團十郎」の太才を感じます。恐らく天才的と云つて、之れ程天才的な仕組みの芝居は、又、他にないかも知れぬと思ふ。

「暫」にも劣らずに大膽なものである、その劇の仕組みには、演者の自信が、然しそれが圭角を持たず、——と云ふのが、彼の力は強ければ強い程、その演劇化の美藝に蔽はれれば、客は喜んで演者の力の傘下に集まるものである。——つまり不思議な愛情に包まれて、堂々と仕組みの親骨に當つてゐる。で、それがないと、殆んどこの劇は、その表現が完全には持たない。

——このことは、引いて所詮「矢の根」とかその他歌舞伎古典劇のものに就ては、云へることです。しかし「うららう」に就ては殊更に云へ相です。演者が強氣一途に押して來るところに無類の味が出る。自然一寸のすき間も演技に有つては破綻が起る。テテールに就て云ふのではなく、

先づ、彼の全體的なる力に。——昔の言葉によく「器量人」など云ふのがありますが、その器量人（主観、客観、ともに）でなしには、此の劇は到底持てない。

先づ之れが、——さう露骨とも露骨に思はれるところが——此の劇では一番目立つ特色の一つと思ひました。

四

それ故、或る有力なる「團十郎」が此の「うゐらう」に扮して、花道の七三にかまへ、つまり看客の只中で、「うゐらう」の云ひ立てを述べたならば、その場合には——如何にせりふのめりはりな酔を以つて抱き込まれ、小屋全體が見る／＼あの芝居への有機的な組み立てとなることになる。十八番のうちでも就中十八番らしい、と、云つた理由です。

——この芝居の起りは、二代目團十郎に初まつた想で、彼は當時小田原の「うゐらう」と云ふ薬を賣る店の主人と親しかつた由、「それが奇縁となつて、團十郎はうゐらう賣の役を演じ、そ

の效能を説いた長いせりふを述べたのですが、要するに巴丘（うゐらう屋の主人）が、彼に委嘱して家傳の薬の宣傳をやつたと観てもよいのです」と、之れは新演藝の八月號に載つてゐる松本幸四郎氏の署名の文に記してあります。團十郎が兎に角その長いせりふなり、それからあとの「芝居」を、つまり優に演じこなし演劇化することが出来た。そこから此の劇が起つた、と見るのが至當です。

で、その演技の爲めには、もしも藥りの宣傳を芝居の筋道に乗せたものならば猶のこと、よし兼ねないとしても、あの芝居は、どつちみち揚幕の影から「うゐらう」うゐらう、と演者が舞臺へ第一の聲をかける時に、小屋の人氣は忽ちわれることを、それを豫め勘定に入れなければ組み立てがうまくは運ばないわけです。よしその時にはまだわかなくとも、云ひ立てを述べにかゝつてからは、その表現に於ては既でにもう彼は見物をしつかりと手中に握まへてゐなければならぬ。——

否、語を變へて云ふと、さう云ふ見物の是非甲乙は殆んど豫め演者の眼中には入れてかゝらずに、寧ろ、そこは己れの藝に當然頭から期してかゝり、彼（うゐらう役者）はより決定的なる度胸なり、自信。自認もいづれあるだらう。そこから引いて湧き起る悠々とした、明らかな、云はば大才の氣やすさを以つて、早く云ふと小屋全體は此の劇のモチーフに於て既でに初めから呑み、樂々と、

仕事を仕遂せなければならぬ。——さう仕遂せたあとがある。或る時の堅固なる「團十郎」には。

五

私は豫めこの「うるらう」に就ては、そのかんかつな扮装を先づ錦繪に依つて知つてゐました。多分、八代目團十郎のでせう。此の間博覽會の特別浮世繪展覽會の場合にも春章の「團十郎十扮圖」にたしか「うるらう」姿があつた様に思ふが、之れは今はずきりしない、何しろ、その繪姿を通して見るに、「うるらう」賣りは大體、荒事の風では元よりなく、と云つて、普通時代ものなり、世話ものなりの、立役とか、敵役、色悪……それ等の何れともちがつた、一見したところ、よく大切にへ出て來る所作風俗の姿と、見立てることが出來ます。しかし、顔には、立派に格式？のある云はば曾我の十郎とも云へ想な、いづれは舞臺を統べるにふさはしい、乗合船の時の甘酒屋？だけには終り想もない、目ばりのきつい、牙へた紅ぐまが凛々しく入れてあります。で、さう云ふ彼が、直ちに大きな外題の名の主となり、歌舞伎十八番の中に立てられてゐる。私は想像をして、もしや之れは、何れ何かのきつかけで背中の箱をあけると、それからはおかく

まはれてゐたお姫様か（劔か、旗か）何かと出るとか、うるらう自身は又頭巾をはね、衣裳が引きぬきとなつて、いづれ、十郎祐成か太閤秀吉でも名のるのではないか……などと思つたことがある。

しかし又、私は先に何かの本で、劇道には有名だと云ふ「うるらう」の長ぜりふを讀んだことがありました。それはどつちにせよ、花道へのかゝりて云ふのだらう、とは見當がつかます。……しかし何しろ「うるらう」と云ふ長く埋もれてゐた狂言については、その位るしか（當て推量のほかに）全く見當がつかないのです。

それが、昨日帝劇で演出されたところを見て見ると、それには古い書き付けや何かは相當に調べてあるに違ひないと思ひます。その他、扮装も、せりふも、鳴りものも相當に。——それに觸發されて。私には、一通り次ぎの様なシーンが（その組立てに就ては充分感心することが出來て）座ろに想見されるのでした。

六

ここに吳竹姫と云ふお姫様があつたが、彼女は氣鬱症になやんで困つてゐる。彼女は緋の衣裳をして、ピラピラのかんざしを指し、はち巻きをして脇息にもたれてゐます。——いづれ、お姫様は立派な二重舞臺の御殿の中にて、左右にはもつたいぶつた老女、綺麗な女小姓。御姫様から一段下のところには、しかつめらしい黒裳束の家老、緒つ面の威張つてゐる用人。それから、その右手には千疊敷か何かを展開して、いづれも朱のふりそでに漆黒の帯を胸高に結んだ奥女中がすらりと並んでゐる。そのそばには、それ／＼おかひどりの美々しい中老の腰元達がる並ぶ、又後ろには、何れもくすんだ裳束にしやつちこ張つてゐる家來共がる並ぶ。玩具の様な風俗の仲間も交る。それから、家來達のくろすんだ中には、點々と、或ひはもえ黄、或ひは白に染分けなどの、前髪立ちの水々しい小姓がゐる。お茶坊主の珍齋と云ふのが、何かしらはしやいで、一座をとりもつてゐる。

で、お姫様の氣鬱を晴さう爲めに、或ひは女中が踊つて見せたり、家來共が劍術を使つて見せたりする。しかし何の効果もない。と、向ふの揚幕から聲があつて「うゐらう」うゐらう、と云ふ者があります。——

それは近頃名代のからの奇藥透頂香を賣るもので、一粒を呑むと見る々々舌がまはつて来る。

一粒を呑むと此度は手足がまはつて、愉快に成る、と云ふ。やがて、そのうゐらうが、御殿へ間近く、つまり花道七三のところへ現はれて来て、で、抑揚面白く藥りの云ひ立てをするのです。この藥りの本家は小田原街道にあつて、「お上りならば右の方」とうゐらうがせりふで云ふ。と、さうでない場合には左の方、にせ者があるから間違へない様に、と云ふ様なところを出語りの常盤津連中が節して受けて、うゐらうはそれに合はせて仕草をする。——それを如何に巧みに演らうとも、全く、彼の腕次第のことである。随分立派な畫面見得などもよきやうに大きくある筈でせう。

うゐらうはそれから本舞臺の御殿へ呼び込まれる。——何しろその奇藥をためして見なければわからぬと云ふので、最初に、茶坊主の珍齋がうゐらうを呑んで見る。と、一粒を口に含むと見る見る舌がまはつて、世にも怪しげなせりふをたてつゞけにしやべる。二粒を呑むと此度は手足がまはつて来て、——ここなどは如何にどう珍妙の限りを盡しても脱線しない。藝さへたしかなら。——不思議な舞ひを舞ひ出す。その間に、一方では、うゐらうはる並ぶお姫様を初め、家老、用人、老女、中老、女中、家來達、小姓、仲間……と、舞臺一統に一わたり奇藥をそれ／＼くまぜる。

その間のつなぎは珍齋が舞臺正面で一人で持つてゐる。が、妥當の段どりではある。

さて、やがて樂りは舞臺の並ぶみんなにわたつた。どうなるであらうか。もうそろ／＼誰彼にきいては來ないか、と、見物は、——この「うるらう」を舞臺へきかすかきかさないかが、そこが此の劇のつまり云ふ「種」になるわけだが——待ちこらへて一途にそこを見つてゐます。と、その間にボツ／＼と、艶にとりすましてゐた女中などが奇體に「イキシチニ、ヒミイリキ」など云ひ出す。武張つてゐた緒つ面の用人が矢庭に、例へば「一寸の蟲にもコンブの魂。もちはもちや老ひては子に従へ」など、我れを忘れてペラ／＼變なことをうまく云ひ入れて見るのもいゝ。又は、朱の奥女中が鮮やかな總おどりになるのもよからうし。それに家來達がからむのも極くいゝ。無論、氣鬱のお姫様は、結局奇樂のきゝ目で氣鬱どころではなくなり、いづれ、うまく舞臺の或る高潮のところへ、一點、目立つしぐさの一つとなるのは、頗るいゝ。

鳴ものはその間どうとも、之れも腕次第に、舞臺を締めも、放しも、自在に行く筈である。

——このところの舞臺などは、要するに、うまくさへやれば、どう底ぬけに騒がうとも、酔ひに酔はうとも、効果への條件は既にモテイフに於て、充分、適確に擱んである。あとは歸一して演者の技倆と統率、一つにあるのである。見物はきき込まれて、一所に酔ひ、一所に踊るほ

かない立場に立つ。

どう豊滿に行かうとも、拙くさへなければ、プロットには違算はない。とど、もう此の上は當の「うるらう」が中心に立つほかに、舞臺のリズムの納まりかねる、最後の一截へ來る場合がある。と、それまでは、舞臺の一點の鎮めにちつと座つてゐた「うるらう」が、機を外さず立つて、彼は輪舞の眞中に身をおき、手に高く奇樂のはいつた印籠を捧けて、舞ひに舞ふ。そのぐるりを、或ひは卍、又は一列に、雁木に、輪に、十字に、浮き立つ舞臺一同の者が豊かな華々しい總おどりをおどる、その奏つまつたリズムは何所迄上がつたら終るか、わからないまでになる。云ふまでもなく、こゝでは、どう舞臺一杯にその時うるらうのしぐさが延びやうとも、リズムはよし高まらうと調子は決して外れない。必らず、思ひ切つた、廣大なきまり目／＼が隨所にあるに相違ないので、見物は酔ひに酔ふ。そこで、或る最終のしぐさ、つまりリズムの高潮點を、しほに、夢を壊さず手ぎわよく幕を引く。

此の最終の場面などは！ それはきつと顔見せ番附の豊滿な「畫面」の様にすばらしい美藝の満開であつたらう、と、想像がときめく。

——かう書くと、然し之れでは「筋」は此度出てゐる帝劇の場合と同じです。何も「古劇に就て思ふも何もないではないか」と、笑はれ想に感じますが、それは、私には所詮かうしかわかない、帝劇の人が調べてくれたそのあとにつくほかその點では能がないので、つまり正直なところですから、結局私はかうかきました。

それで充分に「感心」も出来るし。

然し、では何故それと同じ段どりの此度の帝劇の場合を言外におくか、と言ふと、矢張り少しかゝなければならぬかもしれぬ。何も好んではかきたくもないが

此度の帝劇の場合は、「古劇」に對して思ひを刺戟してくれたことには、感謝してゐます。然し効果に對しては、まるで、感心出来ません。——(一)お姫様の氣鬱を晴らす爲めに踊る(幕明きの)踊りがダンスの様なのはつまりません。元祿花見踊りと云ふ様なものでも、もつと綺麗だと思ひます。(二)それから、家來に變つての劍術もあれではひどいと思ひます。私は前に古い寫し繪で白井權八の時の雲助の亂闘(?)を見たことがあるが、兎に角あゝ云ふ味に、第一大間に行かなけれ

ば駄目だと思ふ。(三)「うるらう」に就ては評なし。(四)幸四郎の珍齋の踊りも、どうも末梢でつまらない。(五)お姫様が氣鬱でなくなる或るアクセントのところは、然し殆んどその大切なアクセントが冴へません。いづれは踊る女優がたゞ「踊つた」にすぎぬ。(六)それから段々とリズムの上る處は、しかしてんでにちぐはぐなので、統一がとれてゐません。つまり、一所に同化することが出来ないのです。殊に、幕ぎれなどは、私は先に、大阪の人形で澤市とお里が目が開いてから舞臺を欣舞するところを見たが、出てゐるのは二人ながら、舞臺一杯に行きちがつて、大きな美感です。——さう云ふところが少しもない。殊に、形ちが一遍も極まらずに、うるらうが音頭とりでその周圍を多くのものがとりまき、形ちを締めずに、そのまゝ幕を下ろすのは、あれはオ、ラの様で感じが極めてまだるい。その他、云々……………

要するに、此度の帝劇での演出の場合は、先づモチーフを餘りと云へば外からとつて付けに持つて来たゞけのことで、絶対に、内部から出たところが少しもない。で、早い話が、此の劇の仕組みの種に當る奇樂「うるらう」にしても、肝心のそれを賣りに来る三升氏は鬱してゐるのだから、始終モチーフの外にばかり出てゐます。反對に、實は舞臺のつなぎに當らなければならぬ珍齋(幸四郎氏)には、之れには又うるらうは既でにそれを一粒も吞まぬうちから、初めから利いて

るるかたちで、つまりここでもう芝居の底はすつかり割れてゐる。凡てしぐさのちぐはぐ、せりふの枯渴、それは、それが却つて當然のことで、豫め演出に就ての條件が悉く逆なのだから、之等は云ふだけ野暮のことではある。兎に角此度の「うるらう」は、たゞ古劇「うるらう」の拙劣な模型的説明に過ぎないと思つたのでした。私は丁度、よくある極く拙い西洋劇の演出を見た様に感じて、しかしたゞそれでもわかる「原作」にはさすがに、間接ながら、撃たれたかたちでした。

八

以下、「うるらう」に就ての構造の批判を一まとめに記して、思つたより長引いた此の稿を終ることにします。

(一)彼(うるらう)は有名な長いせりふを持つてゐるが、それは先づその「云ひたて」から想像してもわかる。どつちみち花道——と云ふのは、狂言へのかゝり——で、云ふものに違ひないと思ふ。強ち本舞臺からまともに正面を切つて、既でに「狂言」それ自身の中で、云ふものではなく、寧ろ、うるらう役が揚幕から出る、と、すぐにそこで生ずる彼と、看客と、(狂言との)最初の關

係の先づ冒頭に、つまり、舊劇にはさう云ふ特別の仕組みがあるのである。見物のたゞ中へ一本道につき通してある花道がある。その花道から、私は殊にこのうるらうの場合の云ひ立てに就ては思ふが、それは、狂言に對してと云ふよりも先づのつけに、客に對して、云ひ入れると見るのが當ると思ふ。

で、さうして、役者の手中へ開口一番に「見物」なり、見物のうちに持つてゐる俳優の人氣、親近さ、舊劇獨得の不思議なその間の愛情、凡て、小屋全體のムードを、所詮は藝の一撃を以つて、豫め一握にたぐり込んでおく。——すると、それが改めて此度は切り離せぬ此の「うるらう」と云ふ劇への一つの内容となり、で、それから、そのあとの演技、つまり「一しはる」がのびくと開展をするに相違ありません。

——今或る浮世繪(筆者不詳)で古い「矢の根」の演技の圖を見ると、それには支那の芝居の様子に舞臺が客席へ三方開きに突き入つてゐて、殆んど本舞臺の横にも、二階と下とに看客が見てゐる。で、全體がこじんまりとした、そこに至るところに人のゐるファミリーな感じがする。

「うるらう」も正しくかう云ふ親近さの中で育つたものだ。(支那の芝居では、どうかすると役者が扮装のまゝ客席へものを云ひ入れることなどもありましたが、歌舞伎にも昔はさう云ふとこ

ろが——チャリなどには殊に——あつたかもしれない。)が、此の客と演者との關係は、今でも全然違ふと云ふわけではないのだから、古劇の上演の場合にはそこも生かせる丈けは生かさなければなるまいと思ふ。

(二)「うるらう」が愈々本舞臺へかゝつてからは、此の劇の仕組みは全く「うるらう」その人の技倆なり、舞臺の統治一つで、極めて明るく、おもしろく、愉快に、その底はどこ迄も表現次第で深く、自在に、リズムが高まる様に、大きくプロットを擱んで出来てゐると思ふ。然し、それだけに、効罪はかゝつて演技の深さ、淺さ、うまさ、拙さ、只その一點に歸する。「うまく」行けば、劇の仕組みは忽ち生きる様に、性根を擱んで出来てゐる代り、又、「拙」ければ、即座に死ぬ様に、乾坤一擲である。

この役を初めて舞臺にかけた(享保年間の)二代目團十郎は、彼が二度目にこの「うるらう」を演つた時のこと、見物に當時ほんもの「半疊」が起つて、その男は早口にうるらうのせりふを述べ立てながら團十郎のしぐさを邪魔しやうとした想です。ところが、團十郎は却つてその男に禮を述べ、それから、いつものせりふをいきなり逆に述べ立て、つまり、見物のどきもを抜いたと云ふ。——

この變通と云ふか、いざと云ふ場合に面しての臨機の内からの所置は、それが第一に、此の狂言では彼になければならぬ。腕がなければならぬ。彼にはそれあるが故に、初めて此の狂言もあつた、と云へる。

(三)即ち、この芝居にとつての關ヶ原は、強ちあとにはない、あとにはそれぐのアクセントは無論微妙にある、たゞ、この劇のカタストロフは、それがありぐと「息」と「形ち」とに兩分される意味で、前半が開幕の當初にある。その大半とも云へる——分が、此の、「うるらう」役の出の一截にあると思ふのです。

そこで先づ此の劇の勝負は、乗るか、外るか、殆んど半分以上、一擲に定まる、それは大膽とも大膽なやり方だが又いゝ度胸のもので、——大才の者には又その方がやりいゝわけです——およそ美藝の仕事には、このイキは何にせよ無ければならぬと思はれる。

(四)従つてその効果の源が直ちにこの大膽にして無比なる「うるらう」の出、この狂言の劈頭にあることは、引いて此の劇の凡てを「うるらう」その人の技倆なり、度胸、従つて人氣をまき起す歌舞伎俳優獨得の魅惑「彼」の俳優としての資質、云ふ迄もなく、その一座の統合、悉く、「うるらう」の貫目如何にかゝはらせる。——それがなければ、どうせ「奇業」うるらうも舞臺には、

従つて見物にも、きく筈がない。で、彼が出てからは、その出が成功すれば、あとはいづれ彼の指導に依る筈の座員の「粒」次第、ここにも腕次第で、残りの半分はリズムの出るところ勝負に活達に片付く。

○

要するに、自カ一點のかなり胸のすくモテイフです。昔の俳優は、さすがに、太つ腹な、乗るか外るかの仕事、しかしそれに添ふ自信なり力は優にあつた爲め、樂々と、實に眞向から大きくやり遂げたものと感心します。その効果へ對してひた押し、人格的と云ふか、此の劇を引き徹す強い素描は、いづれそれが此の劇に健全なクラシカルな重味を附けずにはなかつたこと、自明です。

九

昔はさすがに、「うるらう」役の天才なる團十郎と云ひ、その一座には、いづれ腹心のおとわ屋に於ける「松助」と云ふ様な位置の人や、又は「中車」の様な人、「段四郎」や「甞太郎」もゐた

だらう。それらゝ適材適所にゐたらうと思ふ。姫も、珍齋も、家老も、用人も、その他澤山の家來、奥女中、中老、老女、小姓、奴……悉くその粒はたしかに揃つてゐたに相違ない。……その一座が先づ「うるらう」の大才に統べられ、その奇薬には我れも人も氣持よく酔はされて、明るい舞臺が初まる、小屋全體で魅惑の中のムードが初まる。

さう云ふ、享保、寛保……の場合の不思議さは、既にそれは大半墨と茶褐とで描いた「顔見勢狂言之圖、何々畫」などの中に今は夢幻に藏はれて、想像を走せるほかには、もう見られ想もなく思ふ。

この劇の「うるらう」役が一見所作風俗の優雅な出だちをしてゐながら、しかも凜々しく、格式の強々しい眼ばりの紅ぐまをしてゐるのは、あのくまは、私は思ふ、強ち「うるらう」そのものゝ役がらに添ふてと云ふよりは、寧ろ、そこによく云ふ「千兩」の役どころを示現する、直ちに大才「團十郎」役者の象徴となるものと考へました。大正十一年九月上記す。(十月號、中央美術)

十月三日、新富座を見ました。時間をまちがえてかなり早めに入場した爲め、「一番目狂言の幕あきから久しぶり」で一日ゆつくりと「芝居を見」ました。以下、思ふところを記しておきます。

綺堂氏作「眞田三代記」は、先づあゝ云ふものとして、中々器用に出来てゐると思ひました。過日帝劇で見た「池」の様には辛く引かゝらずに、すら／＼と運んで、そこに作者の才を見る氣がしました。中車氏の昌幸もあゝ云ふ老大将らしく、おもしろく安氣に見物しました。

……先づさう云ふのどかな見物氣分から、小さな座席の中に坐つて、グッド・ユーモアに時を過しましたが、第二近松の作に對しては、之れには豫め氣分を謙讓に、眞面目にして、之れから

新富座を見て

（以下、非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ。これは、本文の極小文字による複製ミスか、あるいは極小の註文と思われる。）

（右ページの本文は、極小の文字で印刷されているため、ほとんど不可読である。これは複製時の文字サイズの問題か、あるいは極小の註文と思われる。）

どう云ふ美感が汲めるであらうか？たのしみに、観劇にかゝつたのでした。——が、その期待した「平家女護島」一幕は、主役吉右衛門氏の藝風が思ふにあの脚本の仕組みとはそぐはぬ爲め、結果は索漠な、どつち付かすの曖昧な受感となりました。

二

吉右衛門氏の俊寛の努力は充分それとわかる。が、惜しいかな、脚本のテーマに融けず、努力が劇の埒外にはみ出して、此の芝居は——私は思ふ——氏（吉右衛門）が大汗になればなる程、その役「俊寛」の部分と、此の「平家女護島」と云ふ芝居全體とは、そこに殆んど融和がありません。で、却つて鷹揚な（屢屢平凡なる）たゞ所役の概線だけを概線なりに示すに止どまる羽左衛門氏の丹左衛門を見ると、ホツとします。その方が此の劇全體に融けてゐるからであります。俊寛は吉右衛門氏です。但、屢々俊寛役ではないのです。ところが、近松の劇には俊寛に「俊寛」であることは要求してあるが、別段そこに演者のむき出しの個性は要求してありません。淡淡として、然し熱がなすぎざる度には陥ちず、神妙に役をし通せばあの劇は生きる。それを、な

まじ役の性根に腹藝（とは實感のことである）を偲ばせたり、殊に寫實を加味したりしては、そこであの劇は肝心のテーマが破れることとなつて、部分は生きるかも知れぬ、然し、劇全體は死ぬのである。此度のあの劇はさうして死んでゐると思ひます。悉く吉右衛門氏の努力が個人藝の云はゞ小乗に拘みすぎて、劇中藝の大乗には効果が届いてゐない爲めです。

三

西歐劇の例へば「ハムレット」などに於ても恐らく場合は同じであらうと思ひます。あの「ハムレット」に、その演技者の藝に一々實感がつきまよふならば、劇は分散されると思ふ。亡霊と語る件り、劇中劇の件り、凡てに於て。——私は曾て何かの寫眞で劇中劇のところの場面を見たことがあります。一隅にアーキングか誰かのハムレットが兩脚を八字に大きくひろげて、頬杖ついてゐました、その「形ち」に情操がある。既にそれ以上あくせくと腹藝をするには當らない様である。

およそ役者が役者「彼」自身となるには、吉右衛門氏の俊寛の演技程行けば、先づ十分でせう。それが劇の効果にとつて有要の場合には（それは寫實技の近代劇に於て多く見かけるところであ

る) 氏の藝風は有効のものとならうと思ふ。然し、日本の舊劇の様な、傳統の深い、總じて古典のものゝ劇的表現の場合には、役者は「役」以上の寧ろ「役」となる方が必要の場合が多いと思ふ。且、その點に、よき古典ものゝ脚本は、俳優が虚心に我を捨て、役になればなる程、効果は十分揚る様に、先づ作者に於て豫め美感を識つて書かれてゐる。井上正夫氏が屢屢下らぬ新派の臺本を「演生かす」とは、わけがちがふのである。もつと汗くさくない美感が出る。舊劇の近松の作のものなどでは。

吉右衛門氏の實情的なる——その努力、勤勉は目に餘る——俊寛を見てゐると、引いて、あの劇のうち、妹尾太郎の有形無形のグロテスクは極めて不自然な、出鱈目なものと見えて来る。即ち、そこであの劇全體の仕組みは壊れるのである。(云ふまでもなく、妹尾のグロテスクがなければ、即ちあの劇のプロットもなく、俊寛もなく、何にもない。)

その「妹尾太郎」は果して不自然か。——否。云ふ迄もなく、あの劇に於ては、その有形の妹尾のグロテスクが美の表出に重要であると等しく、無形、即ち情操に於ても、妹尾の奇異なる「悪」は必要である。第一に生きてゐる。自然、不自然、は問ふだけ野暮のことだ——
即ちそれをつい問はせる俊寛役の吉右衛門氏の藝風は、あの劇に於ては、禁物の仕方と思ふの

です。

四

此の幕一幕は主役が「近代的」なる所演を加味した爲めに、明らかに失敗の効果になつたと思ひます。私の前にゐた老人の客が「骨の折れる役だ」と云つてゐました。吉右衛門氏が寧ろ「骨を折つてゐるのだ」と思ひましたし、一つには、餘り客にその「汗」の感じを露骨に與へる演技は、美藝にふさはしからぬと思ひます。乞御一考。

氏は腕はよし、理解は充分なものだし、練達もよし、せりふに至つては全く天下一品の名調子を持つてゐる。稀れに見る俳優と思つてゐます。小宮氏の所謂「……氏の心の爲に完全な安全瓣の役目を務めるものとは結局近代劇を措いて外のものではあり得ない」。そこに安全瓣を開かれることもよからうが、私は時に、氏の様な得がたい舊派仕立ての俳優は、猶のことより一步「舊」の本味に徹して貰ひたい希望など感じます。何れ舊劇は無くなる？と思ふ場合、特に。

——私は貴君に子供の時逢つたことがあるのです。貴君が芝濱の若吉？に「四谷で初めて逢ふた

時」を、清元でやるとかうなる、常磐津でやるとかうなる、長唄ならかうなる、と、その他色々に説明したり相談したりしてゐた。その時室のはじつこにゐて、貴君の熱心なことや不思議な遊さに感心してゐました。私は貴君がその時分から非常に好きです。然し俊寛は氣に入りませんでした。私が美術家だから氣に入らなかつたので、恐らくかう思ふのが本當の様です。妄評多罪とは思ふが。

五

……次いで第三の「連獅子」に就ては、私は此の劇を此度の出しものうち、最も會心に見物しました。就中主役三津五郎氏の演技に、引いて、うしろの囃子、唄、三味線。凡て舞臺の有様。——實に心にかなひ、感心して、劇の世界に酔ふことが出来ました。

私は思ふが、歌舞伎劇の持つ美しさは、一番完全には今のところかう云ふ「所作事」に残つてゐると思ひます。で、それには型がある爲めに、且その型をいづれは尊重してくづさぬ三津五郎氏の様な名手がある爲め、過去二三百年の精緻な文明が築き上げた歌舞伎劇の美しさは、こゝで一番亂れずに存続してゐる様である。——親獅子と子獅子との出から、子をためす振りごと、蝶

に戯れる所作。凡て美しく運ぶ。殊に二度目の狂ひの出になつてからの美事さは、全く「息もつけぬ」美感である。で、しまひに「獅子の座」をまことに白頭赤頭の亂れ舞ふ豊満な美しさに至つては、世の何所へ行かうとも、日本の此處の此の舞臺でなしには見られぬ魅惑があると思ひました。私は當分——今後猶審美に就ての考へなり見る眼が進まうとま、恐らく益々——かう云ふ舞臺に對しては、謙讓なる觀者で、欣びを享受します。厚く演者に謝する理由であります。

六

就ては、私は此の間、バヴロワ夫人の演技を見たのでした。いづれ關連のある事故此所に併せて記します。——最後の出しもの、時でしたから、有名な「瀕死の白鳥」も見ることが出来ましたが、その他、まとまつた舞踊劇や、ヴォリニン氏や、一座の人々の藝を見た。バヴロワ夫人に就ては云ふ迄もなく、何れもあの一團の人の技術は立派なもので、世にも鮮やかなものである。演出の効果や、練習、苦心、堂に入つたかたち、その連続、姿體、……それ等には由分がない。多分あのレベルで、あの西洋舞踊は、十全であらうと感じます。人々の讚嘆はよくその理由を解

することが出来ます。

が、私には、バヴロワ夫人の劇團の劇には、満足することは出来ませんでした。——今云つたところに對してはたしかに感心も鑑賞もしました。讚嘆もする。然したゞ「美」を心へかつちりと充分に受けるには、あの藝境では足りない。或る美の感情とか、綺麗なること、さう云ふムー・ド……は充分にあれで享けられるが、「踊り」とはさう云ふものか、と思ふと、まだくその藝境から汲める程の美にはあれでは到底距離があると思ふ。否、「距離がある」のではなしに、夫人の劇道の持つ美は、此處に對比して云へば日本の舊劇所作事などの持つ美とは、そのモチーフなり効果に於て、先づ含蓄のスケールが甚だ「違ふ。」如何にバヴロワ夫人やヴドリニン氏個人は巧みに演出しやうとも、その劇と云ふ氏等の美藝の總括に於て——私は敢て云ふ——西洋の舞踊は、日本の舞踊に對してはその含蓄の美の量積が格段に異なる、と思ふ。

——量と云ふと語弊がある。質。即ち「深さ」と云ひ代へた方がいゝ様ですが——

西澤の舞踊は、そのモチーフに於て屢々「人を樂します」程度の「踊りの起原」的境地を別段脱してゐるとは思へないものが、日本の舞踊は、さう云ふ簡單な幼稚さには止どまらず、ずつと開明な考察なり試練を経て、充分一つの「美術」の深玄なる境地に確立してゐると思ひます。

この判断は強ち「私」が西洋の舞樂に馴れてゐない。つまり親近がない。好みが少ない、そのせいである——とは云ひ切れぬ様です。

七

西洋舞踊は、その美を表出するテーマの所存が或るところ迄舞踊が形ちなり音樂のリズムにつれて發展をする。その發展の仕組みそれ自身を以つて、見る眼に美感を與へるとか、或る流麗なムードへ人を引き込む、それを編み出すと云ふ程度の、官覺美を目標に組み立てられてゐる。そこを演出すれば能事の足る軽いプロセスとなつてゐる様です。即ちそのプロセスに適する程度の輕やかな部分は、至るところ、殊にバヴロワの演技の場合には、完全な表出を備へてゐる。然し、それ以上のものは、演者にはないのではない、但、劇それ自身の骨に豫め仕込まれてゐない。

日本の舞踊は之れに反して、軽く官覺へ觸れる程度では止まない。寧ろ、形ちなり樂音のリズムを要所々に締められるだけ味をきびしく締めて行つて、そこで或る美のアクセントが一々情操なり形ちの底までぶつかり、即ち美しくしさは演者の演出次第で如何に高くも生きくと、丸彫

りに彫り起されるやう、テーマが深くはいつて、豫め劇それ自身が仕組まれてゐる。——そこで西洋のものと日本のものとは、格段の相違を結果に起します。

西洋舞踊の明るい流麗な綺麗さはたしかに獨特のものではある。たゞ、その一境のムードなり美感を目標に、淺く根を洗つて仕組まれてゐる爲め、——これは「私」だけの實感かも知れぬが、それならそれとして云ふ——見てゐてフトそのムードからはぐれる場合があると、その時心に美（美術に云ふところの美）が起れば起る程、西洋舞踊はたゞ輕やかな一吹きの微風に過ぎなくなりません。その反對に、日本の舞踊は人をはぐらせない。およそ美のわかる者ならばその人の心に美が起れば起る程、彌が上にもその影像を助長して、テーマの涸渴は示さぬ、つまり根を非常に深くさらつた、そこに獨特の不思議な表現を立てたところがある。

美術第一に出来てゐる、日本の舞ひは。「人は」第二、その美を現出する爲めの全き材料に驅馳される。で、彼がよく舞ふ場合、初めて部分が全體へ貫なつて、大きく美感のうちに一つの世界が起る。バヴロワの場合の様に、演者の個性が劇全體を蔽ふにしては、寧ろ日本舞踊の場合にはテーマが大きく、個性技以上の古典的スケールに擔つてゐる。

それ故、その深い藝境で三津五郎氏の様な名手が演技を示してくれれば、彼の美しさは舞全體

の美しさに應じて、心を撃ち、たゞにムードだけでなく、美の中の陶醉をまき起す。例へば靜止的な一つの形ちの「部分」に就て云つても、彼の兩肩に垂れる毛を持つてかまへた、立派な、おごそかなる、そこに「獅子の精」を示現する雄々しい白頭の像などと云ふものは、——バヴロワの白鳥姿はうまいが、卑近である。——之等が日本人の無二の健全な傳統が美藝の中に建てた、不滅の紀念碑に當ると云へるでせう。その象徴の深さ。賢さ。根強さ。

——それから比較して思ふと、この三津五郎氏のおほどかな獅子がやがて果斷に適確に、所作舞臺に確たる轟きを立てつゝ舞ふその都度生れては轉ずる形美の鮮影を以つて心を蔽ふ。それに對しては、青白い光りを浴びて楚々として出て來る西洋の白鳥は、その綺麗なことは正に一品に綺麗な、可憐な、稀れに見るものではある。然し、審美の中では、演者は如何に巧緻と雖も、些少なる、フツと琴線へ觸れて來てその美音と共に然し忽ち又生活の外へ消え去る、夢の花の様な、小品の感がしたのでした。日本の獅子の方が遙かに核心へありくと食ひ入るのでした。

中幕の黙阿彌物は所詮末梢にすぎぬ、その面白さはつまり「舊劇」と云ふ仕組みの立人に徹した、つまり云ふ「樂屋落ち」の仕組みにあるものと感じました。舞臺や、仕料の段どりや、床、鳴もの、科白……などをうまく使ふ。そこへ外からよせ集めのモチーフを手ぎはよく盛り込む。かうすればかうなると云ふ手順を呑み込んで仕事がしてある。その點はさすがに綺堂氏の作よりかつがないとは思ひました。そこで、のんきにもしろく見物はしましたが、新聞批評家の云ふ「歌右衛門の淺岡にはもう食傷させられてゐるところへ又五郎の千代松が天才的などころを見せてゐるので、この一幕又五郎がさらつて行つたかたち……」（うみうり）以上には、別段くどくは感じませんでした。

因に云ふ。この新聞批評家の評のしかたも、自づと書き刷れる間に型の出來た、又一つの立人味で、ヘンに面白く感心しました。

が、黙阿彌となると、寧ろ二番目の「三島話」の方がどうせ大出鱈目で、唯「舞臺」や「鳴物」「段取り」……それ自身で「このところよろしく」芝居をして行く。つまりさう云ふさばくしたところ、なまじ作者味感などないところが、却つてよく、丁度寫し繪の手順が面白く、末期の浮世繪がそのへつぽこ味感で却つていゝ様に、此の芝居はたゞおもしろい、時に見るにいゝ、のん

きなものでした、多分、我々東京の人間の末梢神経に屢々ふさはしい、殊に少なからずそこにイカモノ味もある、——さう云ふものなのでせう。難はどうせあれならあれでもつと小汚なく、品川新宿味に、變に、くさく、ドン帳に徹してやるのを見たいが……そんなことは云つても仕方ない。中車氏が親切に演じてゐるので驚きました。總じて此の月の狂言では中車氏が出て來ると何となく好意を感じて、子供つぽく、うれしくなりました。——かう云ふ對人の愛情も芝居では獨特の感で好ましく思ひます。

○

先づ大體以上の様な受感であります。

十月上旬記す。(十一年十月號、新演藝)

神靈矢口渡

矢口渡は船唄で幕があきます。先づ例によつて床の太夫の語り出しで「芝居」が始まると、——それは見物の氣持へしんみりと水を打つ操なもので——やがて花道へ新田義峰と傾城うてなどの二人連れ立つた姿が現はれます。

帝劇の花道では之れも半分以上無効果でしたが、この美しい一對は、男は黒、女は藤色。憂れはし氣な、何か事件を持つてゐるにちがひない、若い夫婦(?)に映じる筈です。二人は本舞臺へかゝると、渡守頓兵衛の家の格子戸がそこにある、そこから家の中へ訪なう聲をかけます。今夜はこの家にとめて貰つて、明日舟を出して貰はうと思つてゐるのです。

舞臺、即ち頓兵衛の家の中はこの場合無人です。唯暗色の二重の壁の前に白い行燈だけしよんほりとおいてある。——門口に訪なう聲のするにつれて、その時家の奥からは二重の行燈のところに、つまり舞臺の真中へ、その暗いくすんだ色の唯中へ明るい黄色の衣裳の娘お舟が現はれます。燃え立つ赤の帯。黒襟。それに眞白な顔。——

その形ちは、一撃に人を印象せずにはおかない。で、このお舟がこの劇にとつてはこれから重要な女主人となるのです。その人の——存在と云ふか——姿を、忽然とくすんだ中へ華麗な明るさで示して、見物の視線は一齊にこの若い娘へ集まることになる。

と、この芝居では、テーマが又直ちに満場の注意を一身にあつめたまゝ、この娘の「姿」と一處にすぐそこへ歩いて来て、——お舟は二重を下りて平舞臺へ出で、門口へ来る。別に何の氣もなく戸を開けて客人を見る。と、そこには水々しい若い男がおとなしやかに立つてゐる。お舟は一眼その男を見ると、心を戀風に烈しく吹き徹されるのです。

しかし男は一人ではなく、二人だ。女房と思はれる連れの女と一所にゐる。お舟は男に乞はれるまゝに家の中へ喜んで入れる。しかし女は餘り氣持よくなく入れる。それから二人を離れの川に面した中二階へ一先づ休ませることにします。しかししきりに連れの女のこと氣にかゝつて、

鬱陶しく思つてゐるのです。

と、そこへ離れから心持急いで男が一人お舟のところへ出て来て、連れの女がしやくを起したから、湯を貰ひたいと用事をたのみます。お舟は男のたのみを快よく承諾する。そして、あなたのお連れの方はお連れ合ひか、又は妹御さんかと突嗟にきいて見ます。男は、あれは「妹だ」と言下に答へる。お舟はホツとして、然しやがては「思ひ亂るゝ何としやう……」、湯をわかすのにせつせと七輪をあほいでゐるが、わく／＼するので灰かぐらを立たせて了ひます。あわてゝその立つ灰をおさへにうちわをかざして男を見る。——とそれが計らずもお舟の思ひなり仕草がそこに「ゐる」男を當の相手に、つまり積極的になる、一つのきつかけとなつて、彼女はそれからまともに、大膽に、男を目あてに、變轉の限りをつくして振舞ふこととなる。床の太夫が一方綿綿と彼女の戀情をそこへ語り込んで来る。「十日も廿日も、十年も百年も、観音様へお参りになら私もつれて行つて……」と男に思ひを懸命に打ち明ける。

男はこの間始終黙つて一つ處に坐つてゐます。と、そのまはりをお舟はもう狂氣のやうにしきりとまつはり、断えずそこには美しい畫面を生じて、そのうち或るきつかけで男がすつくとその場に立ち上ることがあります。と、お舟はすぐ片わきにより添うて、はにかんで坐り、首をかし

げる。——此の二人は既に此の時は似合の一對の氣がして来る。お舟は「ほれたが因果ほれられたが」と云ふ。望みをかなへてくれると「云ふてくれたがよいわいな」と云ひます。男はほだされて了ひます。「大事なくんば……」云々。念には及ばぬ、とここで承知をするので

二

しかしそれにしても、此の男が此處へ一人で出て来た、つまりその原因になる、離れの連れの女のしやくと云ふのはどう成つたのだらう？

と少し氣になるきらひがあるかもしれませんが。然しお舟と男は兎に角此處で今了解が出来たのだ。二人がそこで互ひにより添ふのは、之れは自然なことです。と、不思議なことには、二人はより添ふたかとする間に、あつと忽ち互ひにうしろへのけぞつて氣絶をしてしひます。離れからはそこへ傾城うてなが驚いて飛んで来る。

しやくは？否、そんなことよりは、二人がどうして倒れて了つたのか、此の方が餘程不思議だ。――

と、その「不思議」の原因は今出て来たうてなが誰よりもはつきり知つてゐるのです。見物はつまりうてなに就てを疑ふより、何より、却つて今はこの人に「期待」をつないで了つて「しやく」はもう癒つた事に事後承諾で不審なく受け入れてしまひます。

油断もすきもないきび／＼とした運びです。

離れから出て来たうてなは即ち男のそばにかけよつて「義——」とその名を思はず呼びます。然し氣が付いて、改めてあたりを恐る／＼伺ふ。それから、「義峰様」、お氣をたしかにとしきりに呼ぶ。(これが此の劇で初めて義峰の名を呼ぶたつた一度の場合です。)

うてなは、これはたしかに「御旗」の罰が當つたのだと云ふ。無論さう云ふ彼女は義峰とお舟が馴れ初めた不義を言外に看破してゐる。義峰の懐中へ手を入れて、その「御旗」と云ふのをうやうやしくとり出す。それを二重へ上つて壁の正面へする／＼とかけます。と、倒れてゐた二人は俄かに正氣付いてむつくり起き上る。——と、その時更に花道にはけた／＼ましい氣合があつて、世にも卑賤にグロテスクな下人六藏が踊りつ、床にのりつ、グナ／＼になつて飛び出して來ます。見物は諸事併發の息をつく暇もない段取りに、ずるずる引きずられて、瞠目するだけです。